

---

# 銀翼の天使達

日高 蛭

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀翼の天使達

### 【Nコード】

N8235V

### 【作者名】

日高蛍

### 【あらすじ】

幼い頃、大空を見上げて手を伸ばした全ての大人へ。  
目覚めたら小さな宝石となっていた主人公。そこは魔法と科学の混ざり合う奇妙な世界。この世界では、人と空がとても近かった。自由のない体となり途方に暮れる主人公を拾ったのは、ソフィーという名の少女。ソフィーは新米のパイロットであり、最高のパイロットの証「銀翼」の称号を目指していた。手も足もなく無力な主人公と、あまりに未熟で危なっかしい少女の二人三脚の物語。  
世界と種族と音速を超えたボーイ・ミーツ・ガール。

## プロローグ

(プロローグは世界観を表現する為のものであり、本編には一切関わりません)

谷底に築かれた砦。

敵国の隙を突き突貫工事で造られた最前線補給基地には、多くの兵士達が待機していた。

ここは軍隊を運用する上で重要な要所だ。

実用レベルに達したばかりの拙い電撃戦を行う上で、伸び切った補給線を支える命綱。

既にこの戦争がなぜ始まったか、なぜ殺し合っているかなど問題ではなかった。

少なくとも、ここで戦いの準備に明け暮れる者達にとっては問題ではない。

命令に従い武勲の為に剣を磨く騎士。

研究を行う為義務として戦場に立つ魔術師。

そして、金の為に命をすり減らし時には友であろうと殺し合う傭兵。

しかしながら、結局のところここに己が意思で前線に立つ者などいないのだから。

「おい、聞いたかよ」

傭兵の一人が声を上げる。

「近々共和国のエース部隊が、ここに攻め込んでくるって噂だぜ」

「エース、ねえ……少数精鋭で攻め落とそうっていうのか？」

帝国軍がこの谷底を拠点にしたのは勿論理由があったることだった。

近年急激に技術発展している戦闘機、それらを迎え撃つ為である。谷底であれば戦闘機のアプローチルートは相当限られてしまう。となれば、迎撃はある程度容易い。

針山のように並べられた高射砲、機関銃、対空機関砲。更には谷上に配置された魔法使い。

谷の中に存在する基地を強襲するには、戦闘機は谷の中を飛ばなければならぬ。

そうして飛び込んできた得物を下の重火器、上の魔法で挟み打つという作戦であった。

噂話をする傭兵達に騎士の一人が口を挟む。

「ここは前線に潜んだ帝国軍の食糧庫だ。だからこそこれほど過剰な防衛陣を敷いている。突破などありえんさ、さあ話などしていいで仕事に戻れ」

「へいへい。でもよお騎士様、正直こつて危ねえんじゃねえか？共和国の連中だっていつまでも野放しにはせんだろうよ」

「ふん。もし状況が危うくなれば、お前達傭兵は真つ先に逃げ出さるうに。つまらん心配などするな」

「……聞き捨てならねえな、それは。俺はギルドを通して正式な依頼でここにいるんだぜ？逃げたりなんかすりゃあギルドの仕事の幹旋がなくなっちゃう」

空気に緊張が孕まれる。

騎士がなにか言おうとした瞬間、甲高いサイレンが基地に響いた。

「敵襲！」

「ほら、いわんこつちゃねえ！変なことをいうから！」

「な 先に言い出したのは貴様ではないか！」

「いいから機体に取り込むぞ、てめえら！」

駆け出す傭兵達。

騎士は王宮魔術師である臨時部下の元へ駆け寄り、叫ぶように問う。

「状況は！？」

「しばしお待ちを！ただいま魔力を増幅させて　繋がりましだ  
！」

《こちら偵察隊、敵を視認、戦闘機です！数は3！》

「3機だけだと！？　機種は！」

《あれは　　レイ・ファイターです！》

レイ・ファイター。

戦争初期に登場した、軽快な機動力を有するモスグリーン色の戦闘機である。

初めこそ高い機動性で敵機を撃墜してみせたが、鹵獲された機体を調査した帝国はその装甲の脆弱性・エンジン性能の低さ・機動の癖を発見し攻略法を構築した。

即ち、重装甲と高出力エンジンを搭載した機体による一撃離脱。

戦術の構築依頼この戦闘機はただの的として扱われるようになり、拳句被弾すればすぐ火を噴くことから「レイ・ライター」などと馬鹿にされる始末だった。

そんな旧式な機体をたった3機持ち出すという行動に疑問を覚えつつも、騎士は伝令を飛ばす。

「傭兵部隊はストライカーにて待機！地獄猫部隊は空に上がれ！全ての火器をセットしろ、魔術師部隊は例の作戦通り魔術儀式の準備だ！」

指示はすぐさま末端まで行き届き、敵機を迎える準備は完了した。

《~~~~~　~~~~~　》

鼻歌が聞こえた。

どうやら、レイ・ファイターのパイロットが歌っているらしい。舐められたものだ、と自然と眼光鋭くなる騎士。

空の向こうに3つの点を確認し、全ての兵に攻撃開始を指示した。谷の間を縫うように飛ぶ戦闘機。

号礼と共に様々な大きさの弾丸が戦闘機を襲った。

上は88ミリ砲弾、下は9ミリ拳銃弾。

絶対に通さぬという意味が滲み出るほどの弾幕。

《~~~~》

レイ・ファイターのパイロットはそれでも鼻歌を止めない。  
僚機2機が離脱する中、真ん中を飛ぶ機体だけ動こうとはしなかつた。

《あらよ、っと》

機体をローリングさせる。

下と左右が岩場の谷中で、躊躇なく機体を回す。

自身に食らいつかんとする弾丸、それを紙一重でかわすパイロット。  
ト。

「避けるか、化け物ッ」

だがそれとて、帝国側の計算内である。

「魔術師隊、今だっ！」

崖上にて一斉に詠唱を唱える。

谷の中に魔力が満ち一定空間内を高熱化する魔法。

空気は焼かれ熱で膨張し、更にプラズマ化する。

電離し稲妻のように光を走らす大気。

機動力を限定した状況での、閉鎖空間での空間制圧魔法。

数十人の魔法使いを動員した鉄壁の布陣である。

避けようもなく光球に突っ込むレイ・ファイター！。

「やったか!？」

閃光により視界が塞がれる。

しかし皆勝利を確信していた。

続いて谷の中に反響する爆発音。

彼らはそれを、戦闘機の墜落した音だと誤認する。

「よっしゃあ!」

「よし、作戦通り!」

勝鬨を上げる兵士達。

喜び叫ぶ声に、高射砲が『握り潰される』音が重なった。

「なっ!?!」

爆発による土煙、その中から現れる『人影』。

10メートルを超える巨人。

鋼の手足を持つ巨兵が、戦場の真ん中に現れた。

「懐に入られたっ！？撃て、魔法でも銃でもいい！数で攻めろ！」

鋼の巨人は手にした大剣を台風のように振り回し、敵兵器を破壊してゆく。

《お前ら、引け！ここからは俺達の仕事だ！》

叫ぶ傭兵。

彼らもまた、鋼の巨人という甲冑を身に纏っていた。

緑色の巨人を取り囲む、傭兵達の巨人。

油断なく包囲を狭めるが、傭兵はそこで気付いてしまった。

巨人の背負う翼、その地の色が銀色であることに。

《 銀翼だと！？ 》

銀翼と呼ばれた巨人は動く。

刹那、10体の傭兵が駆る巨人達は全身を解体された。

《一瞬だと！？ありえねえ 》

金属片が地面に落ちる。瓦礫と化した巨人達。

《 行きな 》

強襲を行ったパイロットが呟く。

《戦う意思のない者は失せろ。守るべき女がいる奴は軍人なんてやめちまえ》

たった一機に攻略された陣営は、その言葉を引き金に撤退を開始した。

パイロットの気の変わらないうちに、生き残る為に。

「馬鹿な、馬鹿な馬鹿な……」

呆然と騎士が呟く。

一昔前まで戦場の花であった騎士。

しかし、その栄誉は新兵器によって奪われた。

鋼鉄の肉体を持つ、機械の巨人によって。

信じられないだろ、プロローグ全編描き直し、これで二度目なん  
だぜ……

小説のツカミって、いやほんと難しい。

二度と三人称なんて書いてやるものか。ちくせう。



## 邂逅

目を醒ましたら石になっていた。

どこだ、ここ。

目を醒ましたら、そこは屋外だった。

生憎こんな場所で眠った記憶はない。

……まあ、いいや。とりあえず起き上がろう。

体を持ち上げようとして、体が動かなかった。

おや、金縛りか？

なんて大層なものではなく、大方、変な寝相のせいで体が痺れて  
いるのだろう。

野宿の経験などないが、硬い地面で寝ると体が痛むというし。

(よっこらしよ、……と?)

声が出ない。

風邪で声が出せない、というのとは違う。

発声方法を忘れてしまったかのようなのだ。

(参ったな)

体の感覚が痺れている。

肢体は動かせない。

声も出ない。

はい、終了。

軽く笑おうとして、それすら行えなかった。

途端

孤独感が、全身を覆った。

自分でもよく解らない恐怖に戸惑う。

必死に自身を落ち着かせ、揺れる視界を安定させる。

そ、そうだ。これはあれだ。

一人暮らしの人が病気で寝ている時の不安だ。

大丈夫、冷静になれ、男だろ俺。

ひよっとしたら本当に、なにか病気かもしれない。

外で寝ていたのはよく判らないが、部屋の中で孤独死するよりはマシだ。寝惚けたか夢遊病か知らないが、そこはラッキーかもしれない。

あとは誰か通りかかるのを待つだけだ。目が開いていて身動き一つ取らない人間をほっとく薄情者は、この国にはそういないはず。

……だったら、もう救急車呼ばれていないか？

冷静になったことを後悔した。気付かなければ良かった。

いや、きつとまだ早朝なんだ。そのうち誰かが……

……ここ、何処だ？

真っ先に疑問に思うべき案件が、今更過る。

視界に移るのは雑草らしき緑のみ。

何処だ、ここは。

道端の草だというのならいい。

だが、どこぞの林の中なら？

このまま誰にも発見されず、そのまま

(嫌だ)

嫌だ。そんなのは嫌だ。

なまじ、ニユースで聞きそうな出来事である故に現実感があり過ぎた。

落ち着け。現状を、今どこにいるのかを把握しろ。

さっき視界が揺れていたのを思い出す。眼球は、麻痺していない。多少でも視野が広がれば、あるいはそれをきっかけに全身の麻痺が消え去れば。

多分の希望的観測を無理矢理納得し、視界を動かすことに集中する。

再び視界が揺れた。

( よしっ！ )

そのまま、横に動かす。

焦点はそのまま揺らぎ、

360度回転した。

( う、うわああああああああああああっ！ )

一回転した、視界が、視線が！

体は！？脳は！？どこに行った！？

自分が眼球のみとなったような錯覚。

……錯覚、だよな？

冷静に、心を落ち着かせる。落ち着くかよ畜生。

……ちくしょう。

しばらくして。

お世辞にも落ち着いたとは言い難いながらも、俺は現状把握に努めた。

どうやら、眼球のみ、というよりそもそも人間の体を完全に喪失しているようだ。

結論からいえば、石だった。

幽体離脱と例えるべきか、自分という意識の視点はその中心  
透明な宝石？ から1メートルほどであれば離れて見るこ  
が出来る。

それが自分だとなぜか解った、その赤く透明な宝石が。  
直径数センチほどか、対比物がないが多分それくらいの大さの  
宝石。

カットすらされていない歪な造形だが、ダイヤモンドともルビー  
とも違う涼しげな結晶。

(これが、俺？)

血肉が通っているはずもない、ただの石ころ。

だというのに、得心した。

今、俺は石なんだ。

なんてこった。そう呟き(声は出ないが)空を仰ぎ見る。

巨大な、巨大過ぎる鯨が横切った。

はは、嘘だろ？

何度驚けばいいんだ？

鯨はゆつくりと、力強く空を泳ぐ。

いや、鯨じゃない。

飛行船？

その船の表面に人工的な光沢があることに気付いた。

なんだ、飛行船か。びつくりした。

しかし珍しい。

ずっと昔にヒルデンプルク号なる船が事故を起こして以来、飛行  
船は敬遠されてきた。

技術の進歩と共に安全性は高まったが、それは飛行機も同じであ  
り。

レジャーや広告用くらいにしか用途のなくなった、袋小路な航空  
機だったはずだ。

……我ながら、好きなものとなると平静になるなオイ。  
だが、いいものだ。飛行船は専門外だが空を飛ぶ以上航空機。  
大好きだ。愛している。

しっかし、巨大だな本当。

全長数百メートルはあるんじゃないか？

……やっぱり普通じゃないぞ、あの飛行船！？

飛行船は普通、流線的な造形をしている。

なのに今頭上に浮かぶ船は、まるで旅客機だ。

というか、通り過ぎる間際、船の後部に重そうな機関部が見えた。

絶対飛行船じゃない。つーか軽航空機じゃない。

軽航空機とは、つまり空気より軽い航空機のこと。気球とか飛行船とか。

あれほどの大きさで、主翼のない航空機？

……馬鹿げている。

常識を覆す光景に呆けていると、もう一つの影が空に舞った。

なんだ、次は。空飛ぶ円盤か。あるいはパンツか。

爬虫類？

小さな鍵爪に飛行の妨げになりそうなほど太い脚部。

蝙蝠のような革を張った翼。

(ドラゴン……)

ファンタジーか。

あまりの現実乖離に眩暈を覚え、そのまま俺は意識を手放すこと  
を選んだ。

……眩暈を起こす頭もないがな！

転機があったのは、心をからっぽにする術を手に入れてしばらく  
経った後だった。

「見つけた」

声に気付き、意識を呼び起こす。

「やっと、見つけた……！」

まっ白な髪。

蒼い瞳。

「私の」

天使を連想させるような。

「私だけの、クリスタル」

白亜の少女だった。

## 一言後書

『邂逅』って書くとカッ！いい。でも「『出会い』でよくなっ。」と  
言われると反論出来ない。

## 航空ギルド

自分が、石ころになったと納得したのはいつだったか。

なぜ自分が石になったかは判らない。俺は人間だったはずだ。

しかし、人間だった頃の記憶ももう時の果てに摩耗しきった。

誰か来てくれれば、人の気配さえあれば心が疲れ果てるのも避けられたかもしれない。

だがどうやら俺が宿った石は、人間の到底訪れない場所に存在したようだ。

一週間は期待した。

一か月は諦観した。

一年は絶望した。

一世紀は無となった。

それ以上は、もう、どうでも、いい。

「銀翼の天使達 完」

……ってなれば、斬新だな。

「私だけの、クリスタル……！」

全体的に真っ白な、儂い印象の少女だった。

髪は青みがかり、肌は薄っすらと赤みを帯びている。

ここに来るまで苦労したのか、全身薄汚れている。

決して純白ではないその姿は、返って若々しい生気を帯びている。

そして、その瞳は。

蒼い瞳には、比類なき強い力を宿していた。

……可愛い子だな。

「これで私も一人前っ」

少女は俺を拾い上げ、平らな胸に抱く。

畜生！畜生！石じゃなければ堪能出来たのに！感触なんてないぞ！  
少女は俺（石）を空に掲げ、その輝きを楽しむ。

（こんちわー。チーース！ハーロー！！）

話し掛けてもニコニコ笑うだけ。聞こえてねえ。

少女は脇の鞆から紐の付いた金属の円盤を取り出した。

天使の彫刻が施されたメダルだ。大きく穴が開いており、そこに俺を嵌め込む。

イヤリングのように螺子で固定するあたり、石の形状や大きさを  
選ばない量産品なのだろう。

メダル・オン・俺をペンダントのように胸元へ。

ここが俺の特等席だというのか。感触を感じられないこの俺につ！  
俺を見つけたことで目的は果たしたようで、少女は来たであろう  
道を引き返す。

ふーむ？

この子、俺の存在に気付いているのだろうか？

俺が宿っていると知っていないながら、この石　少女曰く『クリ  
スタル』を拾ったのだろうか。

なんにせよ、俺に出来ることはない。

大人しく胸の感触でも楽しもう。

二重の意味で感じないがな！くどいようだが！

どうやら、ここは異世界らしい。

だってドラゴン居たし。他にもグリフォンとか悪魔っぽい奴とか、  
とにかく魔物と称すべき生物を度々目撃して納得せざるおえなかつ  
た。

ファンタジーかよ、と思っていたが……それにしても、妙な物も  
見かける。

初日に見かけた主翼のない大型機。



あるいは翼こそあるが、妙に現代的な、だが俺の感覚でいえば古臭い飛行機。

そう、飛行機を見かけたのだ。

俺が見かけたのは普通の、主翼が若干後方に下がったジェット機。ぱつと見だったが戦闘機のセイバーに近かったと思う。

技術は際限なく進歩するものだ。

きっと、この世界はしばらく前まで古典的なファンタジー世界だったのだろう。

しかし俺のいた地球がそうであったように、なにかのきっかけで急激な技術発展を果たした。

……と、推測する。違ったら恥ずかしい。

(しかし……この子、話さないな)

独り言を延々と呟いていたらアレだが、せめて現状のヒントくらい漏らしてほしい。

現在彼女は野宿の最中だ。火打石で起こした炎の前で足を抱えて座っている。

火打石というのが、実に技術レベルを混乱させる。ジェット機があつてライターがない？

いや、それよりも大事なことがある。

若干の距離であれば視点移動出来るのだから、今ならスカートの中を覗ける！

紳士な俺はそんなことしないが。

ただ、それとなく彼女の真正面に移動して、それとなく下に移動するだけだが。

「ん……誰っ!？」

気付かれた!?

周囲を睨み付ける少女。そういや名前すら知らないな。

「……気のせいかな」

うん、気のせい。俺が保障する。

女の子一人で野宿とか不用心だからな!俺も見張りをするんだ!

なにも出来ないが！

「やっぱり変な気配を感じる」

……えーっと、もしかして、もしかしくても俺？

「まあ、いつか」

「いいよー！ぜんっぜんオーケーだよ！ところでどうして日本語を話してるのー？」

返事がないせいで結局町に着くまで、俺は妙なテンションを維持していた。

3日後。

あつという間の3日間だった。

人間がいただけで、話せるわけでもないのに飽きなかった。

最初、一人でいた頃は、ひたすら苦痛だった。

感謝するしかない、もし彼女が俺をただの宝石として転売しても、なにかの材料とかにしても構わない。

あそこで何年も放置されていた可能性を考えると、心底ぞつとずる。

いや、別に彼女に捨てられたわけじゃないぞ。

町に着いた。

中世風　と評するべきなのか？ヨーロッパ旅行なんてしたことないからイメージでしかないが。

狭い街道に多種多様な人々。

煩雑としつつも、住人達は活き活きとしている。

よくよく観察していけば、耳の長い美女がいたり背の小さい髭面がいたり。古典的なファンタジー世界だ。

空に、航空機や飛行船（？）が飛んでいる以外は。

いやに数が多い。近くに空港があるとしても、空が埋まり気味と  
いうのは異常だ。

と、飛行船が近くに着地してくる。

……あれ、意外と小さい？

降りてきた飛行船は、トラック程度の大きさだった。運転席から降りたオツサンが荷物を店先に降ろす。

なんと、この世界では空飛ぶ車が一般的らしい。確かに空に浮かぶ大半の飛行船も、小型のものがほとんどに見える。

トラックほどの積載量を持ち垂直離着陸可能とは、異世界侮れない。

周囲の物が吹き飛ばないあたり、ホバリングではなく異世界特有の不思議パワーで浮いていると予想。反重力とか？

まあ、欠点もあるのだろう。俺の知っている飛行機が飛んでいる以上万能ではないはずだ。見た目からして速度は出なさそうだし。

少女は迷うことなく進み、やがて一軒の家に辿り着いた。

「ただいまあ」

疲労からか間延びした声を出す少女。

返事はない。彼女以外の住人はいないのだとすぐ判った。

少女は荷物を降ろし外へ出る。しばらくして桶に水を汲んで戻ってきた。

井戸が外にあるのだろう、と考えていると少女が服を脱ぎ出す。なるほど、体を拭くのか。どれお兄さんが見守っていてあげよう。

「……………」

やばい動きを止めた。勘が良過ぎるぞ。

仕方がないので窓の外を見る。一応見張りのつもり。

少女は違和感を振りきったのか、体を洗い始める。

お、おおっ！窓に肌色が映っている！

ガラスの質が悪いのか、ぼんやりとしか判別出来ないのが残念だ！  
続いて衣擦れ音。終わった頃合いを見て、視線を向ける。

少女は既にベッドに入り熟睡していた。

疲れていたんだろう。俺もスリープモードに入るか。

おやすみ、白亜の天使さん。

「おやすみ、なさい」  
返事が返ってきた。まあ、偶然なんだろうな。

ところで俺はなにスリープモードとか普通にしているのだろう。  
俺はパソコンか。自慢じゃないが数学は苦手なんだぞ。  
例えばほら。

$$2 \times 2 = 4$$

$$4 \times 4 = 16$$

$$16 \times 16 = 256$$

これくらいはなんとか暗算出来る。だが、

$$256 \times 256 = 65536$$

$$65536 \times 65536 = 4294967296$$

$$4294967296 \times 4294967296 = 184446744$$

$$073709551616$$

こつという領域となると、さすがに……

……なんで暗算出来る俺？

「んっ、うむっ……」

少女が身動きした後、ゆっくりと起き上がる。

俺がスリープモードから復帰したのは、彼女が目醒めた気配がきつかけか。

ベッドの上で口を開いたまま遠くを見つめる少女。朝は弱いのか。ぼんやりと焦点の合わぬ瞳で俺を見つめたあと、にへらと笑った。  
「これで私も、いにちんまえ」

言えてない言えてない。一人前、だ。

そういえば前にも同じことを言っていた。俺のような石、クリスタルを所持するのが一人前の証なのだろうか。

自分のクリスタルを自分で発見することが、なにかの技能者としての箔とか？

突如芽生えた俺の数学的天才性はさておいて、なんとというか見て飽きない少女だ。

お、こけた。

頭をフリフリして、伸びをする。

「ふあはああ」

なんとも美少女台無しな欠伸だ。

「いい天気っ」

目が覚めてからはてきばきと行動する少女。

昨晚と同じように桶に水を汲み、タオルを用意して……

「あれ？」

……なにやら探し始めた。

鞆を覗いて、箆笥を引いて、ベッドに潜り二度寝して。

「ころころ。」

「ふあーう」

再び欠伸、そして溜息。

「せっけん、買い忘れちゃった」

諦めたらしく水だけで顔を洗う少女。

犬のようにふるふると頭を振り、今度は朝食の準備を始める。

フライパンを取り出しガスコンロ……らしき器具の上に乗せる。

スイッチを入れようとして、動きを止めた。

「そっだ、クリスタルを手に入れたんだっ」

と、俺を手を取った。

視線が高くなったことでコンロを眺められるようになる。

コンロの下に丸いメダルが嵌っていた。

俺と同じメダルだ。やはり石が嵌っている。

ただ、石の色が濁っている。宝石としては価値がなさそうなレベルだ。

「……おい？」

「……………」

よかった、返事はない。

この石、クリスタル全てに地球人の意思が宿っていたりしたら怖過ぎる。

声が届いていない、ということはなさそうだ。共鳴みたいなものを感じるしな。

この石には意思がない。洒落ではない。

ソフィーは元々コンロに設置されていたメダルを外し、俺メダルを嵌め込んだ。

むむつ。俺からなにか『力』が漏れ出した。

『力』は回路を伝い、コンロに火を灯す。

(え、ええ、ええええええええええ )

俺、ガス扱いかよ!?

プロパンガスボンベ扱いかよ!?

~~~~~

鼻歌を歌いつつ卵をフライパンに落とす。

菜箸をいきなり黄身に突っ込んだ。

~~~~~!?

なんか焦っている。

「あ、朝はやっぱリス克蘭ブルエッグ!」

一人しか居ないのにいきなり叫んだ。

……目玉焼き作るうとしてたな。

~~~~~?~~~~~?~~~~~?~~~~~?~~~~~?

視線が泳いでいるし、鼻歌が外れまくってる。

なにこの子面白い。

どつやら今日は外出するらしい。鞆に道具を詰め込んでいく。

野宿の時とは違う。判らない物が大半だが、やはり彼女はなにかの技能者、あるいはその訓練中とみるべきか。

手早く準備を終え、姿見の前で一回転。

今日もまたまっ白な服だ。シンプルなワンピースとスパッツ。俺を首に掛け、机の前の写真を覗き込む。

写真立ての中には今より幼い少女と、精悍な顔立ちの成人男性が写っていた。

「いつてきます、お父さん」

最後に写真立ての側に置かれていたゴーグルを首に掛ける。

写真の男性が首に掛けているのと同じ品、だな。

朝早くだと思っていたが、結構人通りは多かった。

仕事をしている人の朝は早い。

むしろ少女よ、君は働いていないのか？

少女は焦る様子もなくマイペースに歩く。

「買わなきゃいけないもの……せっけん、筆記用具、皿も足りない……お金もない」

金欠少女はどこか虚ろな目でフラフラ歩く。

「お金が雨みたいに降ってこないかなあ」

町全体に降ったら凄いインフレになるな。

「仕方がない、お願いしてみますか」

彼女が入ったのは雑貨屋だった。

「いらっしやい　　おや、ソフィーちゃんかい」

書き物をしていた老人が返事をする。

「とうか、やっと名前判明！ソフィー！ソフウイー！！」

「こんにちは、お爺さん」

にこやかに笑うソフィー。

演技くさいその表情に、なんとなく「お願い」が読めた。

「どうだい、首都での暮らしは？」

「人が多くて目が回りそうです……こんなにいっぱい人がいて、よく集落が成立しますよね」

「はっはっは、数十万人の人が住む首都を『集落』と呼ぶか。これは大物だな」

少ないな。首都でたった数十万か。

機械仕掛けを時折見かけるし工業革命は起こっていると思っ  
たが。

「それに飛行機も気軽に乗れませんし」

「田舎ほど航空法が緩くはないからな。軽い気持ちで破ってもし  
よ  
つ  
び  
か  
れ  
る  
か  
ら、注意するんだぞ」

真面目な顔で頷くソフィー。

「ふむ。それで今日はどうしたんじゃ」

「その、私引越してきたばかりで」

「ふむ。知っておる」

「その、お父さんのお金がありません」

「ふむ。あの馬鹿息子は貯金も残さなかったのか」

「その、お爺さんから頂いたあの家ですけれど、家具はほとんどな  
く  
て」

「ふむ。あの家はお前の父が若い頃住んでおった場所だな。所有権  
以  
外  
の  
も  
の  
は  
ほ  
と  
ん  
ど  
処  
分  
し  
て  
し  
ま  
っ  
た  
の  
じ  
ゃ」

「その、その」

「ふむ、ふむ」

「……生活用品恵んで下さい」

商人の祖父は厳しかった。

「利子なしでつけといてやるう」

ひでえ、孫娘なんだから融通しろよ。

外道なのか親身なのか判らない祖父の援助を受けたあと、ソフィ  
ー  
は  
一  
度  
家  
に  
戻  
っ  
た。

祖父の店で受け取った物を置き、すぐに出掛ける。



「もうお昼 間に合うかな」

町の郊外、やたら爆音の轟く地帯。

それもそのはず。すぐ側に空港があった。

ドッグ（格納庫）が多い印象を受けるが、地球の空港と変わらない。ただ古臭いだけだ。

ソフィーが辿り着いたのは、空港にほど近い二階建ての建物だった。

観音開きの大きなドア。その上には看板。

『航空ギルド』

なんともまあ、リアルとファンタジーの融合である。

内部に入る。中は……まあ、ギルドだ。郵便局とか市役所とか、そんなのと変わらない。

小さな子供が入ってきたことに若干視線が集まるが、それ以上の反応はなかった。

この子はこの世界の女性としては小柄だと思うのだが……ただ単に若いのか、童顔なのかはまだ判断が付いていない。たぶん両方。少女は迷うことなく受付の一つに向かう。

「マリア」

短く呼ばれた女性は顔を上げ、表情をほころばせた。

「あら、ソフィー。久しぶりね」

そして受付のお姉さんはマリアさん。普通の美人さんである。地味ともいう。

見逃しがちだが「あれ、この人こんなに綺麗だったんだ」的な美人さん。

「貴女16歳になってすぐSS免許を取得したんでしょ？ てっきりその日のうちに依頼を探しに来ると思ったわ」

言い分からすると、ソフィー嬢は16歳を少し過ぎたあたりか。

「クリスタルを探していたの。自分局の」

ソフィーの言葉にマリアが固まる。

「……探していた？ えっと、安い中古のクリスタルを、転売屋で、

よね？」

「うん。自分の足で、廃鉱山まで行って」

「マリアは無言で立ち上がる。」

そして、首を傾げるソフィーに思い切り拳骨を落とした。

「「いったあああ」「」

なぜか二人とも痛がっている。馬鹿なのだろうか。

「ソフィー……あそこは魔物が出る上にもうクリスタルの採掘されない場所なのよ？」

「されたわよ、ほら」

頭頂部を擦りながらも、俺を自慢げに示すソフィー。

「偶然でしょ！貴女は腕のいいパイロットだけれど、生身で戦う戦士じゃないのよ！？解っているの！」「

「大丈夫、私強いから」

ぐつと力こぶを示すソフィー。うん、細い。

あまりの物言いに頭を抱えるマリア。

「貴女、そんなのじゃ死ぬわよ？」

「むっ」

反発しようとしたソフィー。それをマリアは視線で遮る。

「さつきも言っただけれど、貴女は本当に腕のいいパイロットよ。この椅子で多くのパイロットを見てきた私が保障する」

「けれど、とマリアはソフィーの手を握る。」

「私がこの席で見送ったパイロットの中には、戻ってこない人だつて沢山いたの。凄腕やベテランと呼ばれる人だつて、例外じゃなかった」

「ギルド職員つて、ただの受付かと思つてたが……ハードな仕事だな。」

「戻ってくる為には、ありとあらゆる努力をして。ありとあらゆる可能性を考慮して。時には、誰よりも臆病に生きて」

「……………その」

必死の訴え。だが、ソフィーは戸惑うばかりだ。

その様子を見て悲しげに目を伏せるマリア。

「貴女には、まだ解らないわね……才能があり過ぎるというのも考えものね」

「なんだか、才能に頼りきっているって言われた気がするわ」

「そこまでは言わないけれど。貴女が努力してきたことは知っているしね」

悩ましげに溜め息を吐くマリア。大変だな。

「せめて、誰か冷静な人が側にいてくればいいのだけれど」

そう口にして、名案とばかりに手を打った。

「ねえ、どこかの事務所に所属する気はない？」

「やだ」

「即答ね……利点は多いわよ、航空事務所に所属すると」

「知ってる。機体の整備とか依頼の受注とか、専門の人がいるからパイロットは依頼の遂行に専念出来る、でしょ？」

今更だが、やはりソフィーは飛行機のパイロットなのか。外見からは想像出来ない。

「ええ。今日貴女が登録してフリーウイングスになっても、たぶんその日暮らしになるのがオチよ。単身フリーでやっていけるのなんて、パイロットとしての技量に加えて既に周囲から高い評価を得ている人くらいなんだから」

技術はあっても信頼がないから仕事がない、ってことか。

「それに対して事務所に所属すれば先輩が色々教えてくれるし、名前も売れるわ。独立するのはその後でも遅くないわよ」

「でも……」

それでも渋るソフィー。なにかフリーにこだわりのあるのか？

「組織に入ると、嫌な戦いをさせられない？」

「……なるほど、それが気になってたのね」

得心がいった風のマリア。

「人を殺したくないのね」

小さく頷くソフィー。

「お父さんは大戦で英雄になったけど、沢山人を殺して嫌な思いをしたって。だからお父さんはフリーになって、人を殺さない戦いをしたって聞いている」

「フリーなら殺さずに済む？」

「そうでしょ？」

「そんなわけないでしょ？」

「マリアさんの目が若干据わってる。」

「貴女のお父さんがそんな戦いが出来たのは、最高峰のパイロットの証『シルバーウイングス』を習得するほどのエースオブエースだったからよ。そしてそれほどの技術があるいうと、きっと不殺とはいかなかったはず」

「そんなこと」

「ある。絶対」

「言い切るマリア。」

「言い返せないソフィー。」

「しばしの間、重い沈黙が続く。」

「……軍隊は嫌なんでしょう？」

「頷くソフィー。」

「ええ、私もソフィーに軍隊は合わないと思う。殺せと命じられれば殺さなければならぬし、一度ことが起これば簡単には抜けられない。税金で支援されているから給料はいいんだけどね」

「マリアは優しくソフィーを諭す。」

「せめて、最初だけでも事務所を探しなさい。私も信頼出来るいい場所を探してあげるから」

「しばしの逡巡。」

「ソフィーは迷いを見せつつも、しっかりと頷いた。」

「ありがとう、マリア」

「いいのよ、友達でしょう？」

「大人の包容力、というべきか。」

「マリアからすれば、ソフィーのことは心配で堪らないのだろうな。」

「ねえ、事務所に入るとは納得するけれど、今日明日でどうなるわけじゃないでしょ？」

「えっ？ええ、それはそうね」

「なら、今日はフリーで登録して適当な依頼受けていい？」

「お金ないの？」

「額くソフィー。」

「お父さんの残したお金は？」

「そんなに元々残ってないの」

「英雄じゃなかったのか、ソフィー父よ。」

「……判ったわ。ちよつと待って頂戴」

「マリアは手早く書類を揃え、ソフィーにサインを促した。」

「はい、はい……おめでとうございます、これにて今日から貴女は航空ギルド登録、フリーウイングスのソフィー・ファレット・マリンドルフとなりました。貴女のご活躍を航空ギルトは期待致しますわ」

「なにその棒読み」

「なにその棒読み。」

「期せずしてソフィーと俺の心が重なった。」

「あとソフィー名前長いね。」

「お約束よ、決まりなの。それじゃギルトの簡単な説明をするわね」  
「いない」

「スキップで。」

「お約束なの！……航空ギルトは主に飛宙船やソードストライカーを要する依頼をフリーのパイロットに斡旋することを目的とした組織です。国営の非営利団体である為、仲買料金は頂戴しておりません」

「あれ、フリーパイロットだけ？事務所には？」

「航空事務所っていうのは法律的に定義されているわけじゃないのよ。ギルドからすれば個人も事務所も同じ扱いになるわ。ほら、しっかり説明を聞いておくべきだったでしょう？」

聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥、つてな。

……ところでソードストライカーってなんだ。

「フリーパイロットっていうのは、つまり軍人以外の民間パイロット全般を指す言葉なのよ。16歳になつたら受けられる試験に合格していれば、だけれど」

小さく咳ばらいをして、話を元の路線に戻す。

「依頼内容は違法なものはこちらで処理させて頂きますが、依頼中に不審な点を見つけた場合はギルドに報告して下さい。場合によっては報償が出ますし、無視して違法行為に加担した場合は拘束され法によって裁かれます」

「き、気付かなかつたら？」

若干ビビリ気味に訊くソフィー。

「気付かなかつたら仕方ないから法的措置はなしよ。絶対気付いていたでしょ、つて状況なら別だけれど」

あと、脅されていた場合でも情状の余地が認められるらしい。

「パイロット同士の私的な戦闘は、双方が合意している場合にのみ合法となります。そうでない場合は殺人及び殺人未遂として裁かれるのでご注意を」

なにに注意しろと。

「ソードストライカーは優れた兵器です。故にパイロットには大きな責任が伴います。町の上空など危険な場所での戦闘は、緊急事態であっても可能な限り回避して下さい」

ソードストライカーっていうのは飛行機の種類だろうか。さつきは飛宙船とかもいっていたし。

「こんなところね。なにか聞きたいことはある？」

「彼氏出来た？」

「余計なお世話よっ！」

バシッとソフィーを叩くマリア。

「とにかく……これで説明は終わり。そこの壁から依頼を探しなさい」

「マリアが示した壁には様々な依頼書が貼り付けられている。」

「どんなのがいいと思う？」

「なんでもいいわ、自分の技量に合ったものを選びなさい。クリスタルを持参しているならソードストライカーをレンタルしてもプラスにはなるから」

「クリスタルのレンタル代高いものね。見つけておいて正解だったわ」

「……も、この子は」

頭痛を抑えるように突っ伏すマリア。元気だせ。

「そんな粗悪なクリスタルじゃ、すぐ魔力切れになるでしょうに」  
魔力とな？

「そんなことないわよ」

「だって、相当不純物混ざってない？赤く見えただけけど」

確かに赤いが……え。ええ？俺、粗悪品？

「うーん……」

悩むなソフィー！

「感じる魔力は、相当なポテンシャルだと思う。やっぱり掘り出し物だよ」

「貴女がそういうなら、いいのだけれど」

結局どっちなんだ？

「っーか、俺は魔石ってヤツなのか。」

「実にふぁんたじー。ふぁいなる的に。」

## 一言後書

緻密なプロットをその場の気分でぶっこわす、がこの小説の目標。

## 欠陥機

ギルドを出て空港敷地内の建物へ移動。

俺と同じような透明な石を首に掛けている人間がいる。

濁った物や色の混じったもの、透明に近い物。マリア曰く透明度が高いほうが良質みたいだが、俺は赤いんだよなあ。

「こんにちはー……」

扉を半開きにし、上半身だけ覗かせて中をうかがうソフィー。

「……なにやってんだ、嬢ちゃん。入るなら入れ」

「は、はい」

店の親父に促され縮こまりつつ入店する。

ギルドの方では平気そうだったが、あれは知り合いがいたからか。無茶な冒険に出掛けたりと、肝が据わっている印象だったのだが

……よく見ると年相応なのか？

「で、なにしに来たんだ嬢ちゃん。SSレンタルに来たってお茶飲もうってわけじゃなかるう」

背の低いおっさん。髭もじゃ。彼も所謂ドワーフ？

「え、ええ、そうよ。SSを借りに来たの」

SSってのはソードストライカーの略だな。

「どんなのがご所望だ？種類だけは取り揃えてるぜ」

「普通の制空戦闘機……いえ、機動性さえあれば戦闘攻撃機がいいわ」

「ぜーたく言うな。ここにあるSSはどれも一昔前の戦闘機だ、そんないいとこ取りの機体はねえよ」

「え」

固まるソフィー。

「嬢ちゃん、新米だろ？」



「そうともいうわ」

そうとしか言わん。強がってどうする。

「いいか、SSってのは新開発に凄え金が掛る。だから新型機を開発するのは普通は軍隊か大手企業だ。たまーに腕のいいドワーフが1から設計して作ったりもするが、総合面で見れば軍用が最強さ。命かかってるからな」

あと金あるからな。資本の力は偉大だ。

「こつという民間に流れる機体っていうのは、軍隊で旧式化して退役したのがほとんどだ。お前さんの望むような上質な機体なんてそうそう置いてねえよ」

あつたとしてもレンタル代が高いぜ。そう付け加え親父は踵を返す。

「着いて来な。直接見て選んだ方がいいだろ」

ドッグの中に整然と並んだ戦闘機。

「どうだ、古臭いだろ」

「堂々と言つことじゃないわ……」

つつこみつつも、ソフィーは機体の顔ぶれにうんざりしていた。

「10年前の大戦の機体じゃない、こんな古いSSでどうしろといふのよ」

「うっせーな、整備は完璧だ」

確かにどの機体もしっかりと磨かれ、兵器として生きている。

古臭いというが、どれもジェットエンジンだ。あるいはプロペラ機が存在しない？

「牽引式のエンジンばかりね」

「引つ張るほうが安定性がいんだよ。推進式は旋回性能が高いが不安定だ。採用しているのは最近の飛行機だ」

牽引式は、その名の通りエンジンで機体を引つ張るタイプだな。

対してロケットやミサイルのように後ろから機体を押すタイプは

推進式と呼ぶ。

ジェットである以上完全な牽引式は出来ない。

ここにある飛行機は大半がエンジンを主翼下に配置している。少しでも機体前方に配置して、牽引式に近付けようとした努力が感じられた。

ソフィーがシンプルな塗装の飛行機を品定めする。

「これなんて、すぐ火を噴くからライター呼ばわりされて馬鹿にされた機体でしょ？」

ライターあつたか！火打石使ってたのに。

「いいSSだと思うがね、装甲は紙だが機動性は半端じゃない」

「私が乗りたいのは、サーカス機じゃないの」

この飛行機達がソードストライカーなる兵器なのか。

俺の目から見れば、ただの戦闘機にしか見えない。

いや。確かに胴体部分は独特だ。

飛行機の胴体は空気抵抗を減らす為、流線型が普通だ。

だがSSはどれも面を組み合わせで構成されている。まるで空飛ぶナイフだな。

加工技術の都合なのか、なにか意味があるのか。

実は地球にも面で構成された飛行機は存在する。ステレス機と呼ばれる飛行機だ。

レーダー反射断面積を減らすことにより、レーダーに映らない飛行機。

この世界ではレーダーが一般的でありそれを少しでも欺く為此の形状がデフォルトとなった、とかそれっぽい理由があるのかもしれない。

「へっ。言うじゃねえか、ペーパーが」

「ライセンスを取得したのは最近だけれど、SSは小さい頃から乗っていたわ」

確かにいざ飛行機を前にすると、先程までの緊張が消え自信に満ちた顔付きになっている。

マリアもそれらしいことを口にしていたが、この子が凄腕、ねえ。  
「依頼はドラゴン退治よ。機動性は欲しいけれど、高い攻撃力と一撃離脱の出来る足の速いSSがいいの」

「そりゃ解るが」

ドラゴン退治。

そう、ドラゴンである。

こんな依頼を選んだことにも驚いたが、あっさり了承したマリアにも驚いた。

この世界ではドラゴンは最強種ではないのか、と思ってしまったほどだ。

実際には間違いなく魔物としては最強種らしい。

だが飛行速度が遅いことから、SSで一撃離脱してしまえばあっさり倒せるとのこと。

なんというか、双胴の悪魔？

ファンタジー台無しっぷりがひどい。

「これなんてどうだ。装甲も厚いしエンジン出力も高い。火力も及第点だ」

「重くて加速が悪そうだからいや」

「じゃ、どうしろっていうんだよ」

「軽くて、速い飛行機がいい。あとドラゴン退治だし火力も欲しい」  
防御はいらぬのだな。

「妥協する気がないんなら……多少は妥協してるみたいだが、あんまり俺の店に期待すんな。高性能機に乗りたきゃ別のレンタルショップへ行け」

「別のレンタル？」

首を傾げるソフィー。

「なにも見てないのかよ……ここは首都だぜ？SSレンタルは幾つかあるに決まってるんだろ」

溜息混じりに説明するおっさん。意外と面倒見がいい。

「俺の店は安い機体を揃えてるが、2件隣は最新鋭機も揃えた高級

店だ。とはいえ値段もそれに比例する。嬢ちゃん、予算はどれくらいだ」

ソフィーが提示した金額は、どうやらさして多くなかったらしく、「大人しく妥協してる。この店でも借りられるのは全体の3分の1程度だ」

「むう」

膨れる少女。

だがしかし、現実は無常であり。

予算内で少しでも自分に合った機体を探す為、彼女は格納庫を歩き回ることになった。

探し初めてから数分。

「あら」

ソフィーが声を漏らす。

そこには奇妙な飛行機が鎮座していた。

主翼と水平尾翼を逆の位置に付けたような、独特の機体。

エンテ翼と呼ばれる、主翼を機体の後部に搭載したエンジン単発式の飛行機。

配色は、それこそソフィーを連想させる白亜だ。

(……震電)

俺が真つ先に連想したのは、試作されただけで終わった局地戦闘機であった。

「推進式エンテ翼………なによ、新しい飛行機だってあるじゃない」

「あー、それはな」

「ばつが悪そうな顔で視線を逸らすおっさん。」

「やめとけ。欠陥機だ。それに新しくなんてねえよ」

「欠陥機？」

「ああ。コックピット、覗いてみな」

主翼によじ登りソフィーはキャノピーガラス越しに内部を覗く。

「せま……」

ソフィーが漏らした呟きは、この機体の欠陥を端的に表していた。狭い。コックピットが、尋常じゃなく。

「こいつは大戦末期の頃、とあるドワーフが技術の集大成として作ったSSだ。自分の技術を証明する為の物だからって操作性はガチガチのピーキー、コックピットのシートはドワーフサイズ、おまけに妙な翼のせいで全くパイロットのいうことを聞かねえ」

「じゃあここまでどうやって持って来たのよ」

「ストライクモードで地道にな。せつかく高い金払ってトップウイングスを雇ったっていうのに、『落ちない自信がありません』じゃねーっつーの」

む。今の言葉は判らなかつた。

「ふうん」

ソフィーはしばらく機体を眺めた後、キャノピーを開いて小さなお尻を滑り込ませた。

「手狭だけど……慣れればなんとかなるわ」

到底入る気がしなかつたのだが……案外なんとかなるもんだ。

「武装は？」

「……30ミリ機銃4門だが、お前さん、それに乗る気か？」

「細い機体なのに重火力なのね。これにする」

嬉しげに操縦桿を握るソフィー。

おっさんは眉を潜め黙考した後、返事を返した。

「駄目だ。そいつは俺の趣味で整備しているだけで、とても人が乗るもんじゃねえ」

「大丈夫よ。私なら動かせる」

おー。凄い自信だ。

「疑うなら、滑走中でも止めていいから」

駄目だこれは。完全に新しい玩具を買った子供状態になっている。

「……こいつはエリートの特ップウイングスですら乗りこなせなかつたんだぞ」

「私はシルバーウイングスを目指しているの」

シルバーウイングス。最高峰のパイロットの証、か。

「飛行機として作られたのなら、どんな機体だって浮かばせてみせるわ」

その強い意志が宿る瞳に、一瞬気押された。

自分の才能を妄信しているわけではない。

自分の技術を信頼しているわけでもない。

それは、きつと。

意地であり、矜持。

この子は諦めない。

俺はただ、そう理解した。

「好きにしろ」

おっさんは頭をバリバリと掻き、値段の書かれたプレートを倒す。

「どうせ近々モスボール処理する予定だったんだ。金は弾薬費だけでいい」

「本当っ!」

シリアスな雰囲気を取り投げ瞳を輝かせるソフィー。

「ありがとう! 貴方がいい人ね!」

「……お嬢ちゃんは正直者だな」

ここまでくると美德に思えてくるから不思議だ。

30ミリ機銃4門にそれぞれ60発の弾丸が詰め込まれる。

……あつという間になくならないか、これ。

「ほれ、準備は終わったぞ。弾薬も注水も終わった」

貸出の書類を書いていたソフィーの肩を叩くおっさん。

「セクハラです」

「はっ。黙れまな板」

おっさんよお。

これはこれで需要があるんだよ!

「くうっ……」

拳を握り締め耐えるソフィー。レンタル代をまけてくれたので、あまり強く反撃出来ないのだろう。

「ほれ行け、さっさと行け。金にならない客なんてさっさと行っちゃまえ」

背中を押され飛行機の前まで連れてかれる。

「落ちるんなら離陸する前に落ちな。空で落ちるんならストライクモードに切り替える。少しはマシになる」

「……ありがとう」

おっさんの不器用な優しさに照れるソフィー。

「初任務なんだろ？せいぜい成功を祈ってるぜ」

「ええ」

ソフィーは懐から取り出したリボンで、白い髪を結び上げる。

長い髪をどうするかは気になっていたのだが、まさかヘルメットをしないで搭乗するのか？

ひょいと梯子も使わず機体を登る。この飛行機は脚が短い。

強引な着陸をしたら折れてしまいそうだ。

「……そうだ、訊き忘れてた」

コックピットから上半身を覗かせ、彼女は問う。

「名前、聞いてなかった」

「名前か？」

おっさんは目を見開き、そしてそっぽを向いて答える。

「グリードだ。これからよろしくな、嬢ちゃん」

グリードと名乗ったドワーフに、ソフィーはなんともいえぬ微妙な顔で返す。

「貴方じゃなくて、この飛行機の名前」

「……コルトだ」

おっさん、恥ずかしい！

キャノピーを閉じて密閉する。

この小さな空間に居るのは、俺と彼女だけ。

首に掛けたゴーグルを装着。

ガラス越しに彼女は俺を見つめ、誓いの言葉を口にする。

「これから、よろしくね。……私はあなたと空を飛ぶわ」

軽い口付け。

メダルに嵌った俺に、触れるだけのよう小さな接吻。

その感動に浸る間もなく、俺はコックピット正面の台座に嵌めこまれる。

「目を醒ましなさい、コルト」

刹那。

俺はその規模を膨らませあげた。

俺から、クリスタルから溢れるエネルギー。

魔力と呼ぶべきであろうそれは、機体中に張り巡らされたケーブルを伝い、この飛行機の血肉となる。

主翼のフラップに。

前翼のカナードに。

そして、機体後部のジェットエンジン　　魔力式推進エンジン

に。

期待表面を流れる、僅かな気流すら読み取れる。

俺は、理解した。

ガスコンロ？そんな機能はついでもしかない。

俺はこの機体の動力源として、彼女に探し出されたのだ。

人間としての体を失い、周囲の様子を窺うしか出来ない身となり。そんな状況の初めての变化。

戦闘機という小さな世界の、途方もない万能感！

俺は今、翼を手に行っている！



俺は今、コルトとしてここにいる！

「クリスタルより魔力の伝達を確認  
ソフィーが計器を手早くチェックする。」

「数値はオールグリーン、動けるっ」

僅かに押されるスロットル。

エンジンに魔力が満ちる。

魔力にて炎を、爆発力を生む。

タービンが高い音を立て空気を圧縮し、高熱で噴射する。

機体はゆっくりと前進し、屋外に出た。

トイイングカーは使わないのか。

そもそも車輪で走る自動車を見ていない。どんな世界観だ。

《嬢ちゃん、聞えるかい？》

っ！？ な、なんだ？

「ええ、感度は良好よ」

《みたいだな。西方向に向かって滑走しろ。市街地もねえから落ちても文句は言われねえ》

眉を顰めるソフィーだが、了解と頷く。

これは……魔力の共振？

クリスタル同士の共振を通信として利用しているのか。

「風向きを考えれば、東の方が離陸しやすいのに」

安全管理の為に、リスクを少しでも下げる心掛けは必要だ。

マリアの忠告を覚えていたのか、あるいはパイロットとしての心得えか。

いまいち納得していない風なのは、さて。

反骨精神か、中二病か。

「人を殺したくはない」発言といい、なんとも危なっかしい少女である。

誘導路から滑走路へ滑りこんだコルト。

「四肢固定」

スイッチを弾く。

コックピット周囲に巡られた……術式？

魔法の詠唱文字を刻み込んだ部分に魔力が満ちる。

ソフィーの体に魔力が流れる。

俺の脳裏にソフィーの身体データが浮かぶ。

嗚呼　　なんて、ペタン娘。

なんだこれ、と思う間もなく包帯のような白いベルトがコックピットのそこかしこから飛び出す。

ベルトはソフィーの身体データに基づき彼女の体を固定する。

自動車のシートベルトなどよりずっと隙間なく巻き付けられている。センサーが急激な加速度を感じた場合はベルトが体を締め付け　　所謂Gスーツとして働くようだ。

スロットルを目一杯押し込む。

白い蒸気を噴き出す魔力推進エンジン。

機体が大きく震えソフィーの小さな背中がシートに押し付けられる。

小さなコルトは滑走路をみるみる加速。周囲の景色があつと言つ間に後ろへ流れる。

「?1」

緊張感を孕んだ読み上げ。

?1とは、これ以上は後戻りは出来ないという宣言。

あとは離陸するしかない。

「VR」

操縦桿をゆっくり引き上げる。

車輪が滑走路から離れ、コルトが宙を舞う。

まだ油断は出来ない。ここでバランスを崩せば、滑走路に叩きつけられる。

「?2、ポジティブ……ギアアップ」

ギア（車輪）が胴体内部に格納される。

ゆるやかに上昇するコルト。

眼下には密林らしき緑が流れる。

なるほど、樹海だ。

この速度では木々は緑の面にしか見えず、正しく樹の海だ。

いや、下を見てどうする。

視線を前方に向け　　言葉を失う。

地球では飛行機に憧れつつも、見上げるしか出来なかった空。

地上ではどうやっても、上半分しか存在しない無限の天球。

憧れ続けた、恋い焦がれ続けた蒼穹がそこにはあった。

機体が傾き、進路を取る。

目的地はこの町より50キロ、竜の群生地。

新たに発生したつがいのドラゴンが攻撃目標である。

## 一言後書

友人が震電を知らないとか絶望した。ゼロ戦しか知らない？ゼロ戦にも色々あってだな……おい、どこ行く

## ソードストライカー

単刀直入に言おう。

真っ直ぐ飛ばねえ、この飛行機。

「う……く、ああ　ふう……」

エロい声を漏らしているのは、我らがパイロットソフィーちゃん。必死に操縦桿を押さえ込むが、コルトの機首は微かに揺れている。震える操縦桿。

否、震えているのではない。

バランスを崩しそうになるたびに反対方向にカウンターを当てて、姿勢を安定させているのだ。

「なによこれ、最新鋭機よりずっと扱い難いじゃない……！」

ソフィーは過去に新しい機体に乗る機会があったのか。

だが機体を解析した俺に言わせれば当然だ。

高性能な機体は高機動を発揮する為の不安定性、真っ直ぐ飛ぶ為の安定性を両立しているものだ。

全く逆の性質を両立する為に、設計自体は不安定に。その上で機体制御を補助するシステムを搭載するのが普通。

フライ・バイ・ワイヤ　操縦系に電子制御を介することで姿勢制御を行う技術など、その最たるものだ。

そうでなくとも、普通の飛行機は最低限真っ直ぐ飛ぶことは出来るようになってる。

しかしこの飛行機にはそういった配慮がない。  
正しく欠陥機だ。

俺の方でフライ・バイ・ワイヤの真似事くらい出来ればいいが……

「っ、きゃあぁっ！」

俺の意思で操縦桿を操ると、あっと言う間に錐揉み状態に突入する。

「」のぉー」

巧みにソフィーが安定させる。簡単そうに見えても、俺には到底真似出来ない。

精神的疲労のない俺がアシスト出来ればいいのだが、体系化するにもデータが足りない。

データが溜まればあるいは、とも思うが今の所は彼女に頑張ってもらっしかあるまい。

竜の群生地。

そうは言いつつも、現代においてドラゴンはあまり表に出ないそうだ。

知能がある程度高い彼らは、自らが襲う側から襲われる側へ変化したことを理解しているそう。

人間から隠れ静かに暮し、時折餌を求め低く空を飛ぶ。

その程度の魔物に落ちぶれてしまった。

とはいえ若いドラゴンが、自分の力を過信して町に近付くこともある。

そういう場合にギルドに依頼が出来るとのこと。

今回はつがい……夫婦のドラゴン。

経験が少ない若い夫婦なのか、あるいは仲間のドラゴンに住み家を追われたか。

気の毒だが、人が襲われてからでは遅い。

離陸から約10分。

50キロという距離も、航空機ならたったそれだけの時間で着く。機体を傾け旋回しつつ目標を探すソフィー。

「いた」

半瞬遅れて俺も発見する。

川の辺で翼を畳んだドラゴン。

コルトは一度高度を上げ、機銃の安全装置を解除する。

目標に対し急降下。重力の影響を受け難く、長い時間目標を照準

に入れ続けられる。古き良き戦法。

火を噴く30ミリ機銃×4。

機銃掃射をしたかったのか、薙ぎ払うように弾丸が射出される。

1匹は命中。

鱗が弾け飛び、首が飛ぶ。

30ミリというところ「たつた3センチ」と思つかもしれないが、機銃としては破格の大きさだ。

これが4門連射となると、下手な大砲より強力だな。

ミンチになるドラゴン。

しかし機銃の射線は逸れ、川に水飛沫を上げた。

「外したっ！」

……つか、これで弾半分使ったんだけど。

第二射で外したら依頼失敗だぞ？

露骨に違う方向に逸れたが、この子射撃は苦手なのだろうか。

「もう一回！」

高度を取り直そうとして　生き残ったドラゴンが飛翔を開始する。

それに焦ったのか、上昇を止めて水平にアプローチするコルト。

しかし速度も高度もまだあまり変わらない。速度がこちらの優位だというのに。

駄目だこの子、経験足りなさ過ぎる。

知識しかない俺からしても、戦い方が稚拙。

戦闘機での戦いは、焦れたら負けだ。

互いに真正面から迎え撃つ。

ドラゴンのブレスが炎の壁として広がる。

コルトの薄い装甲ではダメージが通るぞ、避ける！

「これでっ！」

すれ違い寸前で機銃残りの全弾をばら撒く。

操縦だけは一級品というべきか、紙一重で炎とドラゴンをかわす。

機銃は大半が外れたが、一発がドラゴンを掠り首を抉った。

……単発で打つても十分な威力だった。計180発も消費する必要あったか？

頭と胴体がほぼ泣き別れたドラゴンが墮ちる。

「う、うう」

呻き声。

見れば、ソフィーは涙目で口に手を当てていた。

「うげっ」

吐く。

「がふ、え、え、え……」

必死に口を押さえるが、結局完全に胃の中を戻した。

……ここは見て見ぬふりをするか。

俺は、実際に引き金を引いてはいないんだ。

新兵が実践で錯乱して判断を誤るなんて、よく聞く話。

これくらいで 圧倒的優位な戦闘くらいで丁度良かったのだ。

石になって感情すら失ったかな、これは。

「……帰らなきゃ」

口を拭って、機体を翻す。

戦闘中散々と扱き下ろし文句を垂れた俺には彼女に優しい言葉をかける権利もあるまい。

……そもそも声が届かない。

それ以前に、俺の存在に気付いていない。

なんで俺はここにいるのかね。

おれは結局、こんなに近くににいるのになにも出来ないのか。

口だけ男、ここに極まる。

意気消沈するソフィー。

ついでに意気消沈する俺。

俯いて操縦しているのは流石に拙いので、俺が周囲を監視する。姿勢制御は無意識にやっているようだ。凄い。

と、側面に小さな飛翔体が多数。

(なんだ ?……!?)

細長いミサイル。

10本以上のミサイルがコルトに接近している！  
最近のドラゴンはミサイルも持っているのか！？

(な、わけねえよな！)  
更に遠方。

人間の目には捉えられない距離に、5機編成の戦闘機。

あいつらが撃ってきたのか。

ソフィーは気付いていない。俺が回避しなければ！

.....

えいつ。

「きゃああ！？」

加速してみた。

いや、俺じゃ機体を操り切れないし？

ついでにソフィーが戦闘で使わなかった機能も使ってみる。

離陸前にタンクに注水した水。

どうやらこれは推進剤らしい。

コルトのエンジンは熱膨張した空気を噴射することで前進するが、  
それでは効率が悪い。

なので水を噴出することで反作用を大きくして、エンジン出力を  
増強する。

重量的問題からかタンクの水は少ない。戦闘機同士の格闘戦に備  
えた、それこそアフターバーナーに近い役割と推測する。

つまり、短時間限定のブーストだ。

「な、なんで！？」

瞬時に加速するコルト。

直後、先程までコルトがいた空間をミサイルが通過する。

そして爆発 時限式か。

「対空ロケット砲！誰が！？」

追尾してこなかったな。ミサイルではないのか。

そもそも電子機器の類がないのか。コルトには搭載されていない。



「あれは まさか」

ソフィーも敵機を発見する。

接近してきた5機の機体。

三角形の主翼に、プラモデルのように安っぽい機体。

「ミグ21……！帝国軍の正式採用機じゃない！」

ブーストを発動させたまま、敵機から逃走を試みるソフィー。

まあ、こっちは武装がないしな。

「どうして、ここは共和国の空域なのに……とにかく首都まで逃げ切らないと！」

外国の機体なのか？

レーダーすらなさそうなこの世界では、領空侵犯はやり放題かもしれないが。

とはいえこれは大問題だ。俺の世界の常識を当てはめれば、戦争に発展してもおかしくない。

……あるいは、先のミサイル、ではなくロケットはその最悪のシナリオを避ける為かもしれない。

ソフィーが帰還しこの戦闘を報告すれば、国家間の戦争に引き金となりかねない。

それを憂い、今回の接近を「なかったこと」にする気かもしれない。だが、だからといってソフィーが犠牲にならねばならない謂われはない。

(上手く逃げ切れ、ソフィー)

スピードメーター限界まで加速するコルト。おそらく900キロ近くまで突破した。

轟音と震動が機体を軋ませる。

軽い構造体と強力なエンジンによる急激な加減速こそ、この機体のコンセプトの一つ。

コルトは瞬時にミグ21を引き離し

あつと言う間に追い越された。

機影がコルトを追い抜き、直後に爆音が轟く。

音より機体の方が速い。音速機か。

超音速機は亜音速機であるコルトとは機体設計からして異なる。

コルトではどうやっても超音速飛行は出来ない。

音速飛行が偉い、など古臭い考え方だが。このような単純な追いかけっこなら足が速い方が強い。

そんな子供のようない屈が、とても不条理に思える。

躊躇いなく追い抜いたあたり、コルトが弾切れなのはバレてる様子。竜との戦いを見てやがったな。

ソフィーは躊躇う様子もなく操縦桿を前方に押し倒す。

エンテ翼特有の急激な方向転換。

高速であれば尚、不安定になるその設計。

コルトは降下という言葉すら生易しい、直角染みた機動で高度を落とす。

「きゅっっ！」

息を漏らすソフィー。

白いベルトが彼女の体をシートに押さえ付ける。

地面まで急降下したコルトは、激突寸前で再び水平飛行に戻る。

「ぐっ」

歯を食い縛ってGに耐える。

コルトは森の木々の隙間を縫うように右に左にバンクを繰り返す。

高い木を避けつつ敵機の照準から逃れる為だろうが、本当に高度が低い。

この高度で制御を失えば回復する猶予はない。にも拘わらずソフ

イーの瞳は冷静さを保ったまま。

冷や汗を流すことすらせず、進路を睨み付ける。

あまりに低くを飛ぶコルトに手を出しかねているのか、ミグ21も機銃をほとんど放たない。撃つたとしても、後ろに目があるかのようなコルトの回避に攻め切れない。

何度かアプローチしてくるが結局離脱上昇してしまう。

よほど巧く射線から避けているのか、本当にこのまま離脱出来る

んじゃないか？

……などと甘い考えを巡らせたから、などとは思わないが。ミグ21のパイロットは機銃による撃破などセコいやり方を捨てた。

コルトの側でロケット弾が爆発。

空対空ロケット弾は榴弾らしく、破片がコルトに幾つか突き刺さった。

「……っ！うわ、わわわ！？ヨーが　！」

内部のワイヤーが切れた。ラダーの制御が！

繊細過ぎる操縦が必要なコルトにとって、制御系の欠落は致命的。必死に操るも、重力は容赦なく機体を地表に引き寄せせる。

「こんな　落ちるっ」

せめて木々を避けようと機首を逸らす。

丁度岩場が剥き出しになった場所にバウンド。機体が挟られる。

「　！」

コックピットが衝撃で上下する。

俺は咄嗟にベルトを締め上げソフィーを固定するが、ギブスのように高質化したベルトもその中は生身。

あまりに強く頭を揺さぶられたことで、一瞬気を失うソフィー。

バウンドしたコルトはもう一度大きく跳ね上がる。機体下部には大穴。

パイロットは操縦出来る状態ではない。

このまま落ちるのはごめんだ。自信はないが俺が操縦する。

操縦桿を動かし　出鱈目にクルクル回る。

……我ながら滑稽である。

と、視界の端に光る地面を捉える。

否、地面ではない。

水面だ。湖がある。

ええい、ままよっ！

無様かつ不格好に回転する機体。その機首が湖を向いた瞬間を見

計らって、ブースト全開！

内部タンクの水も全て蒸発させ、最後の足掻きとばかりに湖まで放物線を描いてぶっ飛ぶ。

そして、着水。むしろ墜落！

盛大に水柱を立てながら、コルトはようやく静止する。

これで一段落……とはいくまい。

未だ上空を制圧するミグ21。俺達の死を確認するまで居座る気か。

機体の隙間から水が侵食し、内部を浸す。

「冷たい……水っ？」

足の冷たさにソフィーは目を醒ました。

「ここどこ……？湖は別の方向にあったはず……？」

未だぼんやりしているのか、虚ろな目で水を見つめる。

早く脱出しろ　と怒鳴りたくなり、そこで気付いた。

コルトが、コックピットを含む機首部が完全に水没してしまった。

これではキャノピーを開けない。

「う、嘘……」

事態を理解し始めたのか、恐怖を滲ませた声色。

「やだ、出して！開いてよお！」

みるみる溜まる水に焦り必死に開閉レバーを引く。しかし、水圧のある水中ではキャノピーは決して開かない。

「いや……いやだよお……」

いよいよ涙目になり力なくガラスを叩く。

どうする。なにかないのか。

なにか、あるはず　！

ばきん！とどこか間拔けな破損音。同時に浸水スピードが上がった。

「死にたくない。なんでよお……初めての依頼で、どうしてこんな目にあうの」

なにかしなければ　この子が、こんなふざけた最期を遂げる

のなんて見たくない！

俺の出来ること。この飛行機の、可動部を操ること。

エンジンは水中では使えない。主翼や尾翼を動かしても意味はない。

あとは、精々ソフィーの体を固定するベルトくらい

( これだ )

ベルトをソフィーの体から解き放つ。

「えっ？」

ベルトを操り、機体の穴を塞ぐ。

「な、なにこれ？ どういうこと？」

やはり機体下部の損傷が激しい。キャノピーにも罅が入っている。多少は侵食を抑えられたが、結局時間稼ぎか。

「この機体独特のパイロット保護システム？ 違う、こんな複雑な工程をハードがこなせるはずがない」

現状把握はいいから、脱出方法を考えてくれ！

きよとんと瞼をしばたかせるソフィーだったが、『俺』を見て目を見開いた。

「クリスタルが 光ってる」

言われ、客観的に自分を見る。

確かに光っていた。

赤いクリスタルである『俺』が、光を帯びている。

「……あなたがやっているの？」

呆然と俺を眺めるソフィー。

気付いてもらえた。

やっと、ようやく。

こんな状況でなければ、子踊りをしたいほど嬉しい。いや、子踊りしてやるぞ。

バタバタと主翼のフラツペンやエルロンを動かす。

「……ごめんなさい」

なぜ謝る。

「私を助けてくれるのは嬉しいけど、もうどうしようもない。ストライクモードで飛び出しても、多勢に無勢過ぎる」

ソフィーの言葉に違和感を覚える。

まるで、湖から脱出する方法自体はあるような。

ストライク、モード？

機体をつぶさに観察する。

飛行機として使用していなかった部分。

なぜ、この機体が『ソードストライカー』なのか。

俺の知る戦闘機との違い。それは

( はは、なんだこれ )

冗談だろ？

こんな機能、考えてもいなかった。

俺の常識を悉く、真っ向から打ち砕く技術。

こんな戦闘機、あつて堪るものか。

これは戦闘機じゃない。

「君なら判るでしょう？ストライクモードの欠点」

判る。彼女がなにを危惧しているかも。

だが。だが！

( 諦めるなよ！俺も頑張るから！ )

確かに分は悪い。飛び出した瞬間にバラバラになるかもしれない。

けど、けれど！

( お前はそれでいいのかよ！まだ可能性があるなら、足掻けよ！ )

それは、平和な世界で生きてきた俺の我儘なのかもしれない。

この世界には、現実には奇跡など用意されていないのかもしれない。

い。

けれど俺はこの子を死なせたくない。

さつきまで年相応に怯えていたのに、俺の存在に気付いた後は気

丈に振る舞い。

そんな優しい子が、不条理に死ぬなど。

そうか、優しいからか。

俺の予想通りなら、ストライクモードは手加減出来る代物じゃない。

あるいは、相手を殺してしまう。

最終的に撃墜されるとしても、1機や2機は道連れにするだろう。彼女は殺したくないのだ。

それなら、自分一人が死のうと。

( それでもっ )

ソフィー、お前に死んでほしいと願う敵がいるように、生きて欲しいと願う俺がいるんだ。

マリアだって、あの爺さんだって、きっとそう思う。

お前にはやり残したことはないのか？

シルバールウイングスとやらになりたいんだらう!？

だから、だから!

( 飛び立て! )

( その銀翼が飾りじゃないなら、今すぐ飛び立て! )

( 飛び立て、ソフィー                      !!!!! )

「                      」

操縦桿が揺れる。

「 っそう、だね 」

手は震え、瞳は未だ恐怖を湛え。

「 生きないと、まずは、生きないと 」

それでも、彼女は、ゆっくりと顔を上げた。

静かに指を伸ばす。

その先には『俺』、ペンダントに嵌められたクリスタル。

『俺』を指で押し込むと、そのままレールに沿ってクリスタルは胴体中心へ移動。

そして、変化は始まった。

クリスタルの魔力が隅々まで行き渡る。

先程までは導線を辿っているだけだったが、今は機体全体に魔力が満ちている。

主翼が付け根から90度捻り、縦に向く。

コックピットモジュールが胴体と分離。ロックを外されソフィーを納めたカプセルは、フレームで繋がった主翼と共に後方へ移動。

主翼が前後に分離。4本に割れた翼は？に展開。

クリスタルに内包された魔力を主翼に注ぐ。

コックピットの背後に固定された？状の翼。

まるで蝶のように広がった主翼は、魔力により光を纏う。

翼に刻まれた詠唱文字が、魔素により『存在しない機関』を形成する。

強固な関節部。

鋼鉄の筋肉。

そしてマニピュレータ                    機械仕掛けの手。

コックピットモジュールを中心に、肢体が発生する。

物理的な元素ではなく、魔力による仮初の存在としてこの世に顕現する機関。

ソフィーの神経を機械の手足と接続。

コルトの機体後部が展開。グリップに変形。

四肢の制御を手に入れたその刹那、ソフィーの意思で右手がコルトのグリップを掴む。

コルト胴体下部に魔力が集い、魔力刃を成す。



質量の増加したコルトは湖の底に着地、間髪入れず跳躍。

一気に水面まで浮上！

慣性のまま宙に飛び出し、湖の辺にタッチダウン。

水を滴らせ、直立し敵機を見据える。

SSの胴体をナイフのようだと感じたのは、決して気のせいではなかった。

10メートル近い大剣と化したコルトの機体。

それを握る、やはり10メートルの巨人。

あまりに巨大な兵士に、その巨人を以てしてなお巨大な剣。

そして、背には光の翼。

魔力により光輝く、細やかな詠唱文字の刻まれた蝶の如き主翼。

俺はその雄姿を目撃した瞬間、連想した。

機械仕掛けの天使だ、と。

ソードストライカー。

この姿こそ、この兵器の本来の姿なのだ。

#### 一言後書

コンビニの安いジュースをガブ飲み、煮干しを齧りつつ薄暗い部屋でカタカタと執筆活動。

うーん、実にケ・ン・コ・ウ・テ・キ？

## 銀翼

敵機はミグ21が5機。数は変わっていない。

あちらの目的は、恐らくはソフィーの殺害。

奴らが正規軍なのか、それに扮した何者かなのかはどうでもいい。今すべきは、敵勢力の排除。

(……殺せるのか、ソフィー?)

敵に高度を上げられたら、もう手を出せない。

迷っている暇はない。

膝を大きく屈伸させ、接近していた敵機に跳躍。

剣を進行方向へ向け、魔力エンジンにより更に加速!

思わぬタイミングと速度で現れたコルトに、対処出来ないミグ21。

「はあっ!」

しなりを効かせた左足でミグ21の主翼を蹴り飛ばす!

……剣使えよ!

左の翼が?げたミグ21。

ストライクモードでは4本の翼がそれぞれの四肢を形成している。

あれではストライクモードでもソードモードでも行動不可能だ。

ミグ21を掴み、そのまま着地。

地震の如く大地が揺れる。そつとミグ21を地面に降ろすコルト。

まさか、殺さずに済みますか。

見ればミグ21のパイロットもこちらを呆然と眺めている。気持ちは判るぞ。

《 餓鬼が 》

クリスタルの共振を利用した通信。

これは、別のミグ21?

《 殺すなら殺せ、音もなく是非もなく 》

「いや」

切り捨てるソフィー。

《そうかい、なら死ね》

ミグ21がこちらに向かって来る。

一方向ではない。四方から、同時に！

「どうしょ？」

いや、俺に困った顔向けられても。

とにかく魔力障壁を発生させる。

クリスタルの魔力は、ストライクモードにおいて3つの用途に使用される。

1つは鋼の手足の維持、及び稼働。

2つは機体下部の魔力刃の形成。

そして3つ目が機体先端から円錐状に発生する、魔力障壁。

この3要素が飛び抜けた出力であるからこそ、SSは強力な兵器足り得る。

機動力・攻撃力・防御力を高い水準で獲得しているということだから。

『真正面からの一対一』であれば、地球のあらゆる兵器を凌駕すると断言出来る。

……真正面であれば。

ソフィーはとにかく円錐を構える。

ミグ21から同時に開始する銃撃！

「くっ、くっ」

障壁は容易く弾丸を止める。

だが、後方からの機銃は容赦なく突き刺さる。

障壁が前方にしか展開出来ない以上、多数を相手にした戦いがSSは苦手なのだ。

これがSSの欠陥、正面以外の装甲の脆弱性。

体を捻り、主翼を庇う。

主翼は常に魔力が供給され、魔素の機体を維持している。

逆に言えば主翼がダメージを受ければ、それに伴い四肢を失う。  
機体背後の主翼は、ストライカー最大の弱点。

4機がコルトを中心に交差する。

白い雲の尾を引き上昇するミグ21。

「痛、いよお」

片膝を着くソフィー、コルト。

神経を接続している今、コルトはソフィーの肉体なのだ。

全身銃痕を穿たれて尚、意識を保っているだけでも凄い。

俺なら無理だ　　はつきりと断言出来る。

なんせ、俺の感覚も同調しているから　　痛い痛い痛い痛い！！

「っ、負けないんだからっ」

ギシギシとフレームを軋ませ立ち上がる。

「諦めてないんでしょう？私も諦めないっ」

！そうだ、ここで諦めてどうする！

全身の痛みなど無視だ無視！

この子がここで死ぬなど、認めない！

唐突に通信。

《あと5分耐える》

「　　誰っ!?!」

ミグ21のパイロットではない。

若い、男性の声。

《援軍だ。そちらに急行する、なんとしても生き延びろ、娘  
だから誰だ。》

《戦法は変えるな。もう一撃であの小型機は墮ちる》

今度はミグ21のパイロット。

周波数とかなないから、敵味方の声が入り乱れる。

さて、どうする。

あと5分。

だがそれだけあれば、もう一度アプローチしてきたミグ21が機銃を撃ち込んでくる。

先程の被弾でコルトは満身創痍。「せめて、なにか身を守る地形や物があれば……！」  
そう、魔力障壁が一方しか守れないのなら、壁を背に戦えばいい。

あるいは敵機機銃を防げるほどの盾　だがそんなもの。

(　あつた!?)

コルトが蹴り落としたミグ21。

この戦闘機もSSなら！

パイロットが脱出済みなことを確認して、ソフィーからコルトの制御を一時奪う。

「え、ちよ、なにする気!?’」

右手だけで大剣を持ち、左手でミグ21の残骸を掴む。

尾翼あたりを握り潰し、内部のグリップを保持。

「ミグ21の障壁を使う気?でも、外部からストライクモードの起動なんて」

違う、そうじゃない。

わざわざ鋼の巨人をもう一人生み出す必要はない。

クリスタル(俺)から漏れる魔力、その密度を上げる。

コルト全体どころか、周囲の空間をも満たすほど。

そう　ただ握っているだけの左手から、ミグ21のSSとしての機能を起動してしまうほどの魔力濃度。

(目覚める)

ミグ21からコックピットと主翼が脱落し、一本の剣となる！

「……嘘。凄い、単独でこんな高出力の魔力放出をするクリスタルなんて……！」

腕を左右に開き、双方の大剣から障壁を発生。

コルト全体を、魔力の壁で包んでしまう。

《ば、馬鹿な、ありえん!?’》

機銃が降り注ぐが、今度は一発たりとも通さない！

よし、この調子で耐えていけば！

《っ！ 仕方がない ストライクモードへ切り替える》

隊長らしき男の指示。

ミグ21がコルトを取り囲むように着地する。

《隊長、帰還を考えると残りの魔力が》

《判っている。だが、共和国の人間に我々を見られた以上生かして返すわけにもいかん》

「なによ、ロケット弾撃ってこなければ気付かないまま帰ったわよ！」

《そうか、運が悪かったな》

「……ふーん」

ん？

ソフィーの目が据わっている。

「ソードモードでちまちま撃たれていれば、反撃の手段はなかったんだけど、ね」

二本の剣を構えるコルト。なんだなんだ。

《ストライクモードであればどうにかなると？》

「ええ、そうよ。だって私は」

二振りの大剣を奔らせ、一気に踏み込む！

ミグ21とコルトのエンジンを要いた踏み込みは、この場において最速。

《なっ！？》

「 私は、銀翼の天使を目指しているんだから！」

反撃すらさせず、1機を細切れにする。

「2機目ええ！」

大剣を振るい脚部を両断、バランスを失ったところで主翼を切断。あつという間に2機を撃破。

……っえー。

ダメージを感じさせない動きでコルトはミグ21を圧倒する。

否、機体ダメージのあるコルトはミグ21より出力が確かに落ちている。

だがそれをエンジンにて補い、あるいは敵の死角に入り込み、瞬く間に3機目も撃破してしまう。

「どうよ、これが私の実力よ！」

あ、これは無理している。

声色は毅然としているが、顔は割と青い。

威勢が良かったのは敵に呑まれない為か？

《……呆れたな、迷い猫かと思えば虎だったか》

「……褒めてる？」

《褒めてるさ》

よかつたな、ソフィー！

「きやああ！」

隊長機の踏み込みを大剣で防ぐ。

勿論防いだのはソフィーだ。俺じゃない。

にやろ、マジで音もなく切り付けてきやがった！「いくぞ！」と

か「くらえ！」とか言えよ！

《ふん》

続く連撃。

ソフィーはそれを受け止めることしか出来ない。

なぜ。他の3機は接近戦では圧倒出来たのに。

2本の太剣を振るうが、ミグ21は最低限の動きでそれをかわし、反撃する。

《SSは速度ではなく小回りの良さを生かす兵器。二刀流など機動性を殺すだけだ》

「ご教授どーも！」

「ならっ！」

エンジン出力を上げ跳躍、距離を取る。

ミグ21は機銃を放つが魔力障壁で防御、そして着地。

「コルトは速度を生かす戦いだって出来る！」

《ストライカーでやる必要があるか？》

ミグ21がコルトの背後に回る。

ソードモードに戻った状態で。

「なっ!？」

即座にミグ21のストライカーが再出現、魔力刃を振るう。

「まだ!」

ソフィーは咄嗟に背に剣を回し防御。見えてもいないのに、どうやって。

《いい勘だ》

「一対一なら、まだ戦え……」

ソフィーの言葉が途切れる。

加えて、俺自身に襲いかかる強烈な疲労感。

な……なんだ？体に、ストライカーに力が入らない……

「コルト! 魔力切れ!？」

見ればクリスタルの魔力を示すメーターがレッドゾーンに突入している。

散々魔力を放出したのは確かだが、有限だったのか。

魔力がゼロになれば、俺の意識はどうなるんだ？

…… ええい、それは今は置いとけ。

《複数の敵機との戦闘、SSの2機同時起動……魔力切れは当然だ》

一歩一歩コルトに近づくミグ21。

無防備なようで、警戒は一切緩めていない。

《運が悪かったな。……むしろ、それだけ暴れて、魔力が今の今ま

で持っていたことが異常だ》

「動いて、コルト!」

力が入らない。

意識が混濁する。

眠い。

これは、あの感覚だ。

町でスリープモードに入った時の。



ねむ、い……

「コルトッ！コルトオ！」

必死に呼び掛けるソフィーの声。  
遠く、遠くにしか聞こえない。

涙目のソフィー。

美少女を泣かせてしまった。

「この、このっ……！」

コックピット内で拳を握り締め、眼前のキャノピーガラスをぶんどる。……なにやってんの。

「私だつて頑張ったんだから、あなたも頑張りなさいっ！」

ガラスに罅が入った。腕力凄い。

「あとちよつと、ちよつとだけなんだから！」

頑張りたい。

頑張らない、と……

そうしないと、ソフィーが……

「目を醒まして！コルト！」

コルトと呼ぶな、俺はそんな名前じゃない。

「コルトッ、……コルト？」

俺は……俺の名前は……

ソフィーの瞳が戸惑ったように揺れる。

だが困惑の色はすぐ消え、口から漏れたのは。

「起きなさいっ」

『「」

……お？

美少女が俺の名前を呼んでくれた。

それも、真っ白なとびっきりの美少女だ。

これは頑張らざるをえまい。

現金だと言われようと、なんか元気だたわ。

むしろ湧いてきた。

無限とすら錯覚する昂揚感。

自分馬鹿じゃね？馬鹿じゃね？

なんで名前呼ばれただけで復活してるんだか。けどいいじゃないか。嬉しかったんだから。

理由なんてどうでもいい。

ソフィー、いくぞ。

目前まで迫るミグ21。猶予はない。

再び充実した魔力を解放する。

先までの比ではない。コルト全ての回路を焼き切らんとする出力。メーターは最高値まで一気に上昇し、上限を超えて針をへし折る。導線が溶け、だがその密度故魔力は末端まで潤滑に供給される。魔力刃の術式キャパシティを簡単に超越。知ったことか。限界を超えた魔力が機体設計の想定以上に大きな魔力刃を形成する。

バチバチと魔力を帯びる双剣。

その長さ、ゆうに30m。

ストライカーの3倍の巨大剣を構え、コルトは再び立ち上がった。

《な に？》

「やああああああ！！！」

硬直したミグ21。

独楽のように回転し、ストライカー中心のコックピット、その上下を叩き切る！

機体を砕き、後方の地形すら抉りながら振られる大剣！

ミグ21は泣き別れた機体を地面に叩き付け、崩壊した。

《……化物、め》

男がコルトの眼下で俺達を睨み付ける。

《まさか、この私がベイルアウトさせられるとは》

咄嗟に脱出していたのか。

《5対1で、機銃も使えぬSSに後れをとるなど……無様》

男は木々の間にたちまち消える。

《どこまでもふざけた機体だ　覚えておくぞ、白いエンテ翼》  
森を薙ぎ払えば殺せるだろうが、ソフィーはそんなことはしない  
だろう。

「おわ、った」  
力なく崩れ落ちる。

俺も気が抜けて、ストライクモードが解除される。  
ソードモードとなり地面に転がるコルト。

「やった、やったあ……！」  
ポロポロと泣き始めてしまった。

「勝った、助かったよあ……」

《　退けたのか、単機で》  
コルトの上空を黒い機体が過った。

《こちらイーグル。先程通信した援軍だ。無事か、娘？》

「遅いわよっ！」  
思わず突っ込むソフィー。

《遅くなどなかったさ。5分以内に俺は到着した。君が早かったん  
だ》

ゆったりと旋回する黒いSS。  
イーグル、驚か。

どこかで聞いた名だ、と言っとくべきなのかな。

「なんなの、あのミグ21は？帝国軍？正規軍なの？」

《それに答えることは出来ない》

「なによそれっ。私は殺されかけたっていうのに！」

黒い機体を睨み付ける。

《知れば君にも危険が及ぶ。巻き込まれた部外者をこれ以上危険に  
晒すわけにはいかない》

「……むう」

《君が危険に晒されたのは俺の落ち度だ。せめて首都までエスコ―  
トさせてほしい》

「え、えええ。……お願いします」

ソフィーが微かに動揺する。  
ついでに俺はイラツとする。

声だけで判る。こいつ、イケメンだ！

むかむかする。田舎から出てきたばかりのイモっ子を引っ掛ける  
とは。

《だが少し時間をくれ。野暮用を済ませる》

野暮用？

イーグルが加速する。

畜生、じっくり見たかったのに！もつと近くで飛べよ黒いの！

イーグルが向かう先を見やる。

背筋が凍った。

「み、ミグ21……それも、あんなに」

10機編成のミグ21。

さっきのと合計して、15機もいたのか？

なにが起きているんだ、一体。

本当に戦争でも起きようっていつのか。

「貴方、ちよつと！ソードストライカーは対集団戦が苦手なのよ！

」？

《……それはどんな兵器も同じだ》

迷いなく突っ込む黒いSS。

機体をバンクさせ機銃、ではなくガトリングか、を掃射する。

それだけで3機が墮ちた。

「な、え、あの距離で？」

一方的な攻撃だった。

ミグ21の機銃とイーグルのガトリング、連射速度はともかく命

中率にそう差はあるまい。

目測で彼らの距離は2キロほど。……なぜ当たる？

イーグルは弾かれるように加速、音速突破する。

二条の白い尾を引きミグ21へ急加速。

迷いを感じさせない特攻に動揺したミグ21が機銃を乱射するが、

黒いのは射線を潜り抜けつつも敵機に照準を合わせ、2機撃ち落とす。

更に次の標的を正面に捉える。  
ガトリングで八チの巣にするのかと思ったが、奴の行動は予想外だった。

空中にてストライクモードに変形。

ミグ21を踏み場に、急制動をかける。

真正面から蹴りを食らったミグ21は、吸気口を、コックピットを、エンジンを砕かれスクラップと化す。

「うっ」

ソフィーが口を手で押さえる。

間違いなく、今のはミグ21のパイロットを潰していた。

あの男は凄腕だ。そして　躊躇がない。

空中にて一旦停止したイーグル。

やはり漆黒の機体に、丸みと鋭角を兼ね備えたシルエットのストライカーだ。

失速したイーグルは地に落ちる。

「　駄目っ」

さっきのコルトと同じ状況だ。

「魔力障壁じゃ、全包围からの攻撃をやりすぎせないっ」

コルトは魔力障壁を二重展開することで耐えた。だがイーグルにそんな真似は出来まい。

《……このような状況で魔力障壁に頼るのは下策だ。戦術の選択肢が減る》

やはり四方より迫るミグ21。

だがイーグルは動かない。

《ストライクモードの利点は反射速度と俊敏性。ソードモードとは違い神経を直接接続することによる、小回りの良さを生かすものだ》

イーグルは大剣を正眼に構え、跳躍！

その空間を四条の機銃が撃ち抜く。

紙一重でかわしたイーグルがミグ21に迫る。  
そして、飛び蹴り！

(またかいっ)

ミグ21を踏み台にして後方宙返り。

後方より飛来するミグ21を銃撃。

左右より挟み込む2機を魔力刃で両断。

それだけで、4機全てを落としてしまった。

「凄い」

目の前で殺人が行われた。

そんな事実を忘れるほど、その戦いは鮮やかだった。

俯くソフィー。

前くらい見てほしいが、彼女も色々疲れたのだろう。

というか無意識に機体を安定させている。来る時は必死に操縦桿を握っていたのに。

……操縦系のワイヤーもいつの間にか復活している。我ながら意味が判らない。

首都への帰り、コルトとイーグルは並行して飛んでいた。

機体名しか明かさなない怪しい男だが、ともかく敵ではない。

ソフィーが呆然自失としていたので俺が男を監視しよう。

イーグルは2枚の垂直尾翼を備えた双発エンジンの機体だった。

垂直尾翼に傾斜はなく、胴体は縦ではなく横に平ら気味。魔力刃は側面に発生するらしい。

機首のガトリングは多分20ミリ。あとはエンジンにギミックがありそうだが……さて。

結論からいえば、機動力高そうでかつこいいい。

……正直、流石にここで趣味に走るより、ソフィーを心配すべきだとは判っているのだが。

言葉一つ掛けられないこの身でなにが出来よう。

(ソフィー……)

くそ、なんで声が届かないんだ。

そのイケメン！お前でもいいから彼女を慰める！

「……ん、どうしたの？」

感付かれた。

ふん。自分のことを差し置いて俺を気遣うアホ娘にはこうじゃい！  
操縦系を出鱈目に動かしてみる。

「うわ、きゃあ！駄目だつて！」

バランスを崩し錐揉み状態となるコルト。

ほんと、安定性のカケラもない機体だ。

短時間で回復するソフィー。俺を睨み付ける。

「危ないじゃない！なにするのよ！」

不景気な顔すんなよ、生き残ったんじゃないか。

《……俺がなにかしたか？》

「あつ！？いえ、貴方じゃないの。……独り言よ」

《……そうか》

お前、俺達のこと残念な人を見る目で見たる。

ばつの悪そうな顔でイーグルを見つめるソフィー。

ふいに、その目が見開かれた。

「銀翼？」

ソフィーが見つめる主翼の端。

翼端だけがペンキの塗り忘れのように、銀色に輝いていた。

「シルバーウイングス、嘘、現役の……？」

シルバーウイングス。

ソフィーが目指し、ソフィーの父親が至った地点。

「貴方、何者？」

《俺の正体など……まあいい》

男は告げる。

今後、ソフィーと深く関わることとなる、俺としてはすっぱー忌

まわしい男の名を。

《俺はギイハルト。ギイハルト・ハーツだ》

古代文明の遺産より、数百年前に復元された超技術。  
それまで研究されていた熱機関、電動機関を遙かに凌駕する出力と汎用性。

『半永続型魔力内包結晶』  
通称、クリスタル。

透き通った宝石のような外見からそう呼ばれる結晶を利用した人型兵器は、それまで夢物語と馬鹿にされてきた航空学分野にも多大なる発展をもたらした。

否。それ以来、航空機は異常とすらいえる発展を遂げた。

超大型の船が空に浮かび、鋼鉄の鳥が音速の何倍もの速度で駆け巡る。

家庭には飛宙船が一つは確保され、職場への忘れもの取りに宙を舞う。

この世界に生を受けた者は親に空の飛び方を教わった。

戦乱の時代でも。

平和の国でも。

勉学の合間でも。

墮落の真っ只中でも。

常に、空を見上げれば鉄の鳥が羽ばたいていた。

当初は混乱し無法と行ってよかった空も、次第に整備され事故数も大幅に減った。

正規の航空機教習が法に取り入れられ、その技量が個人の将来に影響を及ぼした。



任意とはいえ一人一人の技量は資格という形で区分され、やがて天才と呼ばれる者も現れた。

数百年の間に航空機は生活と密着し、決して切り離せないものとなったのだ。

個人の技量を示す航空機資格は多くのランクに分けられた。

それらはやがて国境を跨ぎ全人類共通のものとなり、最終的には4段階に落ち着く。

最も低いランク。職業パイロットとして最低限の実力である『フリーウイングス』。

稀に、優秀な技能者と認められた者に与えられる『メタルウイングス』。

そして、エースパイロットやトップガンと呼ばれる達人『トップウイングス』。

最後に、全人類共通航空機資格における最高峰。

取得割合、実に一億分の一。

神技を超え、悪魔の域に達したとすら評されるパイロット達。

最高位 『シルバーウイングス』。

現在全ての人類を総計しても二桁しか存在しない、生きた伝説。人は彼らを、多大なる敬意と僅かな畏怖を込めてこう呼んだ。

『銀翼の天使達』、と。

## 一言後書

なぜもう一人の主人公が女の子かつて？

よし、イメージしてみなさい。二機の戦闘機とパイロットがいるとする。

片方はむさ苦しいオッサン、もう片方は華奢な美少女だ。

両者が戦うと、勿論乗っている二人は強力なG（加速度）で悶え苦しむ。

悶え苦しむ、むさ苦しいオッサン。

悶え苦しむ、華奢な美少女。

な？

## 日常

涼しげな空気が流れていた。

窓から部屋に風が流れる。

薄暗い室内は、まめに掃除をしているのか埃っぽさはない。

ソフィーの髪が風で微かに揺れた。

白い髪を押さえつつ、彼女は机の上に置いた本を捲る。

「ん　　ないなあ」

彼女が読んでいるのは名簿だった。

「お爺さん、これって新しい名簿ですよね？」

「まあ、それなりにな。共和国が一番最近発行したパイロット名簿

じゃ」

店番をしている祖父の声が、くぐもって聞こえる。

ここは初依頼の前に立ち寄った、ソフィーの祖父が営む雑貨屋。

その奥に存在する書物庫である。

この雑貨屋、表は小さな商店だというのに奥に深い。

奥が深いのではなく、立地的に奥に深い。

祖父の声がくぐもっていたのは単純に距離があったから。

……何者なんだろう、ソフィーの爺さん。

ここの蔵書はちょっとした図書館だ。

書物の収集家、というレベルだろうか？

「シルバーウイングス……ギイハルト」

本の最高尾、たった1ページで書かれた項目。

そこに並ぶのは銀翼を冠する者達の名。

本自体は100ページ以上ありそうだというのに、銀翼はたった

これだけか。

地球でいえば、軍のアクロバットチームに選ばれるくらいの難易度かね。

いや、宇宙飛行士に選抜されるくらいか？

「本当につい最近、シルバーウィングスに昇格したのかしら？」  
結局名前は載ってなかったか。

つかあんな男のこと、ほっとけ。

しばし黙考したソフィーは、本の最初の方のページを捲る。

いや、こつちには載ってないだろ？

フリー、メタル、トップ、シルバーと並んでいるんだから。

と思いきや、彼女が探していたのはこの名前だった。

『ソフィー・ファレット・マリンドルフ』

「えへ」

嬉しそうだなー。

しかし、やっぱり長い名前だなー。

「ふむ、ソフィーちゃんの思い人の名はなかったか？」

爺さんがやってきた。

「お爺さん、そういうのじゃないです」

眉を潜めるソフィー。

「……むしろ苦手です」

「ふむ？ なんじゃ、そうなのか？」

「はい」

苦い思いを滲ませつつ立ち上がる。

イーグルの容赦ない攻撃は、殺人を忌避するソフィーにとって許容出来ないはず。

「ソフィーちゃんは優しいからのう。……そんな優しさが通用する時代で良かったわい」

「甘いつて、言いたいんですか？」

「いやいや。ソフィーちゃんは間違いなく正しいぞ」

がしがしと彼女の頭を撫でる爺さん。

うわ、髪の毛が乱れてすげー嫌がってる。

「少し前まではそんな優しさが通用しない時代じゃったということじゃ。腕のいいパイロットであれば尚のこと、な」

10年前の大戦、ってやつか。

「私の友達は、こんなままじゃこの先やっていけないって」

「手厳しい友達じゃのう」

「マリアのことだな。」

「確かに難しいことじゃ。或いは不可能とだっていい。でもな」  
「爺さんは遠い目で窓の外、空を見つめる。」

「その瞬間に選ぶのは、他でもないソフィーちゃんじゃよ」

再びソフィーの頭を撫でる爺さん。

今度は優しく、髪を梳くように。

孫娘は目を細める。なんとなく心地よさそうに見えた。

「死ぬなよソフィーちゃん。安全な依頼を優先して選ぶんじゃ。それが許される時代なのじゃなからな」

「……はい。よく解ってます」

初任務で散々な目に遭ったからな。

帰還したソフィーに駆け付けたマリアの取り乱し様は酷かった。  
いきなりグーで殴ってきたしな。

ソフィーもキャノピーを殴りまくってたし、この世界の女は兇暴過ぎる。

「安全第一、です。あんなのはもう沢山」

「うむうむ。ついでにもっと安全な職に就いてくれたら嬉しいのじやが」

「私から翼を奪う気？」

ソフィーの語録から敬語が吹っ飛んだ。

眼光鋭く祖父を睨み抜く。

だが彼は飄々とした空気を乱すことはなかった。

「ほっほっほ、そんなところは馬鹿息子そっくりじゃ。ソフィーちゃんも空に呪われておるな」

「呪い？」

「そう、呪いじゃ。空に呪われた者は、空以外で生きること死ぬことも敵わなくなる」

それは、なんとも酷い呪いだな。

「もう行きますね。お仕事しないと」

「ギルドか。なんならわしの店で雇ってもよいのじゃがな、ソフィーちゃんみたいな可愛い子が看板娘となってくれればこの店も安泰じゃ」

「資料、ありがとうございます」

でも、とソフィーは花も恥じらう笑みで付け加える。

「いやです、こんな胡散臭い店の看板娘なんて」

「ぐはっ」

……ソフィーも胡散臭いと思っていたのか。

初任務から何回目かとなるギルドへ。

ソフィーは迷わず、顔馴染みの受付けへと向かう。

そして一言、

「彼氏出来た？」

「だから余計なお世話よっ！」

スパーンとスリッパでソフィーの頭を叩くマリア。

「ほら、仕事を受けるなら先に紙を選んで来なさい。私から連絡することはないわ」

「と、いうことは……私の受け入れ先、まだ見つからないんだ？」

マリアの対面に座りつつ訊ねる。マリアの言葉は完全無視だ。

「ええ、安全なところを探しているけれど……コネもなしに入社するのはやっぱり難しいわね」

肩を竦め自嘲するマリア。ん、なぜ自嘲？

「そんなに難しいの？航空事務所に所属する人なんていっぱいいるじゃない」

「そこら辺の適当な事務所に、貴女を預けるなんて出来ないわよ」

「どうということ？違法行為に手を染める事務所なんてそうないでし

よ？」

「違法行為はともかく……色々あるのよ、若い女の子が社会に出るっていうのは」

難しい顔でペンをクルクル回すマリア。

まあ、なんだ、あるんだろうな色々。

ソフィーみたいな美少女なら尚更。

そもそも見た目と年齢釣り合っていないし。

「紳士的かつ貴女と釣り合う實力を持った事務所、難しい注文ね」「ふうん」

また、よく解っていない顔してるし。

外見は垢抜けているが、中身はやっぱり田舎者なのな。

だがフリフリリルでギルドに来るのはどうかと思う。

「今日のところは単独で依頼を受けてもらえる？ごめんね、私が探すって大口叩いたのに」

「うん。自分の仕事もあるんだから、無理しないでね。ありがとう」手を振って席を立つ。

壁に張られた紙を一枚ずつ確認する。

……やはり、荒事に関わる依頼は避けているようだ。

前回は橋の修理、前々回は荷物運びだったか。

航空ギルドってそんな仕事も請け負うのかよ。

この世界ではSSのストライクモードで土木工事は普通らしい。

建物を建てるのも、橋を建てるのも、お城を建てるのも。

町の上空を飛ぶ機会があったが、あちらこちらにストライカーが居た。

重機どころか自動車すらないからな。汎用性の高い巨大人型兵器であるSSは重宝されるのだろう。

しかし、ここまでくるとやはり異常だ。

コルトの機体そのものは地球より劣った冶金技術で作られていた。

いや、冶金技術というべきか……素材技術？

加工技術は職人技でカバーしている印象がある。

しかし電子装備などは持たないローテクの塊なのだ。  
だというのに。ストライカー部分、人型機械部は違う。  
完成され過ぎている。

ジェネレーターやアクチュエーター、それらを統括する神経接続  
システム、どれもが地球の水準を超越している。

やはり、ソードモードはオマケで、ストライカーの技術だけは……  
俺はソフィーとグリードの会話を思い出す。

これは、コルトが初依頼より這々の体で帰還した後日談である。

「面倒事に巻き込まれたみたいだが、よく生きて帰って来た、穰ち  
やん」

「あ、ありがとう」

「……で？」

「はい」

整備室に納まったコルト。

各パーツを外され胴体のみになったそれを見上げ、グリードは眉間  
を揉む。

「なにをした、穰ちゃん。怒らないから言ってみる」

「えっと、その」

ソフィーは視線を逸らし、頬を掻く。

「なんか形、変わっちゃいました」

「星付けてんじゃねえよ」

「……ごめんなさい」

俺が強引にミグ21の機体を使用したせいか、コルトには奇妙な  
変化が起きた。

基本的には変わらない。真っ白なエンテ翼。

ただ、機体上部に追加装備が為されていた。

コルト本体よりは細く短い、だが面形成された魔力式推進エンジ



ン。

そう、ミグ21のエンジンだった物だ。  
まるであれだな。

大型旅客機に背負われたスペースシャトル。  
戦闘機がミサイルを背負えばこんな感じだろう。

コルトの垂直尾翼が震電と同じく主翼の途中に付いていたのが幸  
이었다。通常機のように垂直尾翼が機体後部に設置されていれば、  
追加エンジンの排気が垂直尾翼に直撃していたから。

「重さで機動力下がってねえか？」

「旋回性能は下がってるわ。でも加速やトップスピードは上がって  
る」

初任務後、着陸する前に一通り確認しておいたのだ。

しかし珍しいよな、上下に二つのジェットエンジンエンジンって  
ライトニングという戦闘機が確かそうだったと記憶しているけど。

「とはいっても想像よりは回頭も早いし、進行方向が変わっても速  
度が落ちないから格闘戦には強くなったと思う」

「超音速飛行は？これだけの推力なら音速突破出来そうだが」

「試してないわ。空中分解したら嫌なもの」

「まあ、そうだな」

必要もなく危険を犯すこともない。それに俺だってどうなるかは  
判らない。

音速突破に必要な技術は幾つか聞いたことはあるが、それらがコル  
トに搭載されているわけでもない。

ま、フーかバラけるんじゃない？

ソフィーが俺メダルの紐を握った。

(ん？ の、おおおおおおお！?)

握り締めた紐をブンブン回すソフィー。なにをする!?

「穢ちゃん？」

「あ、ごめんなさい。ちょっと躓を」

俺は犬か！

「とにかく、この追加エンジンは外しておくか？切り離せば以前の  
コルトに戻るみたいだしよ」

「……いえ、このままにしておいてくれる？」

この追加パックは脱着可能である。

「追加されただけじゃなくて、コルト本体の軸が変わってるの。追  
加エンジンを外したらバランスが悪くなるわ」

「マジかよ、機体の根本的な設計から変わっているっていつのか？」  
とはいえ外しても飛べるとは思う。

外せば以前のコルトのまま、高い旋回性能を持ち魔力刃は一本。  
装着すれば重くなるが、出力の上昇かつ魔力刃は二本、二刀流。  
なんだろうね、この面白機能（笑）

「えいつ」  
踏み付けられた。

「いや、穰ちゃん、さつきからなにクリスタルを痛めつけてるんだ  
？」

「だから賤よ」

俺に対する扱いに抗議したい！改善を！愛を！

具体的には、いつものようにその平坦な胸の上に俺を！さあ！そ  
の大平原に！

グリグリ踏み躪られた。いやん、感じちゃう。

これで声が届いていないというのだから、驚きである。

しかし、これはこれで問題ではなかるうか。

いや俺が に目覚めそんなことではなくて。

ソフィーが撃破した5機のミグ21、その隊長が漏らしていた言  
葉。

小回りを生かすSSに、二刀流は合わない。

現実問題、二刀流とはかつこいいが実用性は低いとされている。

剣道の試合で使っている人がほとんどいないように。

この一種改悪的な変貌を有効に利用するには、なにかしらの工夫  
が必要そうだ。

「まあ、ソードの方はまだ俺でもなんとかなる。けどよ」

グリードは部屋のもう片方、巨大な鉄塊の鎮座する側を見やる。

「随分派手にやられたな。全身銃痕だらけだったぜ」

鉄くろがねの人型だった。

姿勢よく台座に寝そべる、10メートルの巨人。

無機物であるはずなのに、有機的にしか見えない筋状の金属。

骨格や関節部から覗く、機械やコード。

頭の部分には電線が集中し、その周囲にセンサーが密集していることが窺い知れる。

胸部にはぽつかりと穴が開いており、この空間にコックピットが埋まり込むのだろう。

そう、これはソードストライカーの『内側』である。

「やっぱり、外部装甲は貫かれていた？」

部屋の隅に綺麗に積み上げられているのは、コルトの外装。

巨人の鎧たる、純白の衣。つまりソフィーのいう『外部装甲』である。

「ああ、素体も傷だらけだった。元よりストライカーの装甲なんて気休めみたいなもんだからな、鉄の鎧つつーより布の服だ」

「なら、本当はなくてもいいの？」

「素っ裸で戦うわけにもいくまい」

二足歩行などという不安定極まりない代物だ、あまり重装甲は施せまい。

「とりあえず埋まった弾を取り除いた。とはいえ数日は動かせんからな」

「ストライカーの素体って今の人間には作れないんでしょ？よく修理なんて出来るわね」

作れない？どういうことだ？

「人間の医者だって、人間を作ることは出来なくても傷を早く治すことは出来るじゃねーか。確かに素体の制作法はロストテクノロジーだが修復法がなければ数百年も使い続けることはできっこねえ」

ロストテクノロジー、技術が遺失しているのか？

どんな経緯で歴史から消えたかは知らないが、勿体ない。

というか、つまり素体は機体とは別に数百年間騙し騙し使い続けているのか？

むう、判らん。

なんとなく素体の頭部を睨み付ける。

複雑に絡み合ったコードが、なんとなく俺を嘲笑っているように見えた。

「……ねえ、ずっと疑問だったのだけれど」

「あん？」

「ストライクモードって、魔力消費が跳ね上がるじゃない」

「それがどうしたよ」

「なのに、今整備している時はどうしてクリスタルなしで存在していられるの？」

俺はこうしてソフィーの首にぶらさがっている。

確かにコルトのストライカーは、魔力供給なしで目の前に存在していた。

「……あー」

グリードは目を閉じた後、しばらくして頭を軽く抱える。

「な、なによ、その反応？」

「お穢ちゃん、ひよっとしてストライクモードの時魔力を馬鹿食いするのを、ストライカーの維持の為だと思ってないか？」

「違うの？」

「ちげえよ。いいか、主翼に刻まれているのは空間魔法じゃなくて召喚魔法だ。おおかた、戦闘機の時ストライカーを異空間にでも放りこんでいるとでも考えてたろ」

「召喚魔法？それって、別の場所から物や生き物呼び出す魔法でしょ？普段はどこにあるのよ、ストライカー」

「知るか。謎っつーことになってる。学者は色々言ってるみたいだがな、遺跡の奥深くだとか大地の下だとか、果ては空より高い場所

だとか」

宇宙か？

「ストライクモードで魔力の燃費が悪くなるのはどうしてだと思う？」

「……ストライカーを維持する為、じゃないのよね？」

「違う。確かにストライカーの維持の為に魔力を使用しているし、その効果で背中の羽が光るんだが、そんなもん微々たるもんだ。真に魔力を消費するのは、ストライカー自身さ」

つまり、人型の駆動か。

「ストライカーが？ 繊細な動きをするには適しているけれど、大きな動きをするものじゃないじゃない。あれってそんなに魔力を食うの？」

「たりめーだ。考えても見る、ストライカー、つか素体は全身が金属筋肉、つまり飛行機でいうエンジンだけ？ それを常に緊張させて姿勢を制御しているんだ。立ってるだけで魔力を使うんだよ」

まあ、人間も立っているだけで疲れていくしな。

「いいか、主翼に刻まれた召喚魔法は二種類の召喚方法がある。虚数召喚と実数召喚だ」

「魔法は専門外よ……」

「俺だつてそうだったの。これくらいパイロットなら常識だから、黙って聞いてろ」

とはいえまるっきり無知ではないのだろう。知識がなければ修理も不可能だ。

「簡単にいえば、虚数召喚は常に魔力を消費するが一瞬で即座に呼び出せる召喚だ。呼ばれた物質、ストライカーは虚数物質であり存在しないが存在する状態に維持される。つまり、戦闘中のストライクモードのことだ」

存在しないが存在する？

ごめん、なにそれ意味判らん。

「そして実数召喚、これは長時間かけて行う召喚だ。時間と準備が

必要だが、一度呼んじまえば物質として目の前で固定され魔力の維持も必要ない」

つまり今の状態だな、とコルトの素体を指差す。

「この状態では整備や簡単な改造が行える。だがストライカーっていうのは未知の技術が多いからほとんど手を加えられない。だからこそ、SSの個性はストライカーではなくソード、武器の方に現れるんだ」

個性、ね。

コルトが二刀流を行えたりする以外にも、多種多様なSSがあったりするのさ。

きつとソフィーがパイロットである限り、それらを見る機会もあるだろう。

ああ楽しみだ。実に楽しみだ。

それが敵であろうと味方であろうと、ロボットは男の浪漫なのだから。

「これにするわマリア」

……おっと、思考の海に沈んでいるうちに依頼を見つけていたか。

「なになに、空港の新ブリッジの建築作業……って、また手近ねえ」

空港ブリッジ、ってあれか。何度が見てるが確かにボロ臭い建物だった。

ブリッジとは管制塔、空港には必ずある高い塔だな。そこから飛行機の離着陸を管理する。

初任務の時はレンタルのおっさん、グリッドが指示していたが、あれはおっさんの独断らしい。おい。

「まあ、私としては安全な依頼ばかりでいいんだけどね……」  
釈然としてなさげなマリア。いいだろ、本人が納得してるんだから。

「……………うん」

……………納得して、ないよな。本人も。

「よう嬢ちゃん、コルトを借りに来たんだな」

「ええ、お願い」

すっかり顔馴染みとなったグリッド。

あれ以来、なんだかんだでソフィーはコルトを気に入ったらしくこの白亜のエンテ翼だけをレンタルする。

「いつそ買い取れよ、お前さんにしか扱えねえんだから」

「ふふん。そんなお金があるとでも？」

髪を掻き上げ鼻を鳴らす。

だから自慢するなど。

「回転率が悪い……………どころじゃねえからな。店に置いてくだけで赤字だぜ」

「う、ごめんなさい……………」

モスボール処理する予定だったらしいしな。

飛行可能な状態に維持するだけでも手間は掛かる。ソフィーが定期的に乘る以上劣化はしていくし。

「あの、モスボール処理してしまっていていいですよ？お金が貯まったら買い取るので」

モスボール処理とは、えっと、なんだっけな？

再利用可能な状態で長期保存用に機体を解体することだったと思う。

「その間嬢ちゃんはどうかやって仕事をするんだ？」

「それは、その。適当な機体で」

ドワーフらしい太い指の拳が、ソフィーの頭に落ちた。

「きゃう……………」

珍しい痛みが方だな。

「ガキが変な遠慮すんじゃないよ」

「だ、だつてえ」

「……まあ、俺も悪かった。自分の仕事を愚痴るのはよくねえな」  
金にならない商品を引っ込めるのも仕事だとは思うが、やっぱり  
いおっさんだ。

「今日もコルトは絶好調だぜ。お前さんが変な改造して以来もな」  
「私がやったんじゃないわよう」

しゃがんで頭を押さえるソフィー。涙目がラブリー。  
でも魔改造は、たぶん俺のせい。正直スマン。

「エンジン、コンタクト」

魔力の炎が心臓に宿る。

コルトに機乗したソフィーは、機体をゆっくりと走らせる。  
目的地は距離0、05キロメートル先の管制塔完成予定地。  
無理矢理キロで表したが、精々50メートルってこった。

今までの依頼では少なくとも空は飛んでいたのに……今日は離陸  
すらなし。

あのふわーって感覚、好きなのに。

とか考えているうちに到着。早い。

基礎工事は終わっているのか。地面に色々穴が開いている。

ミーティングをしていたらしき男達がコルトに気付く。爆音轟か  
せているし気付かないわけがない。

「あの、こんにちはー！依頼を受けた者です！」

「依頼？」

きょとんとコルトを見上げる作業員達。

「あ、ああ！依頼か！管制塔の建築作業だよな！？」

「はい！」

「ならもうちょっと待ってくれ！あと二人来るはずなんだ！一緒に  
作業した方が効率がいい！」



「判りましたー！」

付近には2機のSSが止められていた。

「コルトもそこに並ぶ。」

「ギアロック、パワーオフ、っと」

クリスタルをコルトから外し、地面に飛び降りる。

「備え付けられている車輪止めを設置し、付近の芝生に腰を降ろすソフィー。」

「こら、草の色が移るだろ！真っ白な服なんだから！」

「ふう」

体育座りで足をクロスさせる。

物憂げな表情を浮かべるソフィー。

時々、こんな顔をする。

「一番空を飛びたいのは、この子なんだろうな。」

無意識のうちに『何か』を握るような仕草をするし。

あとスカートで体育座りはやめなさい。

「んだよ、この変な飛行機は？」

ソフィーのスカートの中が誰かに見られていないか、という最重要事項を自らの目で確認すべきか、いやしかし俺は変態という名の紳士であり、いやいやこれは彼女が恥をかかない為の配慮であり、などと葛藤している時。

俺達の耳朶にコルトを馬鹿にした声が届いた。

「あー。それは、追加要員の子の機体だ」

「つつつてもレンタルじゃねえか。……子？ガキか？」

「ソフィーが頭を上げる。」

（うわ……）

また、いかにもチンピラみたいなのが現れた。

「なにが変な飛行機よ、前翼機でしょ知らないの？」

「お気に入り飛行機を馬鹿にされて怒気を滲ませるソフィー。」

「あ？……なんだ、ほんとにガキじゃねえか」

「一応成人なんだけれど」

「嘘だろっ!？」

チンピラ、お前は気に入らんが気持ちは解る。

「んー、どした？」

チンピラ2号が現れた。

こいつらが今日の仕事仲間かよ。

「ほらよ、このガキが追加だつてさ」

「……へえ、別嬪さんじゃねえか」

黙れロリコン。お前は敵と認定した。

「なんだ、お前こついうのがいいのか？」

「いいじゃねえか、美人には違いなしし成人なんだろ？」

不躰な視線をソフィーに向けるチンピラ2号。

悪寒を感じたのか、ソフィーは身を擦じらせる。

「な、なによ。気持ち悪いっ」

立ち上がったソフィーが吐き捨てるように言う。

なんともはつきり言う子である。

「なんだと？」

睨み合うソフィーとチンピラ。

もう一人の方はニヤニヤそれを見守っている。

チンピラはソフィーに手を伸ばし、彼女はそれを避けた。

「やるっ」

「なにが野郎よ、女よっ!」

再び手を伸ばすチンピラ、その袖を掴み背負い投げ!

「つぐはあ」

男は無様に大の字となる。

残念だったな、うちのソフィーは意外と運動神経がいいんだよ。

伊達に一人で冒険したわけじゃない。

俺が威張ることでもないが!

「……喧嘩すんな、お前ら」

そこに仲裁が入った。

「親方っ」

「旦那……」

作業員の間から現れた男性。作業員のリーダーか。

「ほら、三人揃ったんなら作業を始つぞ。無駄な時間なんぞねえんだ」

「でも、聞いて下さいっ！こいつらが私に……！」

「……お穰ちゃん、それがこの仕事を始めることと関係あるのかい？」

「で、でも」

「お穰ちゃんもプロなら、まず役割を果しな。お前達もだ、馬鹿共。男性はソフィーとチンピラ共を交互に睨み付ける。」

チンピラ達はばつが悪そうに、ソフィーは唇を噛みながら頷いた。なんだよ、ちょっとは女の子の味方をしたっていいじゃないか。

ストライクモードとなり、鉄骨を立てる。

バケツリレーの要領で、切り出した岩を積み重ねて行く。

重機を使うより確かに早い。

地球では大仕事となりそうな作業がみるみる行われるのは、圧巻とすら思える。

他のパイロット二人も馴れた様子で作業を行っていた。むしろ、一番手間取っていたのはソフィーだ。

《お穰ちゃん、そつちじゃなくてこつちだ》

「す、すいません……」

ミスをするのもソフィー一人。

馴れていないのは承知しているのだろう、親方や他の作業員はさして文句もなさそうだった。

意外だったのはチンピラパイロット達か。彼らも文句どころか、時には助言すら与えていた。ソフィーも反応に困っていた。

黙々と司令塔を形作る。10分もすれば塔らしくなった。

というか、10分程度で作らなければならなかったようだ。

《チツ　旦那、こっちは残りの魔力量がレッドゾーンに入った》  
《俺もだ。今日はここまでだな》

二人は機体をソードモードに戻す。もし魔力残量が0となれば、その場から動けなくなるから。

これが時間制限の理由。クリスタルに内包する魔力には限りがある。魔力を馬鹿食いするストライクモードでは平均10分程度が限界らしい。

戦闘行為を行えば、魔力刃と魔力障壁に更に魔力を消費し5分間が限界の目安とか。

《そうか、判った。お前さん達はもう上がれ、お疲れさん》  
親方も当然それを心得ており、二人の仕事終了を認める。

たった10分の労働、その報酬も低い。自前のクリスタルとSSを所持してやってやると利益が出る。

ならば、SSをレンタルしているソフィーはどうするか。

《お嬢ちゃん、あんたも魔力切れが近いだろ？今日は上がりだ》

「いえ、まだ半分以上あります」

《……稼ぎたいからって無理すんな。いざ魔力切れしちまったら移動が面倒なんだ》

「本当です。私のクリスタルは高性能なので」

答えは簡単、その分長く働けばいい。

普通のクリスタルであれば10分が限界でも、俺の魔力はゆうに30分以上の稼働が可能だ。

前みたいに魔力を無駄遣いした戦闘行動ならともかく、ストライクモードの稼働だけならばそれくらいはいける。

《……そうか、ならもうちょっと働いてもらおうか。無理すんなよ》  
「はいっ」

ちなみにクリスタルの魔力は一晚で回復する。よかったよかった。魔力切れと同時に俺という人格が消滅したりしたら、さすがに嫌だからな。

数十分でだいぶ形が出来上がった司令塔。

魔力はまだ余力があったが、これ以上は手作業で行う領分のとこ  
とで追い返されてしまった。

《ソファイ機、コルトへ。次の飛宙船が着陸した後、東側滑走路に  
進入して下さい》

「了解」

笑みを浮かべつつ俺を撫でるソファイ！。

髪を纏め、ゴーグルを装備。

「どうせ今日中レンタルしてても金額は変わらないんだしね。ちょ  
っとくらい飛ぼっか？」

「えーい！」

燃費のいいソードモードであれば1時間は飛べる。かつ飛ばせ、

ソファイ！

「?1……VR、?2……！」

滑るよう加速するコルトは鮮やかに脚を離す。

「それっ！」

直後、操縦桿を豪快に引く！

機体は滑走路上で真上を向き、そのまま垂直上昇！

ブーストを使用しながらフルスロットル、出力全開。

エンジンが追加され、推力重量比が1を超えたことで可能となっ  
た芸当。

《ソファイ機、危険な真似は控えて下さい！》

「ごめんなさーい！」

反省してねえ。満面の笑顔だし。

俺も最高の気分だけれど！いつけー！

宇宙ロケットのように白い煙を引いて垂直に天に昇って行くコル  
ト。

次第に雲の上へ、上へと突き抜ける。

そして白い霧の向こう側は

茜色の夕日に染まった、パノラマの天球！

「気持ちいいー！コルトもそう思うでしょー！」

（ああ、最高だ！俺の名前コルトじゃねーけど！）

あの時俺の名前を読んだのは、偶然だったのか気のせいだったのか。

どうやら彼女は意識していなかったらしく、俺はもっぱらコルトと呼ばれていた。

それに思うところがないわけではない。

だが、今はそんなのどうでもいい。

ソフィーと共に飛ぶ、異世界の空。

俺の意思でこの世界にやってきたわけじゃない。

けれど、俺はここで過ごす日々を、満更ではないと思っていた。

「さあ、今日は思う存分飛ぶわよ！」

（おー！）

ちなみに、地上に戻った俺達は管制塔の人とグリードのおっさんに盛大に怒られた。

## 一言後書

## 主人公紹介

名前「石」

外見「石」

特徴「意思がある」  
備考「医師資格はない」

追記

SS設定を大幅に変えました。

ローテクノロジー（ソード）とオーバーテクノロジー（ストライカー）のすり合わせが想像以上に難しい。

今までの設定では整備シーンが描写しにくいんですよ。

でもほら、人型兵器が最も輝いているのって整備中じゃないですか（断言）。

## 事務所

「ここ最近の俺の朝。」

「……………」  
「ぼーっと虚空を眺めるソフィー。」

「白いネグリジエ、ずり落ちた肩がせくしー。  
ベッドの上で女の子座りのまま、数分経過。」

「お、倒れた。」

「くう」

「ああ、可愛い寝顔。でも二度寝はよくないよ。」

「おーきーろー。」

「……………」

「いいや。俺もスリープモードになっちゃえ。」

「はいおやすみ。」

「寝過ごしたー！」

「ドタバタと家の中を走り回るソフィー。」

「どうして起こしてくれなかったの、コルト!?!」

「理不尽だ！」

「えつと、今日の予定は、予定は……………」

「ぴたりとソフィーが停止する。」

「なんてこと　予定なんてなかったわ」

「寂しい奴だなおい。」

「いや、ソフィーに今日予定がないことくらい知っていたけれど。」

「いつもと同じく顔を洗って、俺をコンロに設置。」

「あっさごっはん」

「卵をフライパンに投入。」



衝撃で黄身が割れた。

「……スクランブルエッグ！」

またかい。

「~~~~~?~~~~~?」

その歌好きだな、今日も音が外れてるが。

今日も今日とてギルドに入る。

「有力候補が見つかったわ！」

マリアが喜色満面でソフィーに迫った。

「本当!?!」

ソフィーも負けじと瞳を輝かす。

「ええ、我ながら自信があるわ。さっすが私ね！」

大人びた印象があつたが、今日のマリアは一味違う。うざい。

カウンターから身を乗り出し、興奮を隠そうともしない。

「おめでとう、マリア！」

「ええ、ありがとう。って、なんで私がおめでとう?」

マリアが首を傾げる。

ソフィーもつられて、頭を揺らす。

「だって、彼氏が出来たんじゃよ?」

「……貴女の事務所候補が見つかったのよ」

うわ、テンション一気に落ちた。

「ふふふ、私ってそんなに男に飢えてるように見える? 幼馴染みの妹分にまで心配されて、行き遅れとか呼ばれたらどうしようウフー」

「それより私の入る事務所が見つかったの?」

ソフィー、君には優しさが足りない。

「……いいわよ、私は女を磨き続けて、誰もが振り返る美人になつてやるんだから」

そして男をばっさばっさと切り捨てるんですな。

「それより私の事務所は？」

ソフィー、君は少し黙ってなさい。

「も、いいわよ。説明するわね」

結局マリアはお仕事モードに戻ることとなった。

「最近、共和国軍人が一人フリーパイロットに転職したの」

「軍人？ それって有名な人？」

んー、と顎に指を当てて考えるマリア。

「知ってる人は知ってる、って人みたい」

その言葉って詐欺くさいよな。

「どんな人なの？」

「若い男性。凄腕のパイロットで、今度フリーになって事務所を1から開くことになったの」

安定した軍人を辞めて刺激のあるギルド員に、みたいなの？

信用出来るのだろうか。

「とはいえ部下を引き抜いたとはではないみたいで、現時点では非パイロットのスタッフがたった一人、って状況。だからギルド内部で筋がよくて伸び代のある人を探してたの」

「それで、私？」

「ええ、そういうこと。オープニングスタッフであれば対等に頑張れるだろうし、畑違いとはいえ優秀で経験豊富なパイロットの近くで学べるわ。正規の書類で調べたから素生に怪しい所もない」

「んー、でも。新しい事務所だと名前が売れていないから大変じゃない？」

確かに。所属してみたら仕事がありません、ってのは笑えないな。

「その点は大丈夫。その人、『シルバーウイングス』よ」

.....

なんか、嫌な予感がする。

「つい最近ランクアップしたみたいで、事務所の新入社員を大々的に求人されたらすぐに志願者が続出しちゃうわよ。銀翼の名は事務

所にとって最高の看板だもの」

あれだけ取得人数が少なければ、確かに箔がつくのだろう。

……つい最近ランクアップ。

あああ、嫌な予感がするー！

「だから求人を出す前に、こっちから売り込んじゃうのよ。急な話だけれど今日中なら他のフリーパイロットを出し抜けるわ」

これって、マリアが怒られたりしないのだろうか。

もろにギルド内部の情報を漏洩しているんだし。

「どう？ 実力はあるからあとは如何に関係を結べるか、が問題だけれど。一度顔を合わせてみない？」

「……どう思う、コルト？」

俺を見つめるソフィー。

そう聞かれても、返事をする術がない。

まあ、顔合わせくらいならいいんじゃないか？

「ん……………」

天井を見上げて悩む。

「そうだね、行ってみる。事務所の場所を教えてください？」

事務所予定地の建物は、ソフィーの家と空港の中間くらいだった。立地的には申し分ないな。

建物はぼろっちいけど。

煉瓦造りの古臭い二階建て。

玄関ドアの窓から覗いてみると、一階は待合室になる予定のようだ。

ソファーとテーブルは設置されているが、木箱も散乱している。

装飾もまだ不完全。

応接間はまた別にあるのだろう。外から見える場所で商談はしないだろうし。

というかソフィー、覗いてないで入ろうよ。

傍目から見ると完全に怪しい人だぞ？

「えっと、始めまして、いえここは直球で『雇って下さい』かな、ああでも、ここに決めたわけでもないし、『見学させて下さい』？

事務所の見学ってなんなんだろ、うーん……」

SSレンタルに入る時もこんなのだったな。

案外シャイな子なのだ。普段は強がっているが。

「……なにか御用ですか？」

「ひゃああ！？」

背後から声をかけられた。

俺もびっくり。足音が聞こえなかった。

「あ、え、その」

おっかなびっくり振り返るソフィー。

そこに立っていたのは、紫色の髪を肩で切り揃えた少女だった。

無機質な、アメジストのような瞳がソフィーを射抜く。

「？」

一音も発さず疑問符を提示する少女。

「こ、この事務所の人？」

「はい。会計士の予定です」

平坦な声色だ。

「お客様でしょうか、申し訳御座いませんが私共の事務所はまだ

「

事務的な受け答えをする少女に焦ったソフィーは、混乱したまま言葉を口にする。

「雇って見学！」

とりあえず落ち着け。

「どござ」

紅茶のカップがテーブルに置かれる。

「ありがとうございます」

ソファアに腰掛け向かい合うソフィーと少女。

ソフィーより大人びた雰囲気を持つが、ただソフィーが小さいだけで彼女自身は年相応なのだろう。

幼さを残しつつ、それでいて女性的な成長を伺わせる胸元など実に健康的かつむしる俺を首にかけてくれお願いします。

いてっ。ソフィーに指で弾かれた。

「当事務所の所属を目的とした見学とのことですが、責任者が不在です。もうしばらくで戻ってきますが、お待ちになりますか？」

そんな人工音声と話している気分になる会話を経て、俺達はソファアで向かい合っていた。

「……………」

「……………」

なんか話そうぜ。

「あの一！」

「はい」

ソフィーが先手を打った！

「ご、ご趣味は!？」

お見合いかよ!？

「特に」

「……………そうですか」

「……………」

「……………」

誰か助けて。

「ただいま、戻ったぞイリヤ　ん、お客さんか？」

「はい、お兄さん」

兄妹？

「フリーのパイロットだそうです。事務所が新設させることを聞いて、見学にいらっしやいました」

「見学？ そうはいつでも、まだ仕事は初めてないしな……ん？」  
茶色短髪の男。

脇に袋を抱え帰ってきたソイツは、予想通りというべきか、あの事件の後で見た顔だった。

「げっ」

「げ、はないだろう、ソフィー嬢」

溜息を吐く男。

イーグルのパイロットであり、ミグ21に襲われたソフィーを助けた援軍。

「……お久しぶりです」

体を固くしつつ頭を下げるソフィー。

「ああ、久しぶりだ。元気にしていたか？」

気さくに話をリードするあたり、年上の貫録を感じる。

おまけにイケメン。そう、やっぱりイケメンだったコンチクショ  
ー。

初依頼の後、当然ながらソフィーと謎の援軍、ギイハルト・ハーツとは顔を合わせる機会があった。

大した話はしていない。ギイハルトも必要以外の情報は洩らさなかつたし、なにより……

「はい……元気です」

目を伏せながらも返事をする。

なにより、ソフィーはギイハルトに苦手意識を持っていた。

彼女とて自分が命を助けられたことは判っている。

しかしそれ以上に、恐怖心の方が前に出てしまう。

ギイハルトもそれが解ったようで、簡単な挨拶をしただけで去っていった。

当然、それ以降接触はない。

あの事件において残ったのは、なぜか数倍に増えていた報酬金の  
み。

「あー、なんだ。俺の事務所だって知っついて来たのか？」

「いいえ、ギルドの知り合いに新しい事務所が開くって聞いて」

「そうか。とりあえずどんな方向性の事務所になるかを話そうか？」

口調が砕けているが、普段はこんなもんじゃない。

あれか。操縦桿を握ると性格変わるタイプか。

「事務所、開くんですね」

「ああ。少し前まで軍人だったんだけどな。色々あってこちらの業界に移ることになった」

「色々、の部分を聞いてもいいですか？」

「あー……そうだな。もし事務所に所属することになれば、その時は話すかもしれないが」

なんともぼけた返答だ。

「聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「人を殺すことに、抵抗はないのですか？」

いきなり本題だ。

「……ないはずはない。だが、必要であれば躊躇いはしない。そうとしか言えないな」

「必要であれば、ですか。でも」

ソフィーの瞳に力が宿る。

「あの時、本当に殺す必要があったのですか？」

ミグ21を撃破した時か？

あつただろ、殺す必要。

やらなきゃやられていた。

「必要不可欠、ではなかったな」

あれ？

「殺さないように撃墜することも出来た。やらなかったが」

「……やっぱり」

手加減も可能だった、のか？

1対10で？

どんなバケモンだ、コイツ。

「どうして、殺したんですか？」

「それが依頼だったからだ。奴らを生きて帰せば、再びSSを手に入れ別の場所を縄張りしていた。そして、縄張りに入った者を殺し続けた。君にそうしたように」

「なんなんですか、もう」

ソフィーは今にも泣きそうだった。

「パイロットって、そう言うことしか出来ないんですか？」

「君、な」

ギイハルトは眉を潜め頭を掻く。

「SSが兵器、人殺しの為に作られた物だってこと、忘れていないか？」

「ッ」

「道具は使いよう、とは言いがな。兵器は所詮何かを傷付けることしか出来ないものだ」

「そんなこと、ないっ！」

悲鳴のような叫び声。

「私は空が好きだった！空は青いものよ、赤い色なんて似合わないわ！」

「……貴女がなにを言いたいのか、私には解りません」

今まで沈黙を保ってきた紫色の少女、イリヤだったか、が言葉を挟んだ。

「敵対した者を殺すのが、なぜいけないのですか？」

辛辣な物言いにソフィーは言葉を失う。

「捕虜にして情報を引き出すならばともかく、それ以外で敵を生かしておく利点などありません。労働力として強制労働させるとしても隔離・監視するコストとリスクを考えれば」

「イリヤ、やめなさい」

兄の制止にイリヤはあっさり言葉を断ち切った。

しぶしぶなどではなく、言われたから止めたというだけ。

それだけに、彼女の言葉が対外向けなどではなく、心からの本心



だと理解させられる。

「そうだ、な。殺さないに越したことはないし、殺しを許容してしまつては人間として間違いだ。それは確かだ」

ポンポンと妹の頭を優しく叩くギイハルト。

「なんだつたら、そういう物騒な依頼を君に回さないって手もある。人間向き不向きはあるし、それを差し引いてもソフィー嬢が優秀なパイロットだという確信が俺にはあるから」

言いつつ壁に立て掛けていた木板を手に取って、テーブルの上に乗せる。

「すぐに結論を出す必要などない。今日のところは一緒に共同作業を体験、というのはどうだ？」

「へ？」

ギイハルトが持ってきた袋をイリヤが開く。

中から出てきたのは色とりどりのペンキ。

「これからこの事務所の看板を書こうと思つていたんだ。一緒にやらないか？」

「よし、俺は文字を書くぞ」

「では私は背景を白く塗りましょう」

「えっと、私は……」

「背景を手伝って頂けますか？面積が大きいので時間がかかりそうです」

「あ、うん」

「上出来、文字はこんなものだな」

「背景も終わりました」

「でも……ちょっとシンプル過ぎませんか？」

「確かに文字だけです」

「そつか？なら飾り付けでも描き足すか」

「お花描いていいですか、お花」

「成程、華やかになりますね。さすがソフィーさん」

「お花……まあ、構わないが」

「じゃあ、ちよちよっと。ハートマークも付けちゃえ」

「え」

「私も負けません」

「いや、なに描いているんだイリヤ」

「第一印象で舐められては負けだと思うので、ドクロを少々」

「看板にドクロ……」

「やるわねイリヤちゃん、なら私はちよちよも描いちゃうわ」

「負けませんソフィーさん。こちらは死神の鎌を付け足しましょう」

「おい、お前ら……」

ギイハルトに初めて同情した。

『ギイハルト航空事務所』

周囲にお花とハートと蝶と髑髏と死神をあしらわれた看板。

完成を喜ぶ女性陣と対照的に、ギイハルトのテンションは降下気味だった。

「というかソフィー、なんで辛辣なことを言ったイリヤと意気投合しているんだ？」

女って解らない。

「と、ともかく、だ」

ギイハルトが強引に話を変えた。

「ソフィー嬢。俺も色々考えたが、君ほどの実力であれば受け入れるのはやぶさかではない。雇うとすれば回す仕事も配慮しよう」

「え　あ、ありがとうございます」

ここに何しに来ていたか忘れてたなソフィー。

「ただ、やっぱり実績がないのが痛いな」

「……実績を積む為に事務所に入りたいのですけど」

「そうではなくて、君は本格的な依頼を受けたことがあるか？」

本格的な依頼？

「えっと。一番大きな依頼は、ドラゴン退治でした」  
最初の依頼だ。

それ以降は小さな依頼を受け続けたから、遠出は最初のみと  
言っている。

「俺が知りたいのは、数日間拘束されるような『確かな知識や忍耐力が必要な依頼』のことだ。長距離移動や野営を前提とした、日雇いではない仕事。そういうのは？」

「いえ 受けたことはありません」

依頼というのはそういうのがメインらしい。

ソフィーの受けている小さな依頼は、どちらかといえば利益率の低い小銭稼ぎ的な立ち位置なのだ。

「やっぱりな……そういう依頼は難易度や求められる技術などではなく、なんといいばいいか プロ意識を求められる」

「プロ意識ですか？」

「覚悟と言い換えてもいい。例えば高い技術が必要でなくとも、生涯パイロットとして生きていくならば『そういう世界』で生きていく覚悟が必要なんだ」

ギイハルトのいうことは、俺にもよくは判らない。

ただ、ソフィーがフリーパイロットという職業に対し、一歩引いていつでも逃げ出せる位置に留まり続けている、という気はしていた。

「この事務所に入る試験として、そういう大きな依頼を受けてレポートを提出する、という課題を出そうと思う。受けるか？」

「レポートなんて、書いたことはありません」

「思ったこと、気付いたことを書けばいいさ。体裁なんて気にしなくていい」

「適当な嘘を書くかもしれませんよ？」

「適当な嘘っていうのは、読んでいればすぐ判るものだ。それに君はそんなことをする人間ではあるまい」

ソフィーは瞼を数瞬閉じ、ついさっき描いた看板を見つめて、応えた。

「解りました。やってみます」

## 一言後書

動画サイトで熱い戦いの曲を聞きながら書いています。

惜しむらくは、今回の話に戦闘シーンがないことか。

ダメじゃん。

## いい日旅立ち朝寝坊

「君には乳が足りないッ！」

ソフィーの表情が一切合切消滅した。

「千里の道も一歩から。焦っちゃ駄目よ、ソフィー」

俺達はギルドに戻ってきた。

マリアに開口一番大口依頼を要求したら、冷静に窘められた。

「どうしたの？事務所の人に会えた？」

「ええ。……ねえマリア、私ってフリーパイロットになれてなかったのかな」

ふーむ、と唸るマリア。

「貴女が求めている返事は『そんなことないよ』？ それとも『当たり前でしょ』？」

ぎくりと固まるソフィー。

「まあ、正直一線引いているとは思っわ。でもそれっておかしいこと？ いいじゃない、貴女は若いんだし。これからもパイロットを続けるなり、素敵な人を見つけて結婚するなり。視野を広く持つておくことは悪いことじゃないわ」

「私はパイロットとしてやっていく覚悟が足りない、って」

ギイハルトが言いたかったのは、そういう意味合いじゃなかったと思うけど。

「私はずっとパイロットだった、パイロットだと思ってたしパイロットとして死ぬと思ってた。それ以外の生き方なんてないと思ってた」

けれど、なのに踏み込んでいなかった、と？

「何度もいうけれど、選択肢なんて多くて困るものじゃないわ。そ

れに簡単な依頼を中心に受けて敢えてその日暮らしに近い生活を選ぶ人だつて多くいる。一流になることがフリーパイロットの全てじゃないわ。……私が前言ったことと矛盾するかもしれないけれどね」「うん」

「話してごらんなさい。どういうことになったの?」

曰く、今のソフィ が大きな依頼を受けるのは難しいそうだ。

SSはレンタル、単身で専属のメカニックもない。

現状では長期依頼には不適切。どーしろってんだ。

「それでも探そうと思つのなら、せめて機体の整備を依頼主が受け持つてくれる依頼……拠点防衛や船の護衛ね」

船?

「飛宙船だよ、船って」

「当たり前じゃない。海上船なんてほとんど使っていないだから」  
飛宙船か。この世界に来てからかなり見かけているが、未だ乗ったことはなかった。

空飛ぶ船。地球の物理法則ではありえない、まさに未知の技術。

「とはいえ、飛宙船の護衛任務だつてほぼ専属で同じ人を雇い続けるものだから……探すとすれば、やっぱり拠点防衛かな、人間以外を相手のやつ」

村を魔物から守つたりとか、そういう奴か。

「なあああにい!?!?どういうことだ、何時もの護衛が風邪で動けないだとお!?!?」

「……………」

ソフィー、マリア、目を合わせるな。

「どこにいないものか、護衛任務を引き受けようという猛者はああ

あああ！……！」

「……………」  
絶対に目を合わせるな。お兄さんとの約束だ。

「私、今日は帰るわ。お仕事頑張っつてねマリア」

「ええ、明日また来なさい。いい依頼が来ているかもしれないし」

「そうだ。そのまま目を逸らしてギルドを出るんだ。」

「むっ！？………よろしいか、マドモアゼル」

「いかん、呼び止められた！」

「な、なんですか？私はこれから家に帰って二度寝したいんですけど」  
「れど」

目を合わせぬまま返事をするソフィー。

あと二度寝を予定に組み込むな。

「ふむ………いい目だ」

「いや目、合わせてないから。」

「だがマドモアゼルよ。君は自分の足りないものを知らない」

「私に、足りないもの？」

「あ、目を向けてしまった。」

彫りの深い精悍な顔立ちの男だ。

外国人のおっさんの年齢なんて判らない。50過ぎくらいかね。

「君に致命的に足りないもの、そう」

「男はソフィーから目を逸らすことなく言い切った。」

「君には、乳が足りないッ！」

「シネ」

「うごおお！？」

「アッパーを仕掛けるソフィー。」

「拳は正確に顎を貫き、男は宙に浮かび一回転して床に落ちた。  
なんだったんだ、こいつ。」

ソフィーのまな板の良さを理解出来ないとは。

男の付き添いらしき男が駆け寄る。

「ルーデル艦長、大丈夫ですね！傷は浅いですたぶん！」

こいつ心配してないだろ。

「む、むう……いい拳だマドモアゼル。吾輩ちょっとしびれちゃったぞ」

「きもいですルーデル艦長」

部下らしき男の言葉をさらりと流し、帽子を直して改めてソフィーに向き合う……ルーデルだったか。

「さて、取り乱してすまない。自己紹介をさせて頂こう」

襟元を正し勝手に話を始めるルーデル。

「吾輩の名はハンス・ウルリッヒ・ルーデル。今はしがない飛宙船の艦長である」

なんかやばい名前だが。

「ルーデル……帝国の悪魔！？ 前の戦争の英雄じゃない！」

「そう呼ばれていた時代もあったが。銀翼は捨てたのでな。軍も退役し今では運び屋を商っている」

信じられない、と口を開けたまま呆然とするソフィー。

「君の目に才能を感じたが、まだまだ荒削りで青い。体も出来あがっておらん。乳が足りん。牛乳を飲んで体操をすることをお勧めする」

乳ってミルクの方が。

「しかし、その若さ、未熟さはある種、見るものがある！どうだ、吾輩の船に護衛として乗ってみる気はないか！」

胡散臭さ最高潮である。

「えっと、おことわ」

り、と続けようとして言葉を濁した。

……ソフィー？

なにを悩んでいる。断れ。

このおっさんが悪意なく本気で誘っているとしても、出会ったば



かりの人間を直感で雇おうとする奴がロクな人間とは思えん。

だというのに、彼女は。

「……………はい、受けてみます」

「ソフィー!？」

事態を見守っていたマリアが叫ぶ。

腕を掴んでカウンターの裏まで行き、問い詰める。

(どうということ! あんないかにも怪しい奴の護衛なんて! 断りなさい!)

(でも)

(なによっ!)

ああ、この目だ。初めて会った時感じた、とても強く、でも怯えた目。

クリスタル探しの冒険に一人で出た娘だ。芯の頑固さは半端ではない。

「前に進まなきゃ。マリアはああ言ってくれたけれど、私はきつと

『一流』になりたいの」

「……………貴女のお父さんみたいなの?」

据わった目でソフィーを睨む。

真つ直ぐマリアと向き合うソフィー。

「うん……………違う。私は操縦桿を握ることしか出来ないから、ここです協するともう落ちていくしかない気がする」

小声ながら、しっかりと返す。

「もし騙されても危ない目に遭っても、私が選ぶことだから。私は自分の責任で挑まなくちゃいけない、そうしないと私は本当に戦うことが出来なくなる」

だから、まずは飛び込んでみる。

そう告げ、ソフィーは踵を返す。

どこか苦い表情のマリアだけが、そこには残された。

「こっの、馬鹿娘……………! 私がどれだけ心配しているわ、判ってないんだからっ」

小さく漏れた言葉は、きつとソフィーには届いていない。  
「……間違ってたの？ 私は本当にソフィーのことを  
それ以上は、俺にも聞き取れなかった。」

「では依頼を説明しよう」

空港に移し、俺達は鎮座した飛宙船を見上げた。

「アーク号は帝国製中型級飛宙船である。全長98、4メートル。  
空中空母として船の上部に滑走路とカタパルトがあり、詰め込めば  
5機程度の戦闘機を格納出来る」

アーク号は白い船だった。

コルトの純白ではなく、薄い乳白色というべきか。

外見は以前説明した通り、主翼のない旅客機。

ただブリッジは船体後方の上部に軸から若干ずれて存在し、後方  
の両側面には巨大なジェットエンジンが据えられている。

あのエンジンはクリスタルを使用した魔力式推進エンジンだとし  
て、船体はどうやって浮かんでいるんだか。

「つて、戦艦じゃ！？」

吹驚するソフィーにルーデルは「うむ」と自信満々に頷いた。

「うむじゃないでしょ」

副官に頭を叩かれるルーデル。随分上下関係が薄い。

「この船は帝国の試作艦を買い取ったものですよ。確かに軍用とし  
て建設されましたが、火器は全て外して輸送艦に改築されています。  
空母機能は便利なので残していますが。あ、失礼しました私は副官  
のガーデルマンと申します」

「は、はあ……」

「今回の旅は共和国首都と帝国王都の往復となります。戻ってくれ  
ばいつもの護衛の方も復活していますでしょうし、契約は行きと帰  
りの行程の護衛となりますね」

帝国、か。ハツネによる襲撃があったせいで、どうも不安が残るな。

「日程はどのくらいになりますか？」

「明日の早朝出発で、片道3日となりますね。戻ってくるのは1週間後となります」

「明日ですか!？」

それはまた急だ。だからこそ護衛が見つからず焦っていたのだからうが。

「はい、これを変更は出来ません。取引先に迷惑をかけてしまつては信用が失われますから」

「そもそも、その、ルーデルさん？ が戦闘機に乗ればいい話では？」

地上攻撃機にしか乗れません、などとほざくなよ。

「残念ながら吾輩はもう戦闘機などには乗れないのだよ。戦争が終わった後資格を失つたのでな」

「資格つて、パイロットウイングスですか？ 無取得でSSに乗っている人なんて沢山いるじゃないですか」

別に無免許運転ではない。SSは子供でも乗ること自体は合法だ。戦闘機に乗つて護衛として戦闘行為を行えば、それは『業務』ですからね。想定外の非常時ならばともかく、平時の旅でそんなことをすれば法によって罰せられます」

「別に吾輩とて、現役時代は無許可で出撃を　　むむ?。」

「はい黙つて下さいねルーデルさん。いっつも司令官に怒られていたのはどこの誰だと」

ガーデルマンがルーデルの口を塞ぐ。苦勞していたんだな。

「護衛依頼としては平凡なものだと思いますが、引き受けて頂けるならすぐに書類を用意しましょう。如何なさいますか？」

「はい、やらせて下さい」

「うむ！これにて契約成立だな！」

がははは、と大口を開けて笑うルーデル。

良かったのかねえ、本当に？

コルトの明日からの長期使用をSSレンタルのグリッドに伝えただけ、ソフィーは簡単な買い物を済ませて早めに家に帰った。

「お洋服、化粧品、ハンカチも入れて……」

鞆に荷物を詰め込む姿は、まるで遠足前夜の子供である。

「……よしっ！」

胸の前で拳を握り、ふんぬと気合を入れる。

張り切り過ぎてエネルギー切れにならない方がいいけど。

荷物の確認を終えたソフィーは寝巻きに替えてベッドに入る。

ちなみに今日の寝具はだぼだぼパジャマとナイトキャップ。多様な服、持ち過ぎだろ。

「おさすみなさい」

おやすみ、ソフィー。

「……お父さん」

……やっぱり、俺じゃないんだよな。

お父さん、か。一体何者なんだろう。

死んだのはなんと判っている。

大した財産も残さず、ソフィーが受け継いだのはパイロットとしての才能とこの一人暮らしには不釣り合いな大きな家だけ。

あんまりじゃないか。だってこの子は。

ソフィーは、一人で家にいるときいつも寂しそうな顔している。

今日は長期以来の初日。

いつもは朝に弱いソフィーも、この日は朝は早起きする予定だった。

……予定だった。

「また寝過ぎましたー！」

今日は寝坊したら駄目だろ。やっちまったな。

慌てて着替え、食事も取らず荷物を背負う。

最後の仕上げにゴーグルとクリスタルを首にかけ、玄関から飛び出して行った。

「いってきまーす！」

はーい、いってらっしやーい。

……。

さて、俺はのんびり留守番でも……

いや、待て。

なんで俺が置いて行かれる？

さっき、ソフィーは確かにクリスタルを手にしたはず。

机の上にあった、純度の低い以前コンロに嵌っていたクリスタルを。

……あの馬鹿娘、間違いやがった！

結局、戻ってきたのは10分くらい経ってから。

涙目で家に飛び込んできたソフィーは、むんずと俺を掴み再び空港まで全力疾走した。

息を切らせつつ走るソフィー。

空港のフェンスに指をかけ、ゆっくり呼吸を整える。

「あ、ああ、アーク号はどこ……？」

昨日停泊していた場所に白い船はなかった。

「きつと貨物の積み込みでもしているのよ、探せばきつとどこかにいるわ」

「そ、そうじゃ、まだ一番大事な貨物を積み込んでおらんのに出発するものか」

希望的推測をするものの、現実はいつも虚しいものであり。  
白い船体の眩しい飛宙船は、俺達の頭上を悠々と泳ぎ掠めて行っ  
た。

「……置いてかれたー!?!」

「……あのアホ艦長めー!?!」

ん? さつきから誰かの声が聞こえる。

「あれ?」

「おや?」

隣で、同じくフェンスに捕まって肩で息をする少女。

赤い髪が鮮やかな、たぶんソフィーと同じくらいの女の子だ。

「誰じゃ、お主?」

年齢に吊り合わない口調。吊り目と相まって随分偉そうに見える。

「えっと、アーク号の護衛に雇われた者です」

「なぜ乗っておらんのじゃ?」

「……寝坊しました」

「はっはっは、奇遇じゃの。わしも寝坊して乗り遅れてしまったの  
じゃ」

痛い沈黙が流れた。

「お主、護衛だったな?」

「そうですけど」

「ならSSを持っておるな!?!」

ソフィーの肩を掴む女。

「ええっ!? レンタルなら、まあ、専用機というか独占している  
機体がありますか」

「構わんっ。わしを乗せてアーク号まで運ぶのじゃ! 帝都に戻れん  
!」

「あ、そっか、自力で追い付けばいいんだ!」

「そうじゃ! ルートは判っておる、速度は飛宙船よりSSの方が  
遙かに速い!」

赤い髪の少女はソフィーの手を引っ張り格納庫へ急ぐ。

「お主の機体はどれじゃ!？」

「ま、待って下さい! 私のコルトは一人乗りです!」

「大丈夫じゃ! お主はチビじゃし詰め込めば二人乗れる!」

「チビ言うな!」

てんやわんやでコルトの元まで来れば、再び一悶着。

「なんじゃ、このちっこい飛行機は!？」

「なによ、私のコルトに文句でもあるの!？」

お、ソフィーが猫被りやめた。

「むしろ文句しかないわっ! まあいい、乗り込むぞ!」

「ちよ、狭いわ! 大きいお尻を押し付けないで!」

「なんじゃとこの……小尻だのう」

「きゃあっ! お尻触らないでよ!」

ぎゅうぎゅうと詰め込まれる二人。

ああ、なんてことだ。俺の腕の中に美少女が二人も……!

「手が届かないわよ、キャノピー閉めて」

落ちて着いたソフィーが謎の少女を顎で使う。

「わしをなんじゃと……む。狭くて閉まらないのう。開けたまま飛

べんのか?」

「コルトは低速飛行に適していないから、風防を開けて飛ぶのは無

茶よ?」

「ゴーグルを貸せ、ゴーグルを。わしの方が外に近いんじやから」

「いやよ。これはお父さんの形見なんだから」

ちなみに赤い少女の頭が半分程度外に出ている。これは確かに危

ない。

「仕方無いのう……『風よ』」

少女から覚えのある力場を感じ取る。

これは、魔力?

「『風よ。集い、纏い、覆い、大気の壁となって我を護れ』」

空気の流れが変わった。

コックピットの中と外で、空気が完全に隔離されている。

これが魔法？

魔法らしい魔法って初めて見た気がする。

「これで風の心配はいらん。さあ行くがよい」

「もう、判ったわよ」

エンジン出力を上昇させる。

「コントロール、こちらフリーウイングス、ソフィー機コルト。離陸の誘導をお願いします」

《こちらコントロール了解しました。現在待機している航空機は存在しません、そのまま3番滑走路より離陸して下さい》

「了解」

這うように誘導路を走る。

《あの……ソフィー機、風防が開いているように見えるのですが》

「……お気になさらず」

「そうじゃ、気のしたら負けじゃぞ」

本当にな。

《そういうわけにはいきません。貴女は以前にも危険行為を行っているのですから。今すぐ離陸を中止して下さい》

「だそうよ、ほら降りなさい離陸出来ないから」

「お主、実は問題児だったんじゃない……あー、管制塔、聞えるかの？」

《はい。聞えていますか？》

「緊急事態じゃ。これは国家の 否。世界の行く末を左右する  
といっても過言ではない」

過言過ぎる！

「この意味、判るのう？」

管制官は息を飲み

《全然判りません。離陸を停止して下さい》

もせず、いつもの通り業務を遂行した。

「頭が固いのう……もういい、ソフィー行っていいぞ」

「駄目でしょ、航空法違反で捕まりたくなてないわ」



「それはわしがなんとかしとく。わしはこれでもそれなりの身分での、権力とは偉大じゃ」

酷い権力行使を見た。

「本当でしようね、それ」

ジト目で睨むソフィー。

「うむ、じゃから遠慮するな。行け」

迷いつつも、ソフィーはスロットルを押す。

最大まで上昇する出力。

双発エンジンとなったコルトは初出撃を超える速度で加速する。

《ソフィー機、止まりなさい!》

「文句はこの赤女に言ってよ!」

「あ、この! お主とて寝坊した癖に!」

結局喧嘩したまま、離陸時の読み上げも行わずコルトは空に舞った。

《それで、寝坊して朝来れなかったと?》

「すみません……」

アーク号に追い付いたコルトは、まずガードルマンとの通信を繋いだ。

《言いたいことは船に降りてからにしましょう。とにかく、今は着艦して下さい。ソフィーさんは》

《おはようっ! いい朝だなマドモアゼル!》

《アンタは引っ込んでる艦長。ソフィーさんは、着艦のご経験は?》  
「ありません。あ、でも短距離着陸とかで昔から遊んでいたのたぶん大丈夫です」

《どんな遊びですかそれは。コルトにはアレスティング・フックは?》

「搭載されています。ただ局地戦闘機なので、相対速度を狭めて頂

けますか？」

《判りました。ではアーク号の後方よりアプローチして下さい》  
「了解」

アーク号の後方へ回り込む。

やはり上から見るとでかい。全長約100メートルとのことだが、このサイズで中型級なのだから恐ろしい。

しかし、それでも船の上に設置された滑走路はせいぜい70メートル。

地球におけるジェット戦闘機は、機種によって大分違うが着陸に1000メートルは必要だ。

どうやって降りるか、お手並み拝見だな。

コルトとアーク号の軸線を合わせる。

アーク号両脇のエンジンが唸り、船体を押し進める。

《アーク号、着艦既定速度に到達。相対速度、現在230キロメートル毎時》

やはりか。アーク号も限界まで速度を出すことで、相対的な速度を小さくするようだ。

とはいえ230キロも出ていたら70メートルでは止まらない。

「アレステイング・フック、ダウン」

機体後方下部より、鍵爪が降ろされる。

アレステイング・フックと呼ばれるこの爪は、空母への着艦では必要不可欠な装置だ。

空母の滑走路に横に張られたワイヤー、それにこの鍵爪を引っ掛けて機体を強引に停止させる。

言葉にすれば簡単だが、『制御された墜落』と呼ばれるほど強引で力任せな方法なのだ。

「フラッペン、フルダウン。機首上げ」

コルトはエンジンパワーを下げつつ、機首を上へと向けていく。

「うわ、わわわっ。おい、上しか見えんぞー！」

「静かにして。コルトは低速が苦手だって言ったでしょ、速度を落

とすにはこれくらい仰角を取る必要があるの」

「しかし、下が全く見えないではないか！どうやって船の位置を把握するのじゃ！？」

「計器と船からの指示と、勘」

なんてこともなさに言う。

「か、勘頼りか……ああ、短い人生じゃった」

「だから静かにして」

《コルト、右に1度、あ、いえ修正されました》

ソフィーは前方を睨みつつ足元のラダーをこまめに操作する。

《相対速度150キロ、既定着艦速度を下回りました》

「了解」

アーク号の目前まで迫る。

狭い。大きな船だが、降りるとなれば刺繍針のように細く見えてくる。

その上ワイヤーが張られているのは極一部。そこにピンポイントで、機体の尻を叩き付けなければならぬ。

「ねえ、魔法を解除して」

「なぬ？」

「風が読めないの。今すぐ」

「う、うむ」

魔力が霧散する。

コックピットに風が吹き荒れるが、ソフィーは集中を乱しはしない。

「うおお、髪が乱れる。しかもなんじゃ、計器も見ておらんではないか」

頭を必死にコックピットに引っ込める赤髪少女。

「三半規管と風の方が、計器より正確よ」

本気で言っているから困る。

「おいおい、ガデルマン！大丈夫なのかこの飛行機は？」

《順調です。軸線も全くずれしていません、相対速度50キロメートル

ル毎時》

時速50キロ。そこまで近付けたか。

「行きます」

機体が微かに落下する。

僅かな衝撃、フックにワイヤーが掛かり後輪が接地する。

続いて前輪も滑走路に付く。ワイヤーが伸びコルトを制動。

振動は着陸に伴うものだけだった。ワイヤーはコルトを滑走路に叩き付けられることもなく、速度を殺すことだけに利用される。

完全静止するコルト。

《見事だ。素晴らしい着艦だったぞマドモワゼル》

《はい、本職の軍人でもあれほど穏やかな着艦は出来ません。お見事です》

……ところが、『制御された墜落』だ。

コルトの機体にほとんど負担のかからない、神技的な着艦だった。やっぱりこの子、凄い。

「おー落ちないぞ。これ以上落ちん、良かった良かった」

ソフィーの凄さを理解していない赤い少女がコルトから飛び降りる。

ソフィーはシートに座ったまま、髪を纏めていたりボンをほどいて大きく息を吐いた。

「おいソフィー、ガーデルマンが呼んでいるぞ！ 早くおりてくる

のじゃー！」

「少し休ませてよ、はふう……」

これは……寝る気だ。

「おーい、おい？……なんで寝ているのじゃ」

再びコックピットまで登ってきた少女がソフィーの寝顔を覗き込む。

ほら、寝る子は育つというだろう？ 育ってないけど。

「まったく、仕方がないのう。ほれほれ」

ソフィーの頬っぺたを突く少女。うらやま、ではなく代われ俺と。

と、少女はソフィーではなく俺、クリスタルに触れ出した。  
あまりベタベタ触らないでほしい。手垢が付いたらどうする。

「淡く赤いクリスタル、か。因果律はそう簡単に狂わんの」  
喉をククと鳴らして笑う。

「どういう意味だ？」

「エターナル・クリスタル 永遠の魂を有する、意思を持つ結晶か」

！？

この女、今何を !

「う、んん」

「おお、起きんかソフィー。ガーデルマンの楽しい楽しい説教が待  
っておるぞ」

ソフィーの肩を揺らす少女。

ソフィーは寝ぼけ眼でコルトを格納庫へ運び、アーク号の床に飛  
び降りた。

意思を持つ結晶。

この女、俺の存在に気付いてやがる。

何者なんだ、コイツ

## 一言後書

みんな！今日はいいいことを教えてやろう！

手の平を見るんだ！ 右でも左でもいい！

見たか？ 見たな？ よし、指を全て真っ直ぐ伸ばせ！ 指同士

もびったり付けるんだ！

人差し指と薬指、どちらが長い？ うん、同じくらいだろ？

次は手の平を裏返してみろ！ 手の甲だ！

どうだ、人差し指と薬指、長さが違うだろ！？

それだけだ！

## 飛宙船

「まったく、朝寝坊などなにを考えているのです？ 貴女はもう社会人なのですよ？」

「はい……」

「私も昨日言ったでしょ？ 信頼とは一度失うと簡単には取り戻せません。ましてや不測の事態ならいざしらず、寝坊など自分自身の管理を行えていない証拠ではないですか。そんな気紛れに仕事をする人間、社会では信用されません」

「はい、その通りです……」

「そもそもなぜ私が貴女に説教しなくてはならないのです。貴女は私の非保護下ではないのですから、本当なら貴女の失態でそれだけの損害を被ろうと与り知らぬところなのです。今回は初めての長期依頼ということでもこちらも老婆心ながらサポートさせて頂こうと考えてはいますが、そのような態度が続くようなら」

「うるさいのう、お主は」

「うるさいぞ、ガールデルマン」

紅茶を啜っていた赤髪の少女と、艦長のルーデルが声を揃える。

場所はアーク号後方、船全体を管制するブリッジである。

「うるさいとはなんですか、私は彼女のこれからを思って……」

「さて、わしはこの船に客人として乗り込むはずじゃったがな。なぜSSに乗って合流せねばならなかったのかの？」

「そ、それは……」

ガールデルマンが言い淀む。

「お主らとてわしという積み荷を載せ忘れたのじゃ。偉そうに説教出来る身分ではあるまい」

「はい…… 申し訳御座いません」

「そうだぞガールデルマン。牛乳が足りんから怒りっぽくなるのだ」

ルーデルが鷹揚に頷く。

「そもそもアンタが確認する手筈だったろうがあああああ！」「絶叫するゲーデルマン。ソフィーが泣きそうだからやめる。

「で？ まだ続くのか？」

「……いいえ。今日はこれくらいにしましょう」

疲れた顔で溜め息を吐く。

「今日は、って、明日まだあるのっ！？」

そこは大人しく頷いている、ソフィー。

「明日また寝坊したなら、この倍お話ししましょうね」

「りよりりよ、了解であるのです！」

血の気の引いた顔で不格好な敬礼をする。よっぽど嫌なのか。

「敬礼はこうですよ。腕をもっと張って、そう、手の平はあまり見せてはいけません」

なぜか敬礼の指導が始まった。

気真面目というか、面倒見がいい。なんだかんだ言っただけソフィーを心配しての説教だったようだし。

「話は終わったの？ なら改めて自己紹介しようではないか」

赤い少女はスカートの端を摘み、優雅に頭を垂れた。

「わしはリズじゃ。偽名じゃがな。短い間だが同じ歳の頃の娘同士、仲良くしようではないか」

「偽名って、はつきり言ったわね……」

胡散臭げにリゼと名乗った少女を見るソフィー。

「なに、高貴な身分の者が偽名で旅をするなど珍しいことではない。それにリズは本名の略じゃからあながち嘘でもないしの」

はっはっは、と笑ってみせるリズ。

「ほれ、次はお主の名じゃ」

「私は あれ？」

ソフィーは首を傾げる。

「貴女、私の名前呼んでいなかったっけ？」

あれそっういえば。



名乗ったつけ、ソフィー？

「気のせいじゃ。それで名前はなんというのだ？」

「私はソフィー・ファレット・マリンドルフよ。ちょっと前にフリーパイロットになったわ」

「吾輩はハンス・ウルリツヒ・ルーデルである！」  
聞いていない。

「アンタはこれから説教部屋です、ルーデル艦長」  
「な、なに！？ どういうことだ！」

「お客様が乗り合いすることは前から決まっていたのに、確認を怠ったでしょう。客人を置いてきぼりとか笑えません」

首元を掴まれ引き摺られていくルーデル。

「ま、待て！ 義足が急に痛み出した！ これはいかん！」

「それだけ話せるなら大丈夫でしょ。問題ありません」

「つーかアンタの義手には痛覚が通っているんですか、と馬鹿話をしつつ艦長及び副官フィードアウト。

「うーむ、ああなってしまうとしばらく部屋から出てこん。よし、わしがこの船を案内してやるう」

「あ、いいの？」

「暇潰しじゃ。船での生活は退屈じゃからの、特にお主は大変じゃぞ？」

「どうして？」

きょとんと首を傾げるソフィー。

「どうしてって……敵襲があつた時、すぐに戦えるように格納庫の近くの部屋から動けんからの」

「あ、そっか。そうなるよと本当に暇そうね」

「まあ、この船には小さな図書室もあるからの。本を借りて読めばよい」

「この船に詳しいのね。乗ったことがあるの？」

「うむ。わしは遠出する時はいつもこの船を利用しておる。火器を取り外したとはいえ最新鋭艦じゃからの、性能は折り紙付きじゃ」

むしろ新技術を内包した最新鋭艦を外部に漏らすとか、帝国上層部はなにを考えているのだろう。

……いや、この船の艦長自体帝国とゆかりの人間だったか。その辺のコネか？

なににせよ、まだなにかありそうな船だ。

「まずはこっちじゃ。士官室、まあつまりルーデルの私室じゃな」  
ブリッジ目下の個室を訪れる。

趣味のいい調度品が固定され、ホテルのような錯覚すら覚える。  
小さいながらもシャワーまで備えているようだ。

ちなみに物が壁に固定されているのは、いうまでもなく船が揺れるからである。

「空を飛ぶ飛宙船にとって水は貴重じゃ。シャワーはある種の贅沢じゃな。わしは客人じゃから使い放題じゃが、それでも無駄遣いにするなと言われておる」

「私はどうするのかな？」

「お主は客人ではなく雇われた用心棒じゃからのう。船員と同じく体を拭くだけで済ませるしかなかるう」

ソフィーの家は豪邸らしく浴室があるのだが、使っているとところを見たことはない。

覗きになるから見ないのではなく、一人暮らして水を張るのが面倒なのだろう。

つまりは、いつもと変わらないということだ。

「ところでルーデルさんに断りもなく入って良かったのかしら？」

「いいさ、あれはこのくらいで怒りはせん」

あまり私室に勝手に長居するわけもなく、次の場所へ向かう。

「次は機関室じゃ。昔は旧式の水蒸気機関によるレジプロエンジンを使っておったが、最近はSSに使用される魔力推進式ジェットエンジンじゃな。効率も出力も段違いじゃ」

「……意外ね」

「む？」

ソフィーがリゼを見つめる。

「コルトに乗っている時散々喚いていたから、航空機の知識は乏しいのかと思っていたわ」

「酷い言い様じゃ……まあ、確かに経験は少ないよ。わしの言うこととはあくまで知識じゃ。本の受け売りじゃよ」

よく乗るこの船はそれなりに詳しいが。そう付け加え、リゼは細い廊下を歩く。

「ここは、胴体とエンジンポッドを繋ぐ支柱の中？」

「そうじゃ。ほれ、近付けば近付くほどエンジン音が大きくなるじやろっ？」

甲高い爆音が鉄骨に伝わり、四方八方から聞こえる。

「さすがに、これだけ大きなエンジンだと音も凄いわ」

感心したように頷くソフィー。

「じゃの。エンジンを中埋めにせず外に設置したのは、安全性を考慮した以外にも騒音問題によるところが大きいと聞く」

「旅客船ならともかく、戦艦なら居住性は二の次になりそうなものだけれど」

「戦闘中にエンジンに着弾した場合、中埋めだったら船体後部が全て吹き飛ぶぞ？ そうなればバランスも保てず船は縦に立った状態で落ちていく。ぞつとせんじゃろ」

「あー、そっか……」

そういやこの船って謎パワーで浮いているんだよな。

船体さえ無事なら、不時着は可能……なのか？

「なににせよ、飛宙船という技術において適切なエンジン配置は後部両側面だったということじゃ。何百年も培った技術にケチ付けても仕方があるまい」

廊下を抜けた先の嚴重な扉を押す。その中では巨大な円柱が唸りを上げていた。

「む、さすがにここまでくると暑いのも……おまけに耳もおかしくなりそうじゃ」

本当に劣悪な環境だ。長く留まったら確実に耳を傷める。ソフィーとリゼに気付いた作業員が、慌てて駆け寄ってきた。

「ここは稼働中に入り込む場所ではありませんよ！ 出てって下さい」

「なんじゃ、お主もここで仕事をしているではないか」

「私は点検中ですから戻ります！ それに耳をやられないように耳栓とヘルメットを付けています！」

先の廊下まで押し返される。

「やれやれ、セクハラじゃの」

強く押された肩を言葉ほど気にした様子も見せず撫でる。よく見ると扉に『関係者以外立ち入り禁止』つてあるし。

「あとは、そうじゃ、食堂じゃな。食事する場所じゃ」  
胴体部に戻る。

途中、ソフィーが足を止めた。

「……魔力？」

手の平を壁に付く。

本当だ。この向こう側に、大きな魔力の元が存在する。

一つではない。沢山の、魔力の共鳴

「ん？ ああ、その向こう側は確か」

リゼは進路を変更し、鍵穴に金属片を指し込む。

「その鍵は？」

「さつきルーデルの私室で盗んでおいてマスターキーじゃ」  
扉を開ける。

そこは、光の壁だった。

壁面一杯に設置された、大量のクリスタル。

ひよつとしたら、その数は万に達するかもしれない。

クリスタルは一個一個に魔力伝達のケーブルが接続され、血管のように船全体に力を巡らせている。

「凄い。全部で一体幾らになるんだろう」

感想がイマイチ俗物的だ。

「さてな、クリスタルとて個人で所有出来る程度の値段なのじゃし  
案外安上がりかもしれない。その上、数さえ揃えれば粗悪なクリスタ  
ルでも構わん」

クリスタルは不純物が明らかに混じった物も多い。魔力の総量が  
一定に達すればそれでいいのか。

「そういえば、SSに複数のクリスタルを並列装備することって出  
来ないのかしら？」

「出来んよ。ストライカーの起動に際し、魔力同士が拒絶反応を起  
こすそうじゃ。大戦中には1つのクリスタルでストライカーの起動  
もう1つのクリスタルでソードの起動という形で並行処理する機体  
も試作されたそうじゃが」

「実用化されなかつたんだ？」

「どうしても動作が不安定だったと聞く。おまけにクリスタルも高  
価だし数に限りがある。変な機体を量産するなら、SSを複数作っ  
たほうが割に合う」

戦いって、結局は本当に数で決まるんだよね。

「ここで発生する魔力は推進を担うエンジンと、浮力を発生させる  
浮上装置に大半が供給される。食堂はさておいて浮上装置を見てお  
くか」

ソフィーのお腹が可愛らしくなった。

そういえば朝飯食ってない。

「いえ、小型級のだけれど浮上装置は見たことがあるから、先に朝  
ご飯……」

頬を赤らめつつ提案するソフィー。

「こつちじゃ。ほら、来い」

それを軽く無視してリゼは去って行く。

「こーはーんー……」

連行されるソフィー。引っ張られる手に溜め息を吐く。

「コルト、変わりに話を聞いてあげておいてくれる？」  
宝石に話しかけて満足する人間はそういないと思う。

「ここが浮上装置じゃ。……って、おや？ ソフィーはどこに行っ  
た？」

飯食いに行つたよ。

リゼが掴んでいたのは俺の紐。ソフィーは気付かれないように手  
を振り解き俺を代わりに握らせていたのだ。

アイツ、ほんとに俺を身代わりにしやがった。

「むう。まあ、いい。どうせ暇潰しじゃ」

構わず柵から身を乗り出すリゼ。

柵に手を掛けていたので、指に引っかかっている俺は高い場所か  
ら宙ぶらりんである。絶対落とすなよ。

「お」

指から紐がすり抜けた。てめえ。

カラカラと音を立てて転がる俺。

「いかにいかに。多少のことで割れんとは思つが」  
階段を降りて俺を拾い上げる。

（　　？　　なんだ、これ？）

これが浮上装置か？　なんとも味気ない。

それは、鉄の箱だった。

船体の船底に並べられた、無骨な鉄の箱。

ただのコンテナにも見えるが、ケーブルから大量の魔力が注がれ  
ているのが判る。これが浮上装置だ。

「魔力というのはの、天に昇るんじゃないよ」

誰にいうでもなく、浮上装置を見上げつつ言葉を紡ぐ。

「魔力は物質に干渉しない、全てをすり抜ける。魔力伝達ケーブル  
はその内部に刻まれた魔術詠唱文字によって魔力の四散を防ぎ、一  
定方向に伝えるものじゃ。あくまで純粋な魔力に干渉出来るのは魔

力だけなのじゃ」

どうした急に。本当に宝石に話しかけて満足する人か？  
ならば、とコンテナに触れる。

「箱の中を魔力で満たし、大気も装甲も貫いて空へと昇る魔力を妨げる『壁』とする。そうすると魔力は箱を押し上げる。これが浮上装置の基礎原理じゃよ」

誰に説明しているんだ？

……俺、か、やっぱり？

この女は俺の存在に気付いているのか？

こつちから声をかけられないのがじれったい。

俺の方から聞いただしたい。この世界はなんなのか、この現状はどういうことなのか。

俺が訊きたいのは、こんな面白装置の仕組みじゃない。

『エターナル・クリスタル』とは、いったいなんなんだっ！

「はあ……………」

(はあ……………)

落ち込む俺。落ち込むソフィー。

あれからしばし時間が経ち、ソフィーに返却された俺は彼女と甲板で風を感じていた。

巡航速度で飛行する飛宙船。速度が低いので外部でも立っている程度の風圧なのだ。

声すらない俺は、リズから情報を引き出すことは叶わなかった。

なんなんだ、もう。

「はあ」

おまけにソフィーまで溜め息吐いているし。

どうしたんだろ、さっきまでは「ハラヘッター！」とか言ってた

のじ。

食堂で腹が膨れたら、なにか心配事でも思い出したか？

「コルト、私、私……！」

手の平で顔を覆い、苦悩するソフィー。

「少しは早起き出来るようになった方がいいかな！？」

……なにを今更！？

いいか悪いかでいえば、いいに決まっている。このポケ娘がっ！

「でも、でもっ！ 朝日の中で暖かい布団に包まれているのって、  
凄く気持ちがいいのよ！」

だからどーした！

「私は、私はどうしたらいいの！？」

いやだから早起きしろよ、生活習慣から改善しろ。

とはいえこの子、基本早寝なんだよな。早寝遅起。

目覚し時計とか、この世界にはないのか？

「そっだ！ コルト、朝起こして？」

声が届くなら考えなくもない。

「とにかく明日から頑張ろう、うん」

明日から頑張るしかないのは確かだが、その文面だととても不安だ。

そのまんまダイエットに踏み切れない女性の言い訳だし。

ソフィーはしばし沈みかけの夕日を眺め、そして体を解し始めた。

「木刀の代わりないかな。棒、棒……」

ロツカーに仕舞われた箒を2本掴み、構える。

得物は間抜けだが、表情は真剣そのものだ。

「やあっ！」

虚空に円を描く箒。

「はあっ！ ったあ！」

器用に絡み合う2本の箒。

ダンスのように足がタップを踏み鳴らし、小柄な彼女は無骨に舞う。



しかし、その剣速は　　遅い。

「……重い」

額に汗が滲む。

呼吸が乱れ、剣筋が荒れる。

数分も続けたところで、足を纏れさせ手の平を床に着いた。

荒い呼吸が治まるのを待つ。

「体が鈍っているわけじゃない……体重に対して武器が重過ぎる」  
甲板に大の字に寝そべり、息を整えるソフィー。汗が目に入り、  
右手でグシグシと拭った。

「見事なものだな、マドモワゼル」

頭の上から声が聞こえ、寝転がったまま扉を見上げる。

「ルーデルさん」

「うむ。ああ、やっとガードルマンの説教が終わったぞ。えらい目に遭った」

肩を解しつつルーデルが現れた。

何時間説教受けてたんだ、もう空は暗くなるぞ……

「訓練かね？ いい太刀筋だったぞ」

「ありがとうございます。でも、やっぱり私の腕力では二刀流は難しいみたいです」

「そうだな、巧く隙を埋めていたが、絶対に速度が足りん。しかしっ！」

拳を握り力説するルーデル。

「可憐な少女の美麗な舞ッ！ いいじゃあないか！」

お前、超年下の嫁とかいないよな？

「……ありがとうございます」

ソフィーは彼の反応に対し色々諦めの境地に達したようだ。

胡乱な目で薄い笑みを浮かべる少女だった。

「しかし何故二刀流の訓練を？ 指導は受けていたようだが、それは君の本来の戦い方ではあるまい？」

指導って、剣術の？ 誰だよこんな女の子に剣教えたの。

「はい、父に一通りの戦闘技能を仕込まれましたけれど、基本的に一刀流でした」

ソフィーが妙に接近戦に強いのは、オヤジのせいだよ！  
どんなスパルタ教育だ。いや、ストライクモードには格闘能力も必要なのだが。

「コルト……私のSSが二刀流なので。なんとか上手く2本の剣を活かす戦法を見つけたくて」

「作られた時点の欠陥ではないか？ SSに二刀流は合わんぞ？  
片方の剣をオミットしてしまえ」

はつきり言いやる。

「で、でもっ。なにか意味があると思うんです！ コルトはなにか意図があってもう1本の剣を取り込んだと思うんです！」

……………。

「ごめん、ないよ意味なんて。」

「っーか俺の意図じゃないし。」

「取り込んだ？」

疑問を顔に張り付けるルーデル。

「ふむ、まあいい。しかし二刀流の有効な戦術か……」

2枚の魔力障壁を同時展開する全包围防御は間違いなく有用だ。  
しかしギイハルトがいうには『下策』。

よくよく考えてみると援軍が来る前提だしな、全包围防御。しかも多分、SSの魔力刃なら突破される。

「魔力障壁を二重重ね合わせて展開してみてはどうだ？ あるいは魔力刃すら防げるかもしれないぞ？」

「それこそ魔力障壁の出力キャパシティを2倍に改造すればいいのでは？ それだけクリスタルの魔力出力はあるのですし」

「むっ……」

顎に手を当てて唸る。

唐突にルーデルの目が輝いた。

「ロツテ戦術という言葉を知っているか、マドモワゼル」

「戦闘機が2機編成で行動する基本戦術ですか？」

「うむ！ うむ！ これはリーゼロット様にも相談する必要があるな！」

満足げに頷いて甲板から去るルーデル。自己完結して終わりやがった。

「というか、リゼの本名サラツと明かした！？」

「え、えーっと」

途方に暮れるソフィー。

「私も部屋に戻「おお忘れていたぞっ！！」きゃあああ！？」

ルーデル再び。慌ただしオツサンだ。

「訊きたかったことがあるのだよ！」

「なんですか、もうっ」

頬を膨らませ怒るソフィー。

「君の父君のことだ。もしや、君はガイル・ファレット・ドレッドノートの御息女かね！？」

「……確かに、私の父の名前ですが」

「はっはっは、そうかそうか！ 君がああ『大空の騎士』の娘か！

噂は聞いているぞ」

「私の噂？」

「うむ、10年前の戦場でな」

なんで戦場で噂になってるんだよ！？」

「君の父君は戦闘中に娘自慢をしておったからな。『娘が手料理を作ってくれた』だの『頬にキスをしてくれた』だの言いながら敵兵を薙ぎ払う姿は実に不快だったわ！」

はっはっは、と豪快に笑うルーデル。

なにやっつてんだソフィー父。

羨ましいぞソフィー父。

「しかし、あの男が死ぬとはな 正直な話、今でも信じられん」

ソフィーは瞼を一度だけして瞬き、俯いてしまった。

「軍を退役しフリーパイロットになった後、単独で受けた任務で行

方不明になったのだったか？」

「……はい」

「いや、やはり信じられん。あの類はな、ソフィー嬢。ああいうのは殺しても死なんのだ。殺しても殺しても蘇る、そういう存在だ。人はそれを悪魔、あるいは英雄と呼ぶ」

「ルーデルさんだつて銀翼じゃないですか、大戦の時の不死身の伝説は聞いていますよ。何度撃墜されても生還したつて」

「む？ それがおかしいことかね？」

「え えつと、たぶん？」

疑問で返され自分の認識が間違っていたのかと疑ってしまうソフィー。

実際はルーデルが人外なだけだ。お前とて『その類』だろうに。

「それと、銀翼と悪名を混同してはならんぞ？ 銀翼は純粹にその操縦技術を褒め称える称号だ。人を殺す技術を評するものではない」

「あ、はいっ！」

嬉しげに頷くソフィー。

銀翼となる為に人を殺す必要はない、と解釈したのだろう。

手を軽く振って船内に戻るルーデル。

「君も早く戻りなさい。ここは風で体を冷やすぞ」

「はい、もう少ししたら」

一人つきりになったソフィーは、今度は楽しげに風に手を伸ばす。

「そっか そうだよね」

伸ばした手を握る。

「生きているわ。生きているとも。きつと、また会える」

天球を見上げ、くるくると回る。

フィギュアスケートのように、壊れたオルゴールのように。

「お父さん 会いに行くよ、すぐに」

旋律が風に乗る。

「~~~~~」

淡い、曲のない歌。

ソフィーは歌う。誰かに届けるように、空に聞かせるように。

「~~~~~」  
いつもの歌だ。朝食を作る時、空を飛ぶ時、どんな時でも手持無沙汰となるとよく口ずさんでいた歌。

祈るような、願うようなささやかな歌声は、たった一人の観客に見守られ空飛ぶ船の上で紡がれていた。

## 一言後書

ロボットに変形する戦闘機といえば、歌姫が付き物なのです。

## 処女喪失

帝都への旅は基本的に平穏だった。

2日目も魔物が何度か現れただけ。問題なく撃退出来た。

このまま何事もなく、目的地の帝都へ到着すると誰もが思っていた。

俺も、ソフィーも、慎重な考え方をするガードルマンも。

ルーデルはなにも考えていまい。

事態が動いたのは3日目。

なんてこともなく始まった、とても長い1日だった。

パイプベッドの上で猫のように丸まるソフィー！。

タオルケットに包まり、幸せそうな顔で口元を緩めます。

「……………あと5じかぁん……………」

おきろー！ 目覚めろー！ 朝だーぞおー！

取り合えず頼まれた通り、起こす努力だけはしておく。

あとで文句垂れられてもあれだしな。うえいくあーっぷ！

「あと5にちい……………」

いや、その頃には共和国に帰ってるから。

ときかくオキロー！

もそり、と上半身を起こす。

「ふわあわあはへああああ」

大口を開けて、残念美少女な欠伸をかますソフィー！。

「……………おはよ」

おはよう。

「きがえ、きがえ」

籠の中から服を取り出す。

よし。今日もそれなりにちゃんと起きられたな。

すばーんとYシャツを脱ぎ捨てて洋服に着替える。勿論紳士である俺は直接見たりはしない。衣擦れ音で指の仕草や瞬き一つまで細やかに想像するだけだ。

しかし、Yシャツを寝具にするとはソフィーも侮れない。荷物を減らす為の工夫だろうが、君にはハードルが高いぞ？

「かおあらいー」

俺を掴んでふらふらと廊下に出る。

いつもより少ない水を桶に用意し、屋外の甲板へ。

パシャパシャと顔を洗う。水は甲板の端から空に落ちて行った。

空に落ちるって、本当に不思議だ。キラキラと煌めいて消えていく光片。

「あ、綺麗」

俺と同じ感想を抱いたらしく、ソフィーも船の下を眺める。って、こら、危ないからあまり柵から身を乗り出すな！

「これ、落ちるぞソフィーよ」

「リーゼロッテ？ おはよう」

赤いドレスの少女、リーゼロッテが現れた。

「うむ、おはよう。いい朝じゃな。ところで誰にわしの名前を訊いた？」

「ルーデルさんが漏らしたよ」

「まったく、あの馬鹿……わしのことわりせと呼ばんでくれ。リ・ゼ、じゃ」

「その偽名意味あるの？ ほぼ本名じゃない」

「わびさびじゃよ。人間、貫き通すことに意味があるのじゃ」

格好よく言っているが、つまり今更引っ込み付かないだけか。

「今日はどうするつもりじゃ？ どーせ大した魔物も来んし、一緒にチェスでもせんか？」

「うーん、待機中としてあまりだらけてるのもね」

甘い、甘いのう。そう言い人指し指を左右に揺らす。

「判つとらんな。兵士にとっては暇を潰す技能も必須なのじゃよ。いかにストレスを溜めず戦いに備えるか、それが大切なのじゃ」

受け売りじゃがな、とピースサインを向けるリーゼロッテ。……  
じゃなくてリゼ。

「知り合いに軍の人がいるの？」

「う、その、あれだ、まあな」

途端しどろもどろになった。

「知り合いに軍の人がいるの？」

空気を読まず全く同じ文面をなぞるソフィー！

そこが素敵だ！

「もう、いいではないか！ 朝飯に行くぞ！」

ソフィーの手を掴み船内に戻るリゼ。

船の食事は優秀なコックが全てを取り仕切っている。

さあ、今朝は思う存分目玉焼きでも食うがよい！

「今朝はスクランブルエッグだそうじゃ。わしは好きじゃぞ」

「こんにちは」

「おはようございます。どうしたのですか？」

「暇を持って余して遊びに来ました」

食後にブリッジを訪れたソフィー。目的は完膚無きまでに、ただの暇潰しだ。

「なるほど、それで遺跡を見に来たんですね」

得心した様子のガールデルマン。その反応に逆に首を傾げるソフィー。

「遺跡ですか？ 遺跡、って、まさかっ」

ソフィーが窓際に駆け寄る。

そこに在ったのは



( マジかよ )

異世界に来てから色々と非常識なモノを見てきたが、これは極め付けた。

「すっごい！ こんなものが空にあったなんて！」

興奮した様子でガラスに張り付くソフィー。

「『これ』を知らなかったのですか？ 有名だと思いますが、パイロットならなおのこと」

「勿論知ってましたけれど、実際見るとなるとぜんっぜん違います！ これがあるってことは国境なんですね、ここ！」

「はい、その通りです。ここは帝国と共和国の境、どちらにも属さない中立地帯。そこにあるのが有名な」

「 空中遺跡っ 」

空に浮かんだ、巨大な島だった。

古びた建築物の並ぶ、幅10キロメートルはある浮遊島。

それが、目の前に途方もない存在感を以て浮かんでいる。

なんだ、これ。

「全ての技術が生まれた場所、ですよね」

「生まれた場所は定かではありませんが、発掘されたのは確かに空中遺跡です。飛船も、エンジンも、SSの根幹技術の全てもある遺跡を調査して得られたものです」

いつかグリッドが言っていた。

ソードストライカーの人型部分、素体はオーバーテクノロジーであり、ロストテクノロジーであると。

失われた文明、か。この世界には随分と面白い連中がいたのだな。「気を付けて下さいね。軍隊が討伐に来れないので、ここは魔物が多い」

「どうしてですか？ 遺跡になにか？」

「いえ、遺跡は関係なく政治的に不安定なのです。ここはかつての戦争の最前線ですから」

「大戦ですか」

「はい。ここは魔物もそうですが、アウトロー（無法者）も  
副官、敵襲です！ 8時の方向に翅百足が3体！」  
ブリッジクルーが叫ぶ。頷き返すガーデルマン。  
「お話はここまでです。お仕事ですよソフィーさん」  
「はい」  
かくしてソフィーは格納庫へと駆け出した。

アーク号の格納庫は上面滑走板、その真下にある。  
魔法の灯りが鉄壁の室内を照らし、ファンタジーな世界とは一線を画した雰囲気のある場所。

「コルトの準備は出来てますか？」

「おうっ、整備はばっちりだぜ！」

ソフィーは主翼に飛び乗りコックピットに潜る。

リボンで髪を結び、メダルをコンソールに押し込んだ。

「魔力伝達を確認。行けるわね、コルト？」

大丈夫だ、問題ない。

「補助動力装置機動。エンジン始動開始」

動翼チェックを行い、手信号で整備員に車輪止めを外すよう伝える。  
る。

「ギアロック解除」

タイヤのブレーキが解放され、コルトがゆっくり前進する。

作業員の誘導に従い鉄板の上に載る。

10メートル四方ほどの鉄板。人が載る物とは違い、数十トン単位の揚降能力はある強力なエレベーター。

軽い振動。周囲の光景が下に落ちて行く。

エレベーターが上昇し切ると、そこは空だった。

先程の人工の光が平等に満ちた室内ではなく、風に晒され太陽と  
いうたった1つの光源で照らされた世界。

最強の兵器を纏った戦士のみが自由を許される、広大なバトルフィールド。

「レディ（用意）」

コルトが進み、滑走路に埋め込まれたレールに前輪部分が連結する。

「滑走シャトル装着」

航空母艦の滑走路には、カタパルトが仕込まれている。

《カタパルト圧力正常》

着陸に長い距離が必要ならば、当然離陸にも相応の距離を必要とする。

それを補う為、強引に飛行機を引っ張り加速させるのがカタパルトだ。

重い鉄の塊である戦闘機、それを引っ張るカタパルトは当然強い出力を誇る。

それこそ、瞬きの間に機体を300キロ近くまで加速させるのだ。……ま、俺の知識はあくまで地球のものだが。この世界でも同程度のスペックだと俺は考えている。

《防火壁用意。討ち出し準備終了ですよ、ソフィーさん》

「エンジンフルパワー。行けます」

《はい。グッドラック GO!》

ルーデルの合図と同時に、コルトが急加速する。

戦闘機の限界を超えた速度で射出されるコルト。

対Gベルトがソフィーの体を締め上げる。

歯を食い縛るものの、それ以上の反応は見せない。

空母からの離陸における加速は本職ですら堪えるとされるが、ソフィーは案外G（加速度）に強い。

小柄な女性はGの影響が小さくパイロットに向いているという話を聞いたことがあるが、あるいは本当なのかもな。

《魔物は変わらず8時方向から接近。撃破して下さい》

「了解」

ゆるやかに左へ旋回し、翅百足に照準を合わせる。

「……大丈夫、撃てる、撃たなきゃっ」

30ミリ機銃の安全装置を解除する。

翅百足、名前の通り羽の生えたムカデだ。何度か襲ってきた飛宙船にとつてポピュラーな敵らしい。

もう何度か戦っている。ソフィーもいい加減慣れてはいるようで、冷静にムカデを撃ち抜いた。

甲高い悲鳴を上げ胴体の千切れるムカデ。数秒の掃射で3体全てが砕け散る。

「……目標の撃破を確認。帰還します」

やっぱり元気がない。魔物を殺すことは最初に会った時から割り切っていたが、それでも気持ちいいものでもなからう。

《待って下さい》

ガーデルマンがソフィーを遮る。

《新たな敵が出現。船の3時方向、いえ5時から、なに？ ……ソフィーさん》

「どうしたのですか？」

様子のおかしいガーデルマンに首を傾げるソフィー。

《どうやら、翅百足の群れに囲まれたようです。全方位より多数の敵が接近！ 船に戻って殲滅して下さい！》

「ふ、船に戻るのですか？ 沢山魔物がいるのに？」

《沢山いるからですよ。ストライクモードで船の上から撃つんです。一匹ずつヒットアンドウエーを繰り返していたら、その間に接近されアーク号に損害が出ます》

「判りました。すぐに戻りますっ」

《エレベーター付近に降りて下さい。念の為30ミリ機銃の弾倉を用意しておきます》

「了解！ コルト、ストライクモードッ！」

ソフィーがクリスタルを押す。もう何度と見た変貌が始まった。

飛行中のコルトの主翼が捻り、強力なエアブレーキをかける。

慣性のまま進む機体と主翼のブレーキに引つ張られるコックピットモジュールが前後に分離。

主翼が翼のように展開し、光輝く。刻まれた術式を介し人型部、ストライカーが虚数召喚される。

コックピットとストライカーが合体。神経を接続し、剣となったコルトを握り締めた。

勢いを殺しながら甲板に手を着き着艦。

滑走路を惰性のまま滑り、10メートル以上滑走して停止する。

「っと、滑走路傷付けちゃったかな」

緊急事態だ。お気にすんな。

ストライクモードに変形を終えたコルト。サブマシンガンのように機体を構える。

「敵は……本当に全包围ね」

周囲から迫るムカデ。けれど奴らの速度は遅い、冷静に落としていけば充分間に合う。

グリップに設置された引き金に指を掛ける。

「コルト、補充出来るとはいえ無駄弾を使う理由はないわ。お願い  
合点承知！」

機銃の銃口を翹百足に向ける。

ソフィーの視線からどの標的を狙っているかを予測し、弾道計算を行い若干の姿勢制御を行う。

「いけえっ！」

単発での狙撃。

弾丸は吸い込まれるように魔物を貫き四散させた。

間欠的に放たれる機銃、それに伴い魔物達が碎け落ちる。

その命中精度は、ソードモード時の比ではない。

ソードモード、戦闘機形態では俺はコルトの操縦は出来ない。あまりにじゃじゃ馬なコルトを乗りこなせるのはソフィーだけだ。

しかしストライクモードでは、俺はストライカーを自分の体のように扱える。

基本操作や格闘戦をソフィーに託し、射撃に関しては俺が補正を行う。

それは、俺達が依頼の合間に作り上げた新たな戦闘法だった。別に無茶な飛び方をして遊んでいたばかりじゃないんだ。

大気の温度、湿度、気圧、重力、風、慣性、全てを計算し適切な角度に逐一修正する。

なぜか石になって、数字に強くなったからこそ出来る戦法だった。これで、ラスト！」

最後の魔物が散る。

5分程度で翹百足は殲滅された。

《全目標の撃破を　　なんですって？》

ガーデルマンの訝しげな通信。

「どうしたんですか？」

銃剣を降ろすソフィー。一息吐く彼女とは対照的に、俺は新たな客人の登場に気付き溜め息を吐きたい気分だった。

《……新たな魔物の群れが現れました。甲虫、あれはスティールビートル？》

鈍い銀色のカブトムシ。体長3メートルはありそうだ。

数は　　先程の翹百足と変わらない。群れなのか。

いや、カブトムシは群れないか。群生地の一団というべきか？

ムカデだって群れないとは思うけれど。

「な、またですかっ？　　ここは魔物が多いとは言っていましたけれど、ここまでだなんて聞いてませんよ！」

《本来ならありえませんが。群れに襲われたという話は稀に聞きますが、こつも連続してなんて　　》

ガーデルマンが息を飲んだ気配がした。

「ガーデルマンさん？」

《……ソフィーさん、ソードモードに切り替えて下さい。魔力がもう限界に近いでしょう？》

「えっ？」

なにを言っている？

コルトはクリスタル、つまり俺の内包する魔力が多い為30分は活動出来る。ましてこの戦闘では魔力刃も魔力障壁も使用していない。

ガーデルマンとて事前の打ち合わせでそのことは知っているはずなのに。

《早く！ 魔力が完全に切れてしまつては船は無防備になります！》

「あの、ガーデルマンさん？」

《命令ですっ！》

声を張り上げるガーデルマン。

ソフィーはびくりと震え、「りよ、了解」と返した。

ソードのエンジン出力を上げ、それに加えてストライカーの足を撓らせて跳躍する。

数十メートル跳ね上がったコルトを空中でソードモードに変化させ、通常飛行を開始した。

自力でのゼロ距離離陸、いわゆるVT L。ソードストライカーは当然のようにこれが出来る。飛び立つだけでストライクモードを起動させているのは魔力消費が馬鹿にならないが故に滑走路を使用するけれど。

戦闘機へと戻ったコルトがステイルビートルを打ち抜いていく。甲虫といえど機銃を防ぐことは敵わなく、容易く落ちて行った。

《ソフィーさん、9時方向より接敵！》

「もうっ！ 貴方がソードに戻せて言ったんじゃないですかっ」  
ロスタイムが大きくなったことでアーク号に肉薄する魔物が現れ始める。

「この、しつこい！」

悪態をつきつつも各個撃破していくコルト。順調に数を減らしていく。

最後の1匹を打ち抜いた。

「……よし、これで」

気を抜いた瞬間。

コルトの前尾翼の片方が?げた。

「え?」

カナードを失い制御を喪失する、まずい!

「なに? 攻撃? どこから、どうやって!?!」

前転しつつ落ちるコルト、ソフィーは冷静にクリスタルを押し。

ストライクモードとなったコルトはアーク号に着地。衝撃で甲板に大きな亀裂が入る。

《クツ やはり来ましたか》

《ガハハハ、どうだ76・2ミリ砲の威力は!》

攻撃を予測していたらしきガーデルマンと、通信に割り込んできた謎の男。

この魔力共振を利用した通信は敵味方入り乱れている。

76・2ミリ砲なんて既に戦車砲だ。コイツがぶっぱなしたのか!

「え? え? どういう、こと?」

困惑するソフィー。彼女を尻目に、俺は遥か遠方の浮遊体を視認した。

《正面に敵機を確認》

遅れてブリッジでも敵を捕捉する。アーク号の船首先、その延長上。

飛行機だ。幅40メートル以上の大型機。

飛宙船ではない。あくまで飛行機だが……まさか、あれも。

アーク号上空をニアミスする。巨大な十字を描く、典型的な直線翼機。

《敵です。魔物を嚇けて護衛SS、つまりコルトの魔力切れを狙ったのです》

《そういうこつたあ。船を止めな、艦長さんよ》

《私は副艦長です。この船の艦長は どころ行ったアイツ》

居ないのかよ、ルーデル……

《いいから停船しな。俺達だって無闇に犠牲を出したくはねえんだ。》



お互いにとって、それが一番の選択だと思っぜ？》

《笑わせませす。殺しさえしなければ強奪が正当化されると？》

ガーデルマンの声色に怒りが混じる。

《間違えないで下さい、貴方達は法に背く犯罪者であり、私達には自衛の為に貴方達を殺害する権利がある》

《ほー、俺達とやるっていつのか？》

楽しげに笑う空賊。

「私を無視して話さないで下さいっ！」

ソードを大型機に向け構えるコルト。

《魔力切れ寸前のSSなんて怖くはねえさ。いくぜ、野郎共！》

《《《応っ！》》》

複数人の応答。

「僚機？ 他にも賊がいるの……？」

違う。周囲に他のSSは存在しない。

「複座？ いえ、もっと沢山の声だった……何人乗っているのよ、あの大型機」

《大型機、そして複数のクリスタルを搭載 まさか！？》

大型機が変形を始める。

コルトと同じく主翼が稼働し天使の翼に。翼に魔力が注がれストライカーが出現。ここまでは今まで見たSSとほぼ同じ。

しかし、それ以降は初めて見る光景だった。

機体全体が分裂。召喚されたストライカーの鎧となる。

翼下のエンジンポッドはそのままストライカーの背面に。全身に纏った鎧が展開し、大口径の機銃が各部から頭を出した。

身長30メートルを超える巨大な人型兵器。これもソードストライカーだというのか。

「大きい……！」

《ほう、珍しいものを》

楽しげなりゼの声が割り込んだ。

《りゼ様、なぜブリッジに？》

《空中遺跡を見学しにな。どうやらもつと面白い物が見れるようじやが》

リゼがブリッジの中で手を振っていた。

《大戦時、共和国が少数のみ開発した複数クリスタル運用機、その名も 》

《御名答だ。こいつは『スーパーフォートレス（超空の要塞）』！

2門の大砲に12か所の機銃を装備した最強のSSだぜ！》

スーパーフォートレス、と呼ばれたSS全ての火器が俺達を狙う。《気を付ける。製造コストに見合わん機体じゃが、通常のSSよりは遥かに強力じゃ》

「強力なのは判るから、スペックとか攻略法を教えてよっ！」

文句を言いつつソードを構え魔力障壁を展開する。

瞬間、空賊ご自慢らしい弾幕がコルトを襲った。

コルトに撃ち付ける弾丸の雨。嵐のようなそれを魔力障壁という傘で凌ぐ。

脚部、腰部、両肩、頭部、そして両腕。全門開放による弾幕は、まさしく壁に等しかった。

あまりの衝撃に、全力で踏み締めているにも関わらず少しずつ後退する。

「防げる、けれど……！」

ジリ貧だ。その上逸れた弾がアーク号を傷付けている。

飛宙船には法律の關係上武装がない。故に唯一の驚異となりうるコルトを狙うのは判る。

しかしあちらの弾切れを狙うのは愚策か。その前にアーク号が落ちる。

というか、機銃はともかく大砲がキツイ。時折魔力障壁を抉ってきやがる、あまり長くは耐えられないかもしれない。

「このっ、30ミリ機銃でもくらいなさい！」

ソードを分離して二刀流に切り替える。片方を銃として、もう片方を盾として。

防御しながらの攻勢、こればかりは二刀流の醍醐味だろう。

30ミリ×4がスーパーオートレスに迫る。

ドラゴンをも一撃で仕留める弾丸は外し様のない巨大な吸い込まれ その直前で障壁に阻まれた。

「魔力障壁!？」

超然と飛行し続けるスーパーオートレス、その全包围を魔力障壁が包んでいた。

まるで18面サイコロのような、平面構成された球体。

「360度守るなんて、ずるいつ!」

《複数のクリスタルを装備しているからこそ可能なのじゃな。戦術的に補えるから普及しなかったのじゃろう》

余裕だなりせ。

「そもそもストライクモードで飛び続けるソードストライカーってなによ!？」

確かに。ストライクモードでは跳躍が限度で、完全な飛行は不可能だと思っていた。

《恐らく、空中で留まり絶対的な防御を敷いた上で、大火力によって圧倒するというコンセプトなのじゃ。魔力障壁を突破するには魔力刃が必要じゃが、空に飛んでいる以上ストライクモードでは接近出来ん。……一度ソードモードで接近し、空中でストライクモードに切り替えてはどうじゃ?》

「さつき翼がやられちゃったから、ソードでの飛行は不可能よ」

《なら、どうする?》

「こうするっ!」

滑走路を駆け抜け、跳躍!

って、ジャンプしやがった !

「とりゃああああああ」

間の抜けた掛け声と共にソードを構える。

魔力障壁の隙間から飛び出した砲身を掴み、障壁に魔力刃を叩き付ける!

異なる魔力が反発しつつ、半透明の壁が切り裂かれる。

《馬鹿なっ》

「隙ありっ」

隙ありというか、魔力障壁の隙間に入り込む。

即座に修復される障壁、その内側に侵入したコルト。

《くそ、振り払え！ 障壁を一旦解除しろ！》

コルトが腕にしがみ付き、胴体に近付く。出鱈目に暴れコルトを落とそうとするスーパーフォートレス。

《か、頭ッ！ 手足を動かさないで、いでえ！？》

スーパーフォートレスの各部から悲鳴が漏れる。

全身に銃座が設置されているということは、各部に人間が乗っているという意味だ。

そもそも高機動を行う兵器ではない。対Gシステムも簡易なものなのかもしれない。

つまり、あんまり暴れると乗員が頭やらなんやらぶつけるということ。

《うるせえ黙ってる！ てめえらも撃て！》

空賊達は魔力障壁を霧散させコルトに銃口を向ける。

「撃てないわよ。ストライカーは機銃でもダメージを受ける、それはスーパーフォートレスも同じはず。今撃てば、自滅するわ」

魔力刃をストライカーの首元に魔力刃を当てるソフィー。

これで詰みかと思われたが、賊はさすがに往生際が悪かった。

《……それはどうか》

スーパーフォートレスの全砲門が正面      アーク号を狙う。

《魔力なしの重火器とはいえ、これだけの火力を浴びれば中型級飛宙船程度なら墮ちるぜ？》

「……………」

互いに膠着状態に陥る。

《ふーむ、ガードルマン？ こういう時はどうするんじゃ？》

《今それを訊きますか……先に集中を切らせた方が負け、というの

が相場ですが》

《よし！ ソフィーや、今から敵の集中を乱すぞ！》

《いや、お穢ちゃん、事前に予告すんなよ……》

なにをする気だ、リゼ？

アーク号から行える選択肢など限られている。

そんな状況で、一体なにを

《あー、賊の諸君！ これからわしはブリッジで着替えを行うっ！》

《……》

《……》

《……》

オイ。どうするんだこの三点リーダー。

「リ、リゼ！？ 男性の前で着替えるなんて破廉恥ですっ！」

ソフィーが唯一動揺していた。

《いや、今のうちに敵機を沈めんかバカチン！》

《ソフィーさん、アーク号とて無装甲ではありません。数秒の銃撃なら充分耐えられるのでスーパーフォートレスをざっくりやって下さい》

「ざ、ざっくりって……切り裂くんですか？ 死んじゃいますよ！？」

《……殺せと言っているのです》

ガードルマンの声が低くなる。

《や、やめろ！ 俺達は飛宙船に照準を合わせているんだぞ！》

焦った賊の声。懐に入られた以上は自分達が窮地であるとようやく理解したのか。

《構いません、一撃で後腐れなくやって下さい》

《お主がなにを考えているかも解るが、割り切ってしまった方がいいぞ？》

好き勝手いいやがって。

「短絡的です！ 殺す以外にも、解決法が」

《貴女は護衛でしょう！ まずは職務を果たしなさい！》

ガーデルマンの叱責が耳に響く。

「殺す、私が、そんな……?」

呼吸が乱れ始める。

ソフィー、この期に及んで躊躇っているのか。

この状況下では殺すしかない。元より賊を生かして帰るという選択肢自体存在しない。

俺だって、人を殺すことに納得がいくわけではない。けれど、敵機を墮とさなければアーク号が墮ちる。それは、判る。

アーク号が制圧されれば、乗っている人達がどうなるか、判らないんだぞ。

コルトの操作を一時的に奪う。2本の魔力刃を連結。30メートル越えの巨大剣とする。

「貴方も、殺せと言うの、コルト?」

言つさ、恨まれたっていい。

《やりなさい》 《やるのじゃ》

呪文のように、彼らの声が響く。

呼吸が止まる。

歯がガチガチと鳴る。

顔から血の気が引く。

「殺すの? 殺しちゃうの?」

(割り切れ、ソフィー)

「割り切れって、人を殺すのを? もう戻ってこないのよ?」

(そうだ。それでも、殺すしかないんだ)

「貴方まで……! 私を、裏切るの……!?!」

困惑するガーデルマン。

《……誰と話しているのですか?》

訊ねるが、今のソフィーには聞こえていない。

「貴方は私の味方じゃないの!?!」

(味方だ！ だから、こうして )  
「なら私の意思を尊重してよ！ 前みたいに不思議な力で、私の望む未来を手繰り寄せてよ！」

( )  
そんなこと、言われても。

俺に出来ることなんて、ほとんどない。  
不思議な力なんて、俺には、ない。  
だから、俺はこう言うしかない。

(やれ。ソフィー)  
「ばかあ！」

子供のように愚図るソフィー。彼女を無視し俺の意思で剣を振り上げる。

( 君がやれないなら、俺が )  
《畜生お！ なんて、魔力切れしたんじゃないのかよ、なんなんだよお前！？》

それはミスリードだ。ガードルマンが、敢えてそう勘違いするよ  
うに発言したんだ。

《やっちまえ、野郎共！！》  
大砲が、機関銃が火を噴く。

光の尾を引きアーク号に迫る弾丸。  
俺がそれに気を取られている、その刹那

俺以外の意思によって、大剣が振り下ろされた。

( やったのか、ソフィー )

手の平に残る物体を切り裂いた感触。  
鎧ごと首元から袈裟切りにされたスーパードレス。  
外装の鎧は勿論、内部の素体まで抉られていく。

金属らしくない、嫌に生々しい感触。

俺は振り下ろさなかつた。ソフィーが、自分の意思でやった。各部のコックピットモジュール、その空間から赤い液体が漏れる。それは果たしてオイルか、それともそれ以外のなにか。

元々際どいバランスで浮かんでいたのだろう、全体の同調が乱れスーパーフォートレスは大きく傾き、小規模な爆発を起こす。

「あー」

ソフィーが落ちゆくスーパーフォートレスに手を伸ばした。

断裂したコックピットの外殻、その隙間から飛び出した男。

位置的に、ストライカーの胸元。おそらくはストライカーと神経接続していた当事者であり、賊の頭。

右腕を千切られ恐怖に顔色を染め上げた彼と、ソフィー……コルトの視覚カメラ……と目が合った。

咄嗟に手を更に伸ばす。

このまま落ちて地面に叩き付けられる、ソフィーはそんな光景を甘受する人間ではない。

宙に舞う男を手の平に納め、落とさないように力を込める。

そのまま、握り潰した。

「ーあえ？」

言葉として、成立していない妙な鳴き声。

「あれ、どこいったの？」

手の平を握ったり閉じたりして、きよろきよろと周囲を見渡す。

手にこびり付いた、ナニカアカイモノ。それを決して視界に収めないように。



(……ソフィー)

俺も、思考が麻痺していた。

ホルトの疑似神経を通して伝わった、生温い肉塊。

それは、俺が培ってきたなにかを容易く破壊する感覚。

「？」

手の平を凝視する。

それがなんだったのか、必死に思い出そうとするように。

彼女の美麗な柳眉が歪んでいく。

顔が青を通り越し、土気色となっていく。

(ソフィー、……これは、)

慰めの言葉をなんとか捻り出そうと口を開いた瞬間。

「！！！？！？！！？！？！！ あ、ああ

あああああああああああああああああああああつ！！！！！！」

160

小さなコックピットに、慟哭としか言い表せない叫びが響いた。

## 一言後書

酷い終わり方です。

1章につき5話、最後に大きな戦闘という形式でやっていると  
思います。

蛇足になるので後書終了。

## 機体紹介

### 機体紹介

現時点の情報であり、随時追加・変更していくと思います。

『ソードストライカー（SS）』

機動力・攻撃力・汎用性を兼ね備えた最強の兵器。10年前の大戦にて開発された。

ソードモード（戦闘機形態）とストライクモード（人型形態）を切り替えて戦う。

『共和国軍機』

「FS 15C イーグルカスタム」

搭乗者：ギイハルト・ハーツ

モデル：F 15 イーグル

武装：20ミリガトリング（バルカン）×1

説明：共和国最新鋭戦闘機。未だ実戦配備すらされていない。

先行量産しかされていないこの機体をどのような経緯で手に入れたかは不明。

試作機を更に改造しており、ピーキーな玄人仕様となっている。

「レイ・ファイター」

搭乗者：大戦中における共和国軍パイロット

ガイル・ファレット・ドレッドノート（ソフィーパパ）

モデル：艦上零式戦闘機

武装：20ミリ機銃×2 7.7ミリ機銃×2

説明：大戦初期に開発されたSS初期機体。正式名称フルネームは流石に拙い。

高い機動性を有するがトップスピード・防御力に難あり。

ソフイー父のかつての愛機。

「AS 29 スーパーフォートレス（超空の要塞）」

搭乗者：空賊の皆さん

モデル：B 29 スーパーフォートレス

武装：76.2ミリ砲×2 12.7ミリ機関銃×12

説明：共和国が大戦末期に開発した大型ソードストライカー。

30メートルを超える巨体を誇るが、そこまで巨大なストライカーの素体も少なく、クリスタルも多数必要なので調達費用も馬鹿高い。

結果、少数製造されながらも生産中止となったレアな機体。ストライクモードでの戦闘を前提しながら、中・長距離戦を主とし接近戦を切り捨てた戦法を取る。当然魔力刃も未装備。

全方位を球体状に包む魔力障壁が最大の特徴。機銃に対しては効果は絶大である。

『帝国軍機』

「ミグ21」

搭乗者：現帝国軍パイロット

謎の集団

モデル：ミグ21。ペットネームよりこちらの呼び方の方が一般的な気がする。

武装：20ミリ機銃×1。バージョンによって武装は色々異なる。

説明：帝国軍現主力戦闘機。

量産性とバランスに優れた機体。戦いは数だよ兄貴。

沢山生産されている為、帝国も全ての機体を完全管理出来ているわけではない。

『民間機・小国による独自開発機・所属不明機』

「コルト」

搭乗者：ソフィー・ファレット・マリンドルフ

モデル：震電

武装：30ミリ機銃×4

説明：色は白亜。エンテ翼特有の回頭速度に優れている。つまり変態機動機。

本来ならば電子装備により安定化を図るが、この世界はアビオニクスが発達していないので未装備。

あまりに不安定な設計故、ソフィーにしか扱えない。

最高速度は約900キロ。ジェットエンジンなので震電よりは速い。

変貌を遂げ双発エンジンとなった後は劇的に出力が向上している。

二刀流の魔力刃を装備。連結させることで30メートルの大剣にしたり、2枚の魔力障壁による「ほぼ」全包围防御（完全ではない）等が可能な特殊なSSと化している。

大戦により技術を培ったドワーフによるワンオフ機。

「JS 35 ドラケン」

搭乗者：？

モデル：サーブ35 ドラケン

武装：30ミリガトリング

説明：とある小国が防衛の為に開発した機体。

国土防衛に特化しており、二重デルタの機体そのものが大きな盾となる。防御力が他のSSと比べかなり高く、機銃どころか魔力刃すら通さない。

魔力刃は未装備。待ち伏せ戦術が前提であり、長距離戦用の火力は高め。

勢いで考えたものの、いつ登場させるか不明な機体。

「罪×罪 (sin - sin)」

搭乗者：？？？

モデル：心神

武装：？？？

スペック：？？？

説明：オーバーテクノロジーに加え、エターナルクリスタル前提使用の超高性能機。

通常パイロットでは到底耐えきれない機動を行う。詳細不明。

ただ、この機体のパイロットは特殊な人体改造手術を必要とするらしい。

『飛宙船』

浮遊装置によって空に浮かぶ船。  
速度は遅いが燃費も小回りもよく、遙か昔から使用されてきた。

『小型級』

最大でも10メートルほどの小さな飛宙船。  
自家用船や運搬用として使用される。

『中型級』

約100メートルの飛宙船。  
適度な大きさであり客船や運輸船として使用される。

『アーク号』

中型級飛宙船。色は乳白色。  
全長全長98、4メートル。最高速度は100キロ程度。  
元々は帝国軍用試作船であったが、全ての武装を外し運輸船として使用されている。

滑走路を備えているが、5機程度しか運用出来ない軽空母。  
実は、格納庫の奥にSSが1機隠されているとかいないとか……

『大型級』

300メートル級の飛宙船。  
効率はいいが運用が難しいので、大企業や軍隊のみが使用する。  
軍用船なら正規空母としても使用可能。

『ラウンドベース級』

全長数キロに及ぶ超弩級大型飛宙船。  
内部に大型級すら格納・整備することが可能であり、もはや移動可能な基地と呼んだ方が正しい。

大戦時に建造され戦後新たに作られることはなく、大戦を生き延びた5艦のみが現存している。

空飛ぶ町。

この戦闘機を登場させてほしい、こんな魔改造が好きだ、などア  
イディア募集中です。

変態機であれば変態機であるほど変態な作者は喜びます。

「~~~~ ~~~~~  
~~~~ ~~~~~  
~~~~ ~~~~~」  
軽やかな歌声が船内に響く。

ベッドに寝そべり、手の平越しに天井を見つめるソフィー。

「~~~~ ~~~~~」  
歌声はあくまでいつも通りであり、ただ、感情だけが抜け落ちていた。

「~~~~ ~~~~~」  
歌が途切れる。

手がシャツにポトリと落ちる。

「~~~~ ~~~~~」  
光のない瞳。

なんで、俺はこんなソフィーをただ見ているしか出来ないんだ。  
俺が殺せば良かったんだ。俺なら、まだ割り切れた。

ソフィーはこんな殺伐した世界に生まれて、どうしても殺人を忌避しているんだ。

「殺しちゃった」

コルトの手が、賊の男を握り潰した。

俺もはつきりと覚えている。肉を、血を潰す感触を。

吐き気がする。生身の体があれば実際吐いたはずだ。

ソフィーは吐いた。朝食を戻して、胃液を出して、それでもえずいた挙句、加呼吸を起こして気絶した。

俺がストライカーを操作して格納庫に戻ったのだが、気絶したソフィーを見た整備員は実に不可解そうな目をしていた。なんせパイロットが気を失っているのに動いていたんだから。

「コルト……馬鹿……」

ソフィーは、俺はあくまで自分の意思を尊重すると思っていたの



だろう。

だがそれは違う。俺はソフィーの命を第一で考えるが、場合によっては意思を無視する。

俺だって、意思や感情を持った人間なのだから。

俺は、都合のいい道具じゃ、ない。

「えぐ、うあああぁん」

また泣き始めた。

自分の体を抱くように、寒さに震える童のように。

撃墜されたスーパードレス。空の要塞から落ちた賊達は、まず確実に命を落としただろう。ソフィーはあくまで、賊を助けようとしたんだ。

結果、力加減を間違え握り潰してしまった。

ソフィー。簡単に「殺せ」なんて言ってしまったて、ごめん。

俺も理解していなかった。人を殺すっていう意味。

いや、きつと今だって理解していない。手に力を込めたのは俺じゃない。

俺は感覚を同調させて体感しただけ。けれどソフィーは自分の意思で手を伸ばした。

……こんな女の子が、誰かを助けようと頑張ったんだ。

奇跡の1つくらい、おきてみせるよ、畜生……

（ソフィー）

呼び掛けてみる。

けれど彼女は気付かない。

戦いの時は会話が出来たのに。どうして、話したい時に話せない。彼女自身のこれからのこと。

俺達のこれからのこと。

どうしたいのかも判らない。

けれど、声が届かなければなにも始まらない。

俺とソフィー。  
偶然出会って、流されるままにコンビを組んで。  
命懸けの戦いを潜り抜けた。様々な依頼を共に受けた。  
けれど、俺達は、互いのことをなんにも知らない。

まだ、なにも知らないんだ。

俺はどうしてソフィーを守りたいのか。

簡単だ。俺はこの子が気に入っている。それに美少女だ。ここ大事。

『その程度』の理由なのだ。

俺はソフィーを浅くしか見ていない。

ソフィーに至っては俺を道具としか見ていない。

これからも彼女とやっていくのであれば、このままではいけない。

今を乗り切った時、俺達はやっと相棒になれる。

そんな考えを、どこか漠然と俺は思い浮かべていた。

「なあんじゃ、不貞寝しおって」

暗い室内に光がスリッドとして差し込んだ。

開いたドアから、赤いドレスの少女がスルリと室内に入り込む。

「ソフィー！ そふいいいいー！」

……怒鳴るな、五月蠅い。

リゼが壁に向けて寝そべるソフィーの肩をぐらぐらと揺らす。

「この、あの戦い以来引き籠もりおって！ このっ！ このっ！」

言いつつ手をソフィーの際どい部分に入れようとするリゼ。なにやってんだ。

「……なに」

視線だけリゼに向ける。

「出掛けるぞ！」

いい笑顔で告げる。

「どこによ、また船の中を散歩？」

船の中？ って、ソフィー気付いてなかったのか。

「なにを言っておるのじゃ。ここは帝都の空港じゃぞ？」

「えっ!?!」

俺達はとつくの間に帝都に到着していた。

「私にこんな派手なドレス、似合わないわよう」

そんなことはない。いつもの白も清涼な雰囲気でも可愛らしいが、赤いドレスも情熱的で素敵だ。

与えられた自室から連れ出されたソフィーは、ドレスを着せられリゼに手を引かれていた。

リゼの赤いドレス。でるところでてるリゼのサイズなのでスレンダーなソフィーには若干……かなりブカブカ気味だが、それはそれで愛らしい。

ちなみに胸は苦肉の策で詰め物をしているようだ。着替え覗いたのかって？ さあな。

「帝都に停泊する1日間は、一部の者以外は休暇として外に出られない。といつても数時間じゃがな」

アーク号の階段、タラップを降りて滑走路に立つ。3日ぶりの揺れない地面だ。

「帝都は初めてじゃろう？ 観光地だけでも見ておかねば損じゃ」

「初めて……なのかな？ 小さい頃に来たことはあるかも」

「空気の読めん奴じゃの。そこは『ワイハジメター!』と言っておけ」

間違つてもそんな妙な喜び方をする娘にはならなくてくれ。

「今日のは出かける気分じゃないわ」

「なら、いつになれば踏み出す気分になるのじゃ？」

リゼの目が若干鋭さを増す。

「ここで踏ん張らねば、落ちていくだけだ」

……落ちていくだけ。

この依頼を受ける前、彼女はこの任務はやり遂げると誓った。

「ここで妥協するともう落ちていくしかない気がする」、「そうソフィーは言ったのだ。

「そうだけれど……」

「けれどもなにもないわ。ほれ、ここから先は帝都じゃ」

空港出入口のゲートをくぐる。

その先はまさしく異国情緒漂う

「共和国と変わらないわね」

「そうそう街並みなんて変わらんものじゃ」

漂う気がしないでもない、首都と変わらぬ光景だった。

「町というのは無駄がない。生活を営む間に最適化され、どこか似た風貌となっていくものじゃ。大戦を経て技術的にも共有するようになったことも要因……聞いておるか？」

その理屈は解る気がする。ニューヨークと東京なんてぱっと見では見分け付かないもんな。

高説など上の空で、溜め息を漏らすソフィー。

「きーてない」

ある種失礼なソフィーの反応に、しかしリゼは笑みを深めた。

「だが、少しは元気になったか。よしよし」

満足げにソフィーの頭を撫でる。

基本、世話焼きのお姉さんなんだよな、リゼって。

俺が言ってやりたい言葉を、ちゃんと伝えてくれる。

(……悔しい)

それは、なんて無様な感情だろう。

ありがたいことのはずなのに。俺の力不足を補ってくれる、感謝すべき存在なのに。

なんで、こんな嫌な気持ちになるのだろう。

「ここが、かの有名な雪姫広場じゃ！」

町の中心部、城が遠く見える場所にその広場はあった。

「有名なの？」

「帝都っ子の間ではな。観光名所というより、市民の憩いの場じゃ」

屋台や吟遊詩人が軒を連ねる、賑やかな大通り。

円状の広場には、多くの人々が行き交っている。

「雪姫広場の名は一人の女性に由来する」

リゼが楽しげに語り出した。

「なによ、急に」

「そこは黙って聞いとれ」

指先でソフィーのおでこをトンと押す。

「雪姫広場の名は一人の女性に由来する」

最初からやるらしい。

「終わりの見えない大戦、疲弊する国と人。その最中、この広場の中心に立ち両国の和平を訴え続けた女性がいた」

「……」

「女は毎日ここに立った。その演説はやがて大きな流れとなり、大戦と終わらせる切っ掛けとなった。雪姫広場の名はその名残なのじゃよ」

「ふうん」

ん、どうした？

ソフィーの様子が、なにかおかしい気がする。

「その容姿から雪姫と呼ばれた彼女じゃが、後になって人々は知ることとなった。彼女こそ帝国の姫君・マリンドルフ様である」と

お姫様が町に出て演説していたのか。

アグレッシブ姫君だ。略すとアグ姫。

「いやはや、大した胆力であるの。自分を隠し身一つで世界を変えてしまったのじゃぞ？ あっばれ！ じゃなあ」

「……知らないわよ、そんな人」

「知らんか、そうか。まあそうじゃろうな」

頷きつつ立ち上がるリゼ。

「この雪姫ソフトクリームが名物じゃな。雪姫のように真っ白、という触れ込みじゃ」

「ソフトクリームは元々白いものでしょ」

まったくくじゃ、と笑いつつ屋台でソフト2つを注文する。

「ほれ、どうじゃ？ 名物となる程度には美味しいじゃろ」

ソフィーの小さな口がソフトクリームの天辺を銜える。

「……あら、ほんとに美味し」

ぺろりと指を舐めるソフィー。

アイスを夢中で舐める彼女には、少しだけけれど笑顔が戻っていた。「そうじゃそうじゃ。美味しい物を食べるのは人生の楽しみの一つじゃ」

「太るわよ」

「む、ふうむ……」

宿敵のように手の中の氷菓子を睨むリゼ。

その様子に、ついにソフィーは嘔き出した。

「ぶっ、なにその顔……自分で買ったんじゃない、ふふっ」

「ふーんだ。お主も食って食って食いまくって、チビデブになっってしまうがよい」

「残念ながら、いくら食べても太らない体質よ」

「限度はあるじゃろ。自分の限界を超えるのじゃ、ソフィー！」

「いや」

普通の女の子の友達として、くだらない話題に花を咲かす。

やったことは外に連れ出して、ソフトクリームを奢っただけ。

それでも、俺はリゼを凄いと思った。

「のう、ソフィー」

「なに？」

「あまりフルネームで名乗るのはやめた方がいいぞ？」

「っ！」

あ、舌噛んだな。

「……なんのこと？」

「隠す気があるなら、尚のことじゃ。共和国ではともかく帝国では気付く者もおるやもしれん。これは、友としての忠告じゃ」

ソフィーは僅かに逡巡し、

「覚えておくわ」

とだけ答えた。

あー、もう。お前らだけで話をするな！

## 一言後書

オリジナルの機体名が増えていくと混乱しそうなので、色々考えたのですが、モデルとなった機体名に戻しました。

ナイトメア イーグル

ハツネ21式 ミグ21

コルトは気に入っているのでそのままです。

……しかし、ヒロイン吐いてはっかだな。ゲロインって奴が。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8235v/>

---

銀翼の天使達

2011年10月3日03時29分発行